

博士学位論文（東京外国語大学）
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏 名	ジャスル ヒクマトラエフ
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 201 号
学位授与の日付	2015 年 9 月 9 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	20 世紀初頭のトルキスタンにおける教育改革 ージャディード知識人の試みー

Name	Jasur Khikmatullaev
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 201
Date	September 9, 2015
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	The educational reform in Russian Turkestan in the early 20 th century - Focusing on attempts of Jadid Intellectuals -

博士学位論文（東京外国語大学）
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

20 世紀初頭のトルキスタンにおける教育改革
ー ジャディード知識人の試み ー

総合国際学研究科
国際社会研究コース
担当教員 岡田 昭人 教授
小松 久男 教授
鈴木 義一 教授
学籍番号 5512012
氏 名 Jasur Khikmatullaev
ジャスル ヒクマトラエフ

まえがき

私が初めて来日したのは、2005年10月のことであった。来日の目的は、交換留学生として、東京外国語大学で勉学に励むためであった。その年の秋に、私は岡田昭人先生に出会った。当時、岡田先生は留学プログラム ISEPT における私の担当教員であった。初めての留学の間、岡田先生にお世話になり、岡田先生の「比較教育」という講義にも参加していた。その講義のおかげで、教育の分野に興味を持つことができた。この留学の間、日本語だけではなく、日本の文化・社会・教育について、広範に勉強した。そして、2006年8月に帰国し、タシュケント国立東洋学大学で勉強を続け、2007年に卒業した。

その後、2008年に再び在ウズベキスタン日本大使館推薦研究生として、再度東京外国語大学に留学に来了。この際も、岡田先生のもとで「ウズベキスタンの留学生送り出し政策」というテーマについて研究を行った。そして、2010年4月に本大学の大学院博士前期課程・国際社会研究コースに進学し、岡田昭人ゼミに所属した。博士前期課程では、鈴木義一先生、大川正彦先生、倉石一郎先生、野本京子先生の担当授業を受講し、国際社会、歴史、教育、比較教育、中央アジア・ロシア経済などに関する知識を深めた。博士前期課程では、「独立後ウズベキスタン共和国における教育制度の変遷 ―「国家人材育成プログラム」を中心に―」というテーマで修士論文を執筆した。修士論文執筆後、指導教員の岡田昭人先生、副指導教員の鈴木義一先生、倉石一郎先生らに、「ウズベキスタンの教育の成立過程、つまり教育の最初の段階から研究したほうがいい」というコメントを頂いた。それをきっかけに、私はウズベキスタンの教育の歴史に興味を持ち始めた。そして、博士後期課程では、ウズベキスタンの教育の歴史について研究しようと決めた。

2012年3月に博士前期課程を無事に修了し、同年4月から博士後期課程に進学した。私は自分の修士論文に不満を感じていたため、博士後期課程では真剣に勉強し、よりよい論文を書きたいと思っていた。そこで、私の人生でとても重要で嬉しい出来事が起った。それは、小松久男先生との出会いであった。実は、2012年4月から小松久男先生が本大学に特任教授としていらっしゃることを噂で聞いていた。私は、小松先生が非常に厳しい怖い先生だと思っていたが、実際にお会いしたとき、非常に気さくで優しい先生であることが分かった。その後、私は博士論文を早く書き終えるために、博士後期課程に入学後すぐに、岡田昭人先生、小松久男先生、鈴木義一先生に本格的な指導を仰ぎたいと申し出た。

博士後期課程の1年目から、先生方と研究テーマについて相談し、様々なコメントを頂いた。その結果、博士論文のテーマを「20世紀初頭におけるトルキスタンの教育改

革」に決めた。そして、1年生のときに、「ジャディード運動」に関する勉強を始めた。具体的には、「ジャディード運動」についての論説を、小松先生の指導の下で、読んでいった。まず、雑誌『シューラー』に掲載されたベフブーディーの論説を読み始めた。しかし、この雑誌はアラビア文字で書かれていたため、私にとって非常に難しかった。私は島田志津夫先生に“Eski o‘zbek yozuvi”『古ウズベク文字』という本を借りて、アラビア文字の読み書きを勉強し始めた。アラビア文字をスムーズに読めるようになるまで、およそ1年間かかった。次に、小松先生に Sh.リザエフの著作“Jadid dramasi”『ジャディード戯曲』をいただき、授業中にその本の分析をした。さらに、両親にウズベキスタンから、「ジャディード運動」に関する数多くの文献を送ってもらい、ジャディード運動について熱心に勉強し始めた。

博士後期課程の1年目から、私の研究分野に近い学会に入会し、様々な学会で発表するように岡田先生に助言をいただいた。そして、三つの学会（「日本国際教育学会」、「内陸アジア史学会」、「日本中央アジア史学会」）に入会し、これらの学会の発表大会に参加した。以下から、私の学会発表および論文の内容について示す。学会発表は5回行った（「独立後ウズベキスタン共和国における教育制度の変遷 — 「国家人材育成プログラム」を中心に—」、「教育と戯曲 トルキスタンにおけるジャディード知識人の試み」、「近代トルキスタンにおけるジャディード運動 —ベフブーディーの教育論を中心に—」、「19世紀末—20世紀初頭のトルキスタンにおける社会問題 —特に人生儀礼（hatna, to‘y, aza）について—」、「Questions of nationality and educational reform in Russian Turkestan ロシア領トルキスタンにおける民族と教育改革に関する議論」）。

次に、論文についての実績を示す。東京外国大学の雑誌『言語・地域文化研究』の第20号に私の研究ノート「近代トルキスタンにおけるジャディード運動 —ベフブーディーの教育論を中心に—」が掲載され、雑誌『クアドランテ』の第17号に研究ノート「20世紀初頭のトルキスタンにおける社会問題 —特に人生儀礼（xatna, to‘y, aza）について—」が掲載された。さらに、2014年10月にコロンビア大学で開かれたシンポジウム“Asia and Africa Across Disciplinary And National Lines – Consortium for Asian and African Studies (CAAS) 5th International Conference –”に参加し、*Questions of nationality and educational reform in Russian Turkestan* という題で発表した。この論文も2015年3月に雑誌“Asia and Africa Across Disciplinary And National Lines”に掲載された。

以上の研究成果を準備する際の問題点としては、日本で手に入れることが難しい史料をどのようにして手に入れるか、という問題であった。しかし、その問題は、小松久男先生と島田志津夫先生の研究室によって解決された。彼らの研究室には、19世紀末から20世紀初頭に関する史料、雑誌、新聞、モノグラフなどが数多く保管されている。本研究で、最も多く使った雑誌『アーイナ』のコピーも小松久男先生に提供していただいた。

さらに、研究室で手に入らなかった文書、史料を探すために東京外国語大学の「卓越した大学院拠点形成支援補助金」を使って、ウズベキスタンに 2 度行ってきた。このようにして、最初の 2 年間で史料収集と分析に力を入れ、3 年目から論文を本格的に書き始めた。

私は 2008 年研究生として日本に来る直前にウズベキスタンの大学時代の後輩と結婚し、日本に連れてきた。2010 年に長女のムビナが生まれ、3 年間後、2013 年に次女のムヒバも生まれ、家族が大きくなった。3 人とも私の側で私をずっと支えていたが、博士後期課程 3 年目に入ってから、彼らの世話をするのが時間的にも経済的にも難しくなり、2013 年 10 月にウズベキスタンに送ることにした。このようにして、私は博士論文を書き続けた。

本論文の完成にあたり、私を指導・応援してきた方々に対しては、感謝の意を表したい。まず、私を 2005 年から指導し、学術的だけではなく、プライベートな生活も応援し、支えていただいた岡田昭人先生に心より感謝を申し上げたい。振り返ってみれば、ちょうど 10 年前に先生と出会ってから、一貫してご指導いただいた。先生のご指導のもとで、ご専門の教育学のみならず、研究論文の課題設定、研究方法についても勉強することができた。先生と巡り合う機会がなかったならば、私はここまで進むことができなかっただろう。

さらに、小松久男先生にも心から深く感謝の意を表したい。もし小松先生と巡り合う機会がなかったならば、本論文の完成はなかったと自信を持って言える。先生に出会ってから、論文の書き方をはじめ、ジャディード運動についても本格的な指導をいただいた。そのおかげで、私は学術論文を書くということがどういうことか、深く理解できた。小松先生は、本論文を、最初から最後まで、1 ページずつ細かく見ていただき、コメントやご指導をしていただいた。この論文で使った雑誌『アーイナ』をはじめ、他の史料、著作などの 9 割が小松先生にいただいたものである。小松先生は何から何まで私の都合に合わせていただき、本来、大学にいらっしやらないときも来ていただいたときが多い。私はこの論文を書けたのは小松先生のおかげである。改めて小松先生に心よりお礼を申し上げたい。

さらに、博士前期課程、博士後期課程を通して指導していただいた鈴木義一先生にも御礼を申し上げたい。先生は、博士前期課程の頃から私を暖かく指導し、中央アジア・ロシアの教育に関する資料、教科書をたくさん提供していただいた。鈴木義一先生の専門分野は経済学であることにもかかわらず、ゼミを私の研究に合わせていただいた。この場をお借りして、心よりお礼を申し上げたい。

また、博士前期課程の頃から島田志津夫先生、大川正彦先生、倉石一郎先生、野本京子先生にも大変お世話になった。島田先生もこの論文が完成するまで、様々なコメントをいただき、数多くの教科書、史料を提供していただいた。特に、島田先生にいただいた雑誌『アーイナ』のインデックスは、私の研究に非常に重要な位置を占めている。大川正彦先生は、研究生、博士前期過程のときに指導していただき、ハーリドのエッセーなどをいただいた。以上の先生方にも、この場を借りて、お礼を申し上げたい。

また、先輩、同輩、後輩からも、多くの助言と励ましをいただいた。皆さまに感謝を申し上げたい。

また、学会で発表のチャンスをいただいた「日本国際教育学会」、「日本中央アジア学会」、「内陸アジア史学会」の関係者にも感謝の念を表したい。

さらに、歴史的な文書と史料を提供していただいたウズベキスタン国立文書館とウズベキスタン国立図書館の方々にも深く感謝したい。

最後に、離れながらウズベキスタンからプライベートを支えてくれた両親、弟、姉と妻のカモラ、2人の娘にも感謝の気持ちを伝えたい。

上記の方々の力なしに、この論文は完成できなかった。改めて私を支えていただいた方々に心より感謝を申し上げたい。

日本では中央アジア、特にウズベキスタンについての研究する方々は増えているが、ウズベキスタンの教育改革に関する研究はまだ少ない。この論文は、これからウズベキスタンの教育改革を研究する若手研究者の資料になることができれば、私のささやかな幸せとするものである。また、この論文は、ウズベキスタンの今後の教育展開になんらかの示唆を与えることができれば幸いである。

2015年9月20日

ジャスル・ヒクマトラエフ

目次

序章	8
本論文の研究視角	8
問題の所在	8
教育を取り上げる意義	8
20 世紀初頭を取り上げる意義	11
研究の目的	12
先行研究の整理	12
研究方法と史料	16
本論文の構成	18
第 1 章	19
20 世紀初頭のトルキスタン	19
第 1 節 政治・社会的、文化的な状況	19
第 2 節 ロシアによる征服とトルキスタンの変容	21
小結	30
第 2 章	31
近代教育の展開	31
第 1 節 旧来の教育	31
20 世紀初頭のマクタブ	31
20 世紀初頭のマドラサ	36
第 2 節 ロシア語・現地語学校の導入	40
第 3 節 新方式学校の創設者ーイスマイル・ガスプリンスキー（1851-1914）	45
ガスプリンスキーの教育改革構想	46
トルキスタンへの旅	50
小結	51
第 3 章	53
トルキスタンにおけるジャディード運動	53
第 1 節 ジャディード運動の展開	53
民衆の啓蒙運動としての新方式学校	57
女子教育	59
トルキスタンにおけるジャディード演劇の誕生	61
教育問題をめぐる議論	66

ジャディード運動が直面した障壁.....	68
第2節 ベフブーディーと彼の活動.....	72
第3節 雑誌『アーイナ』について.....	77
小結.....	80
第4章	82
ベフブーディーとムナツヴァル・カリの教育論	82
第1節 ベフブーディーの教育論.....	82
第2節 ムナツヴァル・カリの教育論.....	91
小結.....	97
第5章	99
教育改革と社会問題をめぐる議論　ー人生儀礼ー	99
第1節 20世紀初頭のトルキスタンにおける人生儀礼について.....	99
割礼.....	100
結婚式.....	101
葬式.....	101
第2節 戯曲『割礼 to'y』.....	102
第3節 戯曲『不幸な花婿 Baxtsiz kuyov』.....	104
第4節 ベフブーディーの論説「我々の希望もしくは願望」.....	108
第5節 人生儀礼から教育改革へ.....	112
小結.....	115
終章	116
民族名称問題とトルキスタン自治論	116
第1節 民族名称サルトをめぐる問題.....	116
トルキスタンのムスリムに対するロシア人の見解.....	116
「サルト」に対するジャディード知識人の見解.....	118
第2節 ベフブーディーの自治論.....	121
第3節 ジャディード運動の歴史的、現代的な意義.....	127
第4節 総括と今後の課題.....	128
参考文献リスト	132
参考資料	136

序章

本論文の研究視角

問題の所在

本論文では、20 世紀初頭のトルキスタンにおけるジャディード運動の歴史的展開を検討する。当時の初等教育機関としてはマクタブ、ロシア語・現地語学校と新方式学校が存在していたが、とりわけ新方式学校はいかなる方法で広まり、民衆はどのように「新方式」学校を受け入れたのかを明らかにしたい。具体的には、ジャディード運動の指導的な知識人であるベフブーディー、ハージ・ムイーン、ムナツヴァル・カリらの著作、戯曲、詩などの分析を通じて、彼らの教育論を比較したうえでベフブーディーの教育論の特徴について考察することを目的とする。

この試みは表裏をなす二つの意図を含んでいる。第一は、「なぜ同じ時代に 3 種類の初等学校が存在していたのか」という設問に答えることである。第二は、「当時の知識人の真の目的は何だったのか」を解明しようとするものである。問題の所在を明確にするために、次のような問いに答えることから議論を始めることとしたい。「なぜ教育なのか」と「なぜ 20 世紀初頭なのか」という設問である。

教育を取り上げる意義

ウズベキスタンは、1991 年の独立以降、市場経済への移行に取り組んでおり、経済や社会も様々に変化してきた。教育の分野も例外ではない。独立以降の教育システムはソ連時代の教育システムと大きく異なり、1992 年 7 月 2 日に第 1 の法律、「教育に関する法律」が制定された。この法律の制定以降、様々な活動が積極的に行われた。幼児教育では、「家庭保育所」、「非政府的保育所」などの保育所が設立された。一般教育分野では、高等学校の「リセ Litsey」と「カレッジ Kollej」といった新しいタイプの教育機関が設立され、新たなカリキュラムも作成された。しかし、「教育に関する法律」は急速に発展しつつあるウズベキスタンの社会的要求と現状に対応できていないと認識された [Yo‘ldoshev J.G‘ 2000: 11]。そこで新たな教育プログラムが必要になり、1997 年 8 月 29 日に「人材育成に関する国家プログラム」が策定され、「教育に関する法律」も改正された。「人材育成に関する国家プログラム」では、義務教育制度が 9 年制から 12 年制に変わり、「アカデミック・リセ Akademik Litsey」と「職業カレッジ Kasb-hunar kolleji」が拡充されたりするなど、教育改革が進展した。また、「職業カレッジ」の施設整備や学校経営の見直し、カリキュラムの見直し、教師の再訓練、教科書の作成などに国を挙

げて取り組み、新しいシステムによる技術・教育および学術研究の水準向上を目指している[ヒクマトラエフ 2012: 3]。

アカデミック・リセでは、大学進学を主目的としており、一般教養科目と専門教育科目の両方が教えられる。これに対して、職業カレッジでは、実際の現場で働く人材を育成するための職業技術が教えられる[トフタミルザエヴァ 2014: 158]。

こうした改革の実現においてはイスラム・カリモフ大統領のイニシアティブが大きい。カリモフ大統領は独立前から教育開発に注目し、1988 年から様々な新聞や雑誌などで教育改革に関する論説を書いたり、内閣の会議では教育開発について発言したりしてウズベキスタンの教育改革に着手した。例えば、新聞『カシュカダリヤの真実 Qashqadaryo haqiqati』の 1988 年 5 月 24 日号では、「国民の一般教育と専門知識のレベルを上げること、新たな要請に基づき国民の識字率を上げること、一貫した教育システムを形成することが最も大事な課題である」と論じている[Qurbonov 1999: 90]。また、この記事の続きでは「国民が深く高い教育を持っていなければ、我々の将来の課題を達成することはできないこと、また、発展できないことをはっきり理解する必要がある」と述べている。この発言がなされた時代を振り返って、当時の社会的・政治的な状況をみると、それはソ連の崩壊が近づき、様々な民族の間に摩擦が生じていた時代である。犯罪率も非常に高く、夜になると外に出るのが危なくなっていた。こうした時期に、なぜもっとも重要な課題として教育開発が取り上げられていたのだろうか。これについてカリモフ大統領は『教師新聞 O‘qituvchilar gazetasi』の 1989 年 10 月 28 日号で以下のように論じている。

我々の将来を考慮に入れて、また、将来、我々の仕事を受け継ぐ若者のために様々な条件を与えることと彼らの将来について配慮するのであれば、まず、若者の育成に対する我々の取り組みを変える必要がある。できる限り知識の高い若者をソ連の代表的な機関、また、外国に送らなければいけない。必要に応じて新たな知識、新たな技術を習うために日本、アメリカ合衆国などの先進諸国へ送り、彼らの勉強と研究に必要な環境を与えなければならない。我々の経済と生活の変化はこれと関連している。もしこのようなことをしなければ、このままでは発展するのが困難である。人材をさらに強く育成し、彼らを信頼して応援しなければ、どの分野でも今の状況を変えることは無理である[Qurbonov 1999: 50]。

このようにしてカリモフ大統領は独立前から教育改革に取り組み、独立後もその試みを続けた。上に述べたように独立後「教育に関する法律」が制定され、ついで「人材育

成に関する国家プログラム」も策定された。このようなプログラムによってウズベキスタンの教育分野は大きく変化してきた。それでは、ウズベキスタンの近代教育はいつからいかなる形で成立し始めたのか。筆者もまた国が発展するためには教育の発展が必要だと考えている。したがって、教育の発展のためにもその歴史を研究しなければならないのである。

どの社会の発展においても教育は大きな役割を果たしている。19 世紀後半にトルキスタン征服したロシア帝国は、この地域を帝国に統合しようとした。当時、トルキスタンには古くから初等学校のマクタブとイスラーム諸学を教える高等学院すなわちマドラサからなる教育制度が存在していた。マクタブではアラビア文字の読み書きやイスラームの基本的教理が教えられ、ペルシア語で書かれた詩の暗誦も行われていた[ヒクマトラエフ 2014: 388]。しかし、このようなマクタブやマドラサの教育効果は十分ではなかった。ロシアは、まずロシア人生徒のための学校を設立し、後にロシア人と現地の生徒のための学校を開校した。この学校は「ロシア語・現地語学校」と呼ばれるようになった[Muxammadjanov 1978: 39]。しかし、トルキスタンはイスラームの伝統が根強い地域であり、人々は子弟のロシア化を恐れて、ロシアの学校に送ることはしなかった。

19 世紀末になると、旧来のマクタブは時代の要請に対応できていないことがロシア領内のムスリム知識人にも認識され始めた。まず、クリミア・タタール人のガスプリンスキーが 1884 年にクリミアのバフチサライに新方式学校を開校した。彼はまた、新聞『テルジュマン（翻訳者）Tarjuman』の創刊でも知られている。新聞『テルジュマン』はトルキスタンの知識人の啓蒙にも大きな影響を与えた。民衆に発展と自由をもたらすのは教育だと考えたトルキスタンの知識人は、教育に力を入れ、新方式学校を開校し始めた。20 世紀初頭にタシケント、サマルカンド、ブハラ、フェルガナ地方には数 10 校以上の「新方式」の学校が開かれていた。ハージ・ムイーンによると 1901 年からコーカンドとタシケントに、1903 年からサマルカンドにも「新方式」学校が開かれた。しかし、A.ムハンマドジャノフによると、より早く 1900 年にブハラの近くにモッラー・ジョラバイによって新方式学校が開かれた。同年タシケントでも「新方式」学校が開かれたという。ここではムナツヴァル・カリ・アブドゥラシドハノフが教師を務めていた[Muxammadjanov 1978: 52-53]。

このような新方式学校はトルキスタンの大都市により多かったが、4-5 年経つと減少した。その理由は、教科書の不足ならびに教師が教授法を知らないことにあった。その後、ようやくウズベク語の教科書が作成されると、それと同時に新方式学校の数も増え始めた[Hoji Muin 2005: 133-134]。

こうしてトルキスタンでも新しい教育方式が登場し、民衆の啓蒙運動が始まった。上にも述べたように国や社会の発展のために教育は必要不可欠であり、トルキスタン社会

の発展においても教育は大きな役割を果たしたと考えられる。そこで、19 世紀末～20 世紀初頭の教育事情を検討する必要がある。

20 世紀初頭を取り上げる意義

本論文では、20 世紀初頭、つまり、ロシア帝国がロシア語・現地語学校を開校した 1884 年から、1917 年のロシア革命までの時期を対象とする。この約 30 年の間にウズベキスタン教育史には大きな変容があった。この時代トルキスタンはロシアの植民地であり、社会・経済的に困難な状況にあった。ロシア統治以前の教育制度は整っていなかった。トルキスタンでは寺子屋式のマクタブと高等学院のマドラサしか存在していなかった。イスラームの伝統が根強い地域を支配することはロシア帝国にとって困難であった。そこで、ロシアは摩擦を起こさずに支配する方法を選び、ロシア人とムスリムの生徒のためにロシア語・現地語学校を開校し始めた。ロシア当局は当初ロシア語のクラスを導入することによってマクタブを改革しようとしたが、民衆は伝統的なマクタブの改革に賛成しなかった。そのため、マクタブとは別に、ロシア語・現地語学校を開校しなければならなかったのである。このような学校ではロシア語クラスとムスリム・クラスという二つのグループに分けて教育を行うようになった¹。その背景には、教育を通してロシアの文化を普及させようという意図とともに旧来の寺子屋式のマクタブは時代の要求に対応できていないという判断があった[ヒクマトラエフ 2014: 387]。

しかし、ムスリムは児童のロシア化を恐れ、ロシア語・現地語学校にはなかなか子弟を送らなかった。この状況を理解し、教育を改革しなければいけないと考えたのがジャディード知識人である。ジャディード知識人は新方式学校を開校することによって問題を解決しようとした。ジャディード知識人はトルキスタンの民衆を啓蒙し、トルキスタンの社会・政治・経済的な状況を改善しようとしたが、とりわけサマルカンドのジャディード知識人ベフブーディーはトルキスタン自治の実現のためにもっとも積極的に活動し、その目的で新方式学校を開校したことが注目される。

このようにトルキスタンには初等学校の役割を果たす 3 種類の学校が同時に存在していた。それは、マクタブ、ロシア語・現地語学校と新方式学校である。これらの学校は児童にどのような教育を与え、その目的は何だったのか。そして、これらの学校にはどのような共通点と相違点があるのか。また、現在のウズベキスタンの教育の成立にとって、これらの学校のいずれが大きな役割を果たしたのかは興味深い問題である。そこで本論文では 3 種類の初等学校が存在していた 20 世紀初頭のトルキスタンにおける教育改革を考察することにした。

¹ TsGARUz f.I-1, op.31, d.540, 49ob.

研究の目的

本論文の目的は、トルキスタンにおける教育改革運動はいかなる要因でどのように展開したのかを検討することである。そこで、その背景として、20 世紀初頭のロシア統治下のトルキスタンの政治的および社会・経済的な状況を調べる。その上で 20 世紀初頭のムスリム知識人の論説、書籍、論文などを分析することで、彼らの教育運動とその思想を明らかにすることを本論文の目的とする。あわせて、教育改革をトルキスタンのムスリムはどのように受け入れたかを明らかにしたい。

先行研究の整理

ここでこの課題についての先行研究を整理しておこう。先行研究は次の二つの段階に分けることができる。

A. 帝政ロシア・ソ連期の研究

B. ペレストロイカ以降の研究

以下、代表的なモノグラフや論説などの内容を紹介し、整理したい。

まず、帝政ロシアとソ連期の先行研究を見てみよう。19 世末のトルキスタンにおける初等教育についての研究としては、オストロウーモフ²の「トルキスタンにおけるムスリムのマクタブとロシア語・現地語学校」（1913）がある。この論文は、マクタブとロシア語・現地語学校のシステム、カリキュラム、施設などについて最も早く解説したものの一つである。オストロウーモフはここで、マクタブはいかなる目的で開かれたのかについて述べている。教育施設についても詳しく紹介し、マクタブの数、入学費、使用されていた教科書などについても述べている。オストロウーモフは、このようなマクタブは教育や衛生的な面などで近代社会の要請に応えることができないと結論づけている。ロシア語・現地語学校についても述べ、使用されていた教科書などについて説明している。また、アルジェリアにおけるフランス語学校（フランス語・現地語学校）の例をあげ、ロシア語・現地語学校と比較している。彼はロシア語・現地語学校に関しては、「トルキスタンの生徒の成績によれば、ロシア語現地語学校は成功した」と結論づけている。

² オストロウーモフ [Nikolai Petrovich Ostroumov, 1846-1930] は、トルキスタンで活躍した東洋学者、教師である。カザンの神学校でイリミンスキーらに学び、テュルク諸語を修めると同時に異族人教育の専門家として訓練を受けた。1877 年トルキスタン地方国民学校視察官としてタシュケントに赴任し、『トルキスタン地方新聞』の編集長を努めた。トルキスタンのロシア人の多くが現地の文化・慣習に無理解・無関心であった中で、オストロウーモフはそれを理解するために多大な努力を払ったことは事実である。『中央ユーラシアを知る事典』100 頁を参照。

オストロウモフのこの研究はマクタブについて知るうえで有益だと思われる。しかし、1913年には既に存在していた新方式学校については述べていない。以前から存在していた寺子屋式のマクタブと比較することでロシア語・現地語学校の特徴を明らかにしているが、初等教育の実状を知るためには、ロシア語・現地語学校と同時に開かれはじめ、世俗的な教育も行っていた新方式学校との比較が必要ではないかと思われる。

M.B.サリホフ[Salihov 1935]は、ウズベク演劇について詳しく考察している。当時の代表的な演劇を分析し、知識人がなにを伝えようとしたのかについて書いている。また、それぞれの戯曲を批判的に検討し、その弱点や欠点などについて述べている。

ソ連期になると多くの研究者がモノグラフや論文を書き始めた。しかし、当時ジャディード運動に関する研究を自由に行うことはできなかった。この時代に発表された研究の多くは、ソビエト・イデオロギーに相応しい形で書かれていたが、以下の研究はジャディード運動についてなお参照に値する。ベンドリコフの著作[Bendrikov 1960]は、伝統的な寺子屋式の学校マクタブをはじめ、20世紀初めまでのトルキスタンにおける教育事情について詳しく論じている。

バルトリド[Bartol'd 1963 原著は1927年刊]は、ロシア統治期の社会・経済・文化的な状況を詳しく検討している。その中で、ロシア当局のロシア語・現地語学校、ムスリム学校、タタール人の新方式学校などについて考察している。また、トルキスタンにロシア人が移住してきてからの変化についてもふれている。この文献はトルキシタンの当時の状況を理解するうえで貴重な文献である。

ムハンマドジャノフの著作[Muhammadjanov 1978]は、ウズベク人の19世紀から20世紀初頭までの学校、教育思想、教育の内容などについて考察している。

ここまで帝政ロシアとソ連記の研究を見てきたが、次に、ペレストロイカ以降の研究を整理してみよう。ペレストロイカ以降、とくにウズベキスタンの独立以来、ジャディード運動に関する関心がたかまり、数多くの研究がなされるようになった。リザエフ[Rizaev 1997]は、トルキスタンにおける演劇の出現と成立、また、ジャディード戯曲を考察している。トルキシタンの演劇に関するヨーロッパ演劇の影響についても述べている。さらに、トルキシタン最初の劇団であるトゥラン劇団についても詳しく検討している。また、ジャディード戯曲が直面した障壁についても述べている。

イルガシェヴァ[Irgasheva 1997]は、19世末-20世紀初頭のトルキシタンにおける社会と教育の諸問題について詳しく検討し、またタシケントの指導的な知識人ムナツヴァル・カリ(1878-1931)の教育論、彼が設立した新方式学校などを分析している。さらにムナツヴァル・カリが残した教育論が現在の教育にどのように役立ったのかについて考察している。

シャリポフ[Sharipov 2002]は、トルキスタンについて考察し、トルキスタンとトガン³について検討している。さらに、ジャディード運動と当時の家族に関するジャディード知識人の見解について考察している。また、ベフブーディーの活動についてもふれている。

ジャディード運動についてペレストロイカ以降行われた研究の中でダリモフ[Dolimov 2006]のモノグラフも重要な研究である。ダリモフは、トルキスタンにおける新方式学校の誕生と成立について詳しく考察している。また、ジャディード知識人とイスラーム保守派の対立、ブハラ・アミール国とヒヴァ・ハン国における新方式学校の成立過程、さらに、新方式学校の発展における慈善団体の役割も検討している。

ウズベキスタンにおけるジャディード運動の代表的な研究者であるカシモフ[Qosimov 2002; 2011]は、ジャディード運動の全体像を検討し、ジャディード知識人による出版活動、社会問題をテーマにした創作活動を詳細に分析している。さらに、ジャディード運動の代表的な知識人の活動について個別に検討している。しかし、カシモフのモノグラフ[Qosimov 2002]にジャディード知識人の比較は見られない。

アリモヴァの編集した論文集[Alimova D.A., 2001]には、紀元前 7 世紀からソ連期までのウズベキスタンの歴史に関する論文が集められている。アリモヴァは、民族解放運動としてのジャディード運動と国民国家に関するジャディード知識人の見解について検討している。

アブディラシドフ [Abdirashidov 2011] は、トルキスタンにおけるガスプリンスキーの活動やガスプリンスキーに関する当局の見解、オストロウモフとガスプリンスキーの思想の対立、トルキスタンにおける慈善団体やムスリムの出版活動について考察している。

カリモフ[N.Karimov 2011]は、ベフブーディーの人生と活動を研究し、ベフブーディーとガスプリンスキーとの関係について考察している。また、ウズベク文学における最初の戯曲『父殺し』の誕生過程を検討している。このモノグラフは、ベフブーディーの全体的構想を考えるうえで重要な手がかりを提供している。

ジャディード運動については、外国でも多くの研究がなされてきた。日本におけるジャディード運動の代表的な研究者である小松久男は『革命の中央アジアーあるジャディードの肖像ー』で特にブハラのジャディード運動を扱い、青年ブハラ人、チャガタイ談

³ ゼキ・ヴェリディ・トガン[Ahmet Zeki Velidi Togan (1890-1970)]は、ウファ県（現在のバシコルトスタン）のステルリタマク郡にて、地方のムッラーの家に生まれた。1912年から1915年の間、カザンのカーシミーエ・メドレセにてアラビア語、ペルシア語、チャガタイ語の諸学を修め、1912年には最初の著作『テュルクとタタール史』を出版した。その後、バルトリドらロシアの東洋学者と交流を深め、中央アジアにおける調査研究旅行に従事した。『中央ユーラシアを知る事典』381頁を参照。

話会、ブハラ革命、知識人のフィトラトなどについて考察している。また、新方式学校や出版物についても詳しく検討しており、本論文作成に当たって貴重な文献の一つである。

また、小松久男の編著『中央ユーラシア史』（2000）は、モンゴル、チベット、東西トルキスタンを中心とする中央ユーラシアの歴史について詳しく述べており、とくに、第7章の「革命と民族」では、中央アジアにおける革命と民族運動の展開とその後の民族問題についてふれている。その第3節では、1905年と1917年のロシア革命について詳しく書いている。20世紀初頭のロシア領トルキスタンの政治・経済的、文化的な状況を把握するうえで貴重な文献である。

島田志津夫〔Shimada 2002〕は『アーイナ索引』でベフブーディーの経歴と雑誌『アーイナ』を概観している。

ハーリドのモノグラフ〔Adeeb Khalid 1990〕は、ジャディード運動について英語で書かれた代表的な著作であり、19世紀末～20世紀初頭のトルキスタンにおける教育事情、改革運動の展開を詳しく分析し、ジャディードとイスラーム保守派の間の摩擦や植民地社会の成立についても検討している。

バルダウフ〔Baldauf 2001〕は、中央アジアにおけるジャディード運動と当時の知識人ベフブーディー、フィトラトなどの活躍について詳しく検討している。また、ベフブーディーの雑誌『アーイナ』も分析し、ベフブーディーの目的について述べている。さらに、チョルパン、カーディリー、フィトラトなどのジャディード知識人による民衆啓蒙への試みを詳しく分析している。

以上のように、ジャディード運動や当時の知識人について様々な研究が行われている。このようなジャディード運動研究の動向を踏まえて、本論文では、改めてジャディード運動を教育改革運動としての観点から検討し、ジャディード知識人の本当の目的と思想を明らかにしたい。これまでベフブーディーと他の知識人の活動をもとに20世紀初頭のジャディード運動を教育を軸として総合的に研究したものはまだ少ない。そこで本論文では、ジャディード運動の展開を概観した上で、ベフブーディーとムナツヴァル・カリの著作や論説などを分析することにより、両者の教育論を検討し、2人の思想を明らかにしたい。さらに、教育改革運動の点のみではなく、ジャディード運動の全体像の再構成にも寄与したいと考えている。そこで、20世紀初頭のマクタブとマドラサ、ロシア政府によって開校されたロシア語・現地語学校、ジャディード知識人によって開設された新方式学校の3者について検討する。また、当時の社会問題とされた人生儀礼に関するジャディード知識人の見解を考察する。最後に、トルキスタンの民族名称サルトをめぐる問題とベフブーディーの自治論について考察することにした。

研究方法と史料

本論文の方法としては、これまでの先行研究をふまえて、ジャディード知識人の書いた論説、記事、詩を通じて、ジャディード知識人の試み、教育論、啓蒙運動を見ていくという方法をとっている。ジャディード運動に関する史料は 1991 年のソ連解体以後、ようやく利用することが可能となった。ウズベキスタン国立図書館にはジャディード知識人の刊行した新聞や雑誌のコレクションがあり、またウズベキスタン中央国立文書館にはジャディード運動に関する豊富なアルヒーフが所在している。この 3 年間で地域研究のためにウズベキスタンに 3 度帰国し、ウズベキスタン国立図書館と国立図書館に保管されている史料やアルヒーフの中から特に重要な物を収集・整理してきた。これによりジャディード運動研究に必要な資料を整備することが可能となり、本論文の作成にも大いに役立った。

帝国ロシア時代の貴重な史料として当時のジャディード知識人が刊行していた雑誌・論説などもある。1905 年革命後、ロシア帝国ではタタール語で雑誌と新聞が多数出現し、急速に普及した。その影響を受け、トルキスタンでもジャディード知識人によって様々な新聞と雑誌が出版され始めた。彼らは『進歩 Taraqqiy』、『太陽 Xurshid』（1906 年）、『名誉 Shuhrat』、『商人 Tujjar』（1907 年）、『トルキスタンの声 Sado-i Turkiston』、『フェルガナの声 Sadoi Farg'ona』（1914 年）、『アーイナ Ayina』（1913 年）などの新聞や雑誌を刊行し始めた。本論文では、主に『トルキスタンの声』と『アーイナ』に掲載されている知識人の論説を分析する。この二つの雑誌には当時の教育状況、社会・政治的な問題などが詳しく論じられているからである。

『トルキスタンの声』は、ウズベキスタン国立図書館の「稀少図書部 Nodir kitoblar bo'limi」で手に入れることができた。『アーイナ』に関しては、小松久男教授の研究室にコピーが保管されており、全てを提供していただいた。『アーイナ』は、トルキスタンの近代史を研究する上でもっとも重要な史料の一つであり、多くの研究者が『アーイナ』を利用している。日本では、小松久男（1996; 1998; 2000; 2008; 2014）、島田志津夫（Shimada 2002）などであり、島田志津夫は、『アーイナ』の索引を作成し、その中にベフブーディーの経歴と雑誌『アーイナ』を概観している。また、ウズベク人のナーイム・ナルクロフ（Naim Norkulov）とカマリッディン・ラッビモフ（Rabbimov 2001）らも『アーイナ』を研究している。

さらに、ペレストロイカ以後、ウズベキスタンでは『青年 Yoshlik』、『東方の星 Sharq yulduzi』のような文芸雑誌にジャディード運動に関する研究や論説が多く見られるようになった。このような論説の中からもっとも重要なものを分析し、検討した。

また、独立以後、ナイム・カリモフ（Naim Karimov）、ベグアリ・カシモフ（Begali Qosimov）らによって、ジャディード知識人それぞれの『選集 Tanlangan asarlar』が発行された。これらの文献コレクションも貴重な史料として使用した。

本論文の作成に当たっては、以上の研究書、雑誌、新聞などを収集し、分析した。また、先行研究や関連文献などによってトルキスタンにおけるジャディード運動の歴史的展開を検討し、当時の教育運動の状況を明確にすることができた。

本論文の構成

以上のような問題意識と研究方法に基づく本論文は、序章と終章以外に 5 章から成り立っており、以下のように構成されている。

第 1 章では、20 世紀初頭のトルキスタンにおける政治・社会状況について述べる。次いで、マクタブとマドラサについて分析し、このような教育機関でどのような教育が行われていたのか、どのような教科書を使われていたのかを論述する。最後に、トルキスタンにおける女子教育について述べる。

第 2 章では、近代教育の展開を中心に述べる。特に、ロシア語・現地語学校について述べる。ロシア語・現地語学校はどのような目的で開かれ、何が教えられていたのか、そして、マクタブとの相違点についても考察する。次に、新方式学校の創設者イスマイル・ガスプリンスキーについて論述する。彼のトルキスタンでの活動とトルキスタンの知識人との関係について述べる。

第 3 章では、トルキスタンにおけるジャディード運動の展開について述べる。特にジャディード知識人が開校した新方式学校について論述する。次にベフブーディーの活動について詳しく述べ、彼の雑誌『アーイナ』がトルキスタンの教育の発展にはたした役割について考察する。その際、『アーイナ』に記載されている知識人の論説を分析する。また、最近ウズベキスタンで出版されている教科書やモノグラフなども分析する。

第 4 章では、代表的な知識人であるベフブーディー、ムナツヴァル・カリの教育論を検討する。2 人の知識人はどのような目的で教育を改革しようとしたのか、そしてどのような方法で活動したのかを明らかにする。それぞれの教育論を詳しく検討し、彼らの教育論に見られる共通点について述べる。

第 5 章では、20 世紀初頭のトルキスタンにおける大きな社会問題の一つである「人生儀礼」について考察する。具体的に結婚式 (to'y)、葬式 (aza)、割礼 (xatna) を取り上げる。また、当時トルキスタンで活動していた代表的な知識人が「人生儀礼」についてどのように考えていたのかを検討する。

終章では、以上の章での分析を踏まえた上で、ベフブーディーの自治論とトルキスタンの民族名称問題について検討する。また、20 世紀初頭のトルキスタンにおける教育改革を把握した上で、現代の教育への影響や関係について述べる。

第1章

20 世紀初頭のトルキスタン

本章では、ロシアにおける征服前後のトルキスタンの政治・社会・文化的な状況について述べる。以下、第1節では、19世紀のトルキスタンの当時の政治・社会・文化的な状況について述べ、第2節では、ロシアが征服した後のトルキスタンについて検討する。

第1節 政治・社会的、文化的な状況

19世紀のトルキスタンはブハラ・アミール国、ヒヴァ・ハン国とコーカンド・ハン国のウズベク系の3国からなっていた。ここでそれぞれのハン国の政治・経済的、社会的な状況を検討してみよう。ブハラ・アミール国の首都はブハラであり、中央アジアにおけるイスラーム教学の中心地であったため「ブハライ・シャーリフ Buxoroi Sharif」と呼ばれていた。その意味は、「神聖なブハラ」である。この国には様々な民族が住んでおり、住民の大多数はウズベク人であり、住民の57%を示していた。この地域にはタジク人、カザフ人、カラカルパク人、トルクメン人、キルギス人も住んでいた。ブハラ・アミール国の人口は約2百万であった[Tillaboyev 2010: 6-7]。ブハラでアミールに次ぐもっとも権力のある職はクシュベギ (qushbegi 宰相) であった。もっとも権威の高い宗教的な職はシャイフル・イスラーム (イスラームの指導者 Shayx-ul islom) であり、その次の職はカーディーである[Sodiqov 2011: 54-56]。カーディーは、イスラーム教の裁判官であり、カーディーにはイスラーム教が関係しているすべての法律問題に間する権限があった。

ヒヴァ・ハン国の中心であったヒヴァ市は2つに、内部のイチャン・カラ (Ichan qala) と外部のディシャン・カラ (Dishan qala) に分かれていた。ヒヴァ・ハン国の人口は約80万人であった。人口の大多数はウズベク人であり、トルクメン人も多かった。ヒヴァ・ハン国のもっとも権威のある職は、デヴァンベギ (devonbegi) であった。宗教とシャリーアの規定を監督するのは、同じくシャイフル・イスラームであった。社会秩序はミルシャブ・バーシ (警察長 mirshabboshi) が管理していた。[Tillaboyev 2010: 9-10]。

コーカンド・ハン国の人口はもっとも多く、約3百万人であった。コーカンド・ハン国の住民の大多数を占めたウズベク人は定住民であり、彼らの主な生業は農業、手工業と交易であった。カザフ人、カラカルパク人、トルクメン人とキルギス人の主な生業は牧畜であった[Tillaboyev 2010: 7-8]。また、コーカンド・ハン国にはユダヤ人、タタール人、インド人も住んでいた。コーカンド・ハン国でもクシュベギ、ディヴァンベギ、オタリク (君主の後見役)、シャイフル・イスラーム、カーディー、ヤサヴル・バシなど

の職があった[Sodiqov 2011: 60]。ここに見てきたように、いずれのハン国でも、イスラーム教の監督者、シャイフル・イスラームとカーディーが大きな権威を持っていたことから、諸ハン国はイスラーム的な国家体制を有していたことがわかる。これについて、小松久男は次のように述べている。

3 ハン国では、都市の商人や手工業者の支持もえて、中央集権的な国家体制の再編が進められた。マンガト、コングラト、ミングなど、いずれの支配部族ももはやチンギス・ハンの血統を誇示することはできなかったが、かわってイスラーム的な権威が用いられた[小松 2000: 332]。

このように、3 ハン国の国家体制は非常に類似しており、いずれにおいてもカーディーとシャイフル・イスラームは重要な職であったことがわかる。19 世紀後半になるとこれらの諸ハン国の間で対立が強まり、各国内でも政治・社会的な緊張が現れていた。これについて小松久男は次のように書いている。

(3 ハン国の) いずれも国内に割拠したウズベク諸部族あるいはトルクメン、クルグズ[キルギス]などの遊牧民の反抗を根絶するにはいたらず、さらに 3 国間の抗争はトルキスタンの政治・社会的な安定をたえずそこねていた。ロシア軍の侵攻を直前にしても、こうした状況に変化はなかったのである[小松 2000: 333]。

こうして、3 ハン国は相互に対立し、トルキスタンに統一は見られなかった。諸ハン国では専制的な統治が行われ、住民の生業は農業、商業、牧畜、手工業などであり、近代化とは遠く離れていた。これに関して、バルトリドはムッラー・アーリムの『トルキスタン史概説』（1915 年）に依拠して次のように書いている。

ロシア人の到来まで、ステップでは農業はあまり行われていなかった。原野の開墾のためにタシュケントから遠く離れるのは恐ろしいことだった。統治者が弱いのをいいことに、キルギズ人のトレたち[チンギズ・カンの男系の血統につながるカザフの君侯]は、農民から馬や牛、種を奪い、ときには彼らを殺害しさえした。交易の状態はもっと劣悪であった。オレンブルグやトロイツクに棉花や干しアンズ、クルミ、干しブドウなどの商品売りに行く商人たちがいた。そのためにカラヴァン・バシ[隊商長]の統率下に 100—200 人ほどが集められた。しかし、オレンブルグやトロイツクからの帰路、キルギズ人のトレたちは、ときにはザカ

ートの徴収という口実で、あるときはあからさまな略奪によって、彼らからロシア商品の一部を取り上げるのだった[バルトリド 2011: 205-206]。

ここからもわかるように、ロシアがトルキスタンを征服する前に、住民の主な生業は、農業や商業だった。しかし、それにもリスクは高く、様々な困難があった。ムッラー・アーリムによると、かつては治安も悪く、農業や交易を行うのにも危険がともなっていた。製品を生産するための工場もなかった。トルキスタンの経済発展は遅々としていたのである。しかも、民衆の大多数は読み書きができず、出版も発展してはいなかった。

トルキスタンにおけるロシアの侵攻は 1847 年から始まった。1847-1865 年の間にロシア軍はコーカンド・ハン国の北西部とタシュケントを征服する。まず、ロシア軍は 1852 年コーカンド・ハン国の要塞アクマスジド Oqmachit に攻撃を始めたが、敗北した。1953 年に再び攻撃を行い、アクマスジドを征服した。この要塞は「ペトロフスキー要塞 Petrovskiy floti」と名づけられた。1864 年にロシア軍の司命官チェルニャエフ (M.Chernyayev) とヴェリョフキン (N.Veryovkin) は、一方はペトロフスキー要塞（オレンブルグ）から、もう一方はヴェルヌィ（現在のアルマトゥ）からタシュケントへの侵攻を始めた。ロシア軍は 1864 年の秋にチムケント市を征服し、タシュケントへの侵攻を続けた。1865 年 4 月 29 日にチェルニャエフが指揮するロシア軍はタシュケントから 25 キロメートル離れたニヤズベック要塞を攻撃してタシュケントに迫り、6 月にこれを征服した。

第 2 節 ロシアによる征服とトルキスタンの変容

ロシアは、タシュケント征服後、1867 年にはここにトルキスタン総督府を設立した。最初の総督としてカウフマンが任命された。その後もロシアはブハラ、ヒヴァの両国とトルクメン地域への侵攻・征服を続け、19 世紀末になると、ロシア領トルキスタンは、セミレチエ州、シルダリヤ州、フェルガナ州、サマルカンド州、ザカスピ州の 5 州とアム川下流域右岸のアムダリヤ管区から構成されていた。ロシア軍はブハラ、ヒヴァ両国の領土にも侵攻し、圧倒的な軍事力でサマルカンド（1868 年）はヒヴァ（1873 年）を領土すると、両国を保護国として帝国に編入した[小松 2000: 334-335]。



図 1. 帝政ロシア統治下の中央アジア（小松久男 2000『中央ユーラシア史』より）

1914 年マフムードホジャ・ベフブーディーは、雑誌『アーイナ』の第 1 号に「トルキスタン」という記事を掲載している。この記事はトルキスタンの概要を、たとえば、次のように述べている。

トルキスタンは州、すなわちオブラスチ[州]に分けられており、州は郡、すなわちウエズドからなっている。各州に軍務知事「ウォエンノイ・グベルナートル」が任命されており、全トルキスタンを一人の総督「ゲネラル・グベルナートル」が管理し、当地の中心はタシケント市にある[Behbudiy 1913: 3]。

また、ベフブーディーはトルキスタンの人口構成も詳しく書いている。

Viloyat va uezd yeri 州と郡	marabbu chaqirim 面積（平方メートル）	1902 yildaki barcha xalqi 1902 年 総人口
Zakaspiyskiy Mavara Bahri ザカスピ州	Hazar 501 696	409 000
Ashqobad uezdi アスハバード郡	86 650	102 000
Karashnavodskiy クラスノヴォーツク郡	101 000	59 000
Mang'ishlaq マンギシュラク郡	160 254	67 000
Marv メルヴ郡	110 795	131 000
		50 000

Tajand テジェン	33 997	1910 年
Samarqand viloyati サマルカンド州	81 891	960 202
Samarqand sanjaqi サマルカンド郡	17 060	362 217
Dizah ジッザフ	43 410	241 343
Kattaqo‘rg‘on カッタクルガン	6 994	135 567
Xo‘jand フジャンド	14 477	221 245
		1904 年
Sirdaryo viloyati シルダリヤ州	441 837	1 629 000
Toshkand uezdi タシュケント郡	48 090	492 000
Avliyo ata アウリエ アタ郡	62 164	307 000
G‘azzaliy (Kazalinsk) カッサリー (カザリンスク)	58 528	155 000
Oq masjid Pirovskiy アクメスジッド (ペロフスク) 郡	90 136	148 000
Chimkent チムケント郡	95 820	314 000
Amu daryo qit‘asi アムダリヤ分区	97 098	213 000
Farg‘ona viloyati フェルガナ州	140 668	1 716 000
Marg‘ilon sanjaqi マルギラン郡	14 069	359 000
Andijon アンディジャン郡	13 233	386 000
Huqand コーカンド郡	13 110	402 000
Namangon	15 273	392 000

ナマンガン郡		
O'sh オシュ	24 880	174 000
Pomir パミール	60 000	2 700
Simercheniskiy Yeti su viloyati セメルチェ州（イエッティス）州	228 966	1 090 000
Veniy Almati Uezdi ヴェールヌイ（アルマトゥ）郡	45 588	248 000
Jarkent ジャルケント郡	25 587	136 000
Lipsinski リップシ郡	63 876	200 000
Qopol コパル郡	75 797	150 000
Pashpak ピシュペク郡	77 683	194 000
Parjivaliski ブルジェワリスク郡	40 435	163 000
Ja'mi 合計	1 395 057	5 604 362

表 1. ロシア領トルキスタンの人口構成（Mahmudkhoja Behbudi, 1913, “Turkiston”, *Oyna*, No. 1 より）

しかし、ベフブーディーは、1897 年に行われた国勢調査の際にムスリム民衆は正確な数字を教えなかったと言う。その理由は次のように説明している。

トルキスタンの住民の上記の数は少ない。実際、1897 年にロシア政府の命令で国勢調査が行われた。しかし、一方で調査官の怠惰、もう一方でムスリムは「ロシア政府の兵役のために連れて行かれる」あるいは「一人一人から税金が取られる」と考え、本当の数を提供しなかったために結果的に少ない数になった。上記の数字に 3 分の 1、むしろ 4 分の 1 を追加しなければいけない[Behbudi 1913: 5]。

また、ベフブーディーによると、トルキスタンの住民の 100 人の内 95 人以上はムスリムであり、各 100 人の内 4 人がキリスト教徒とユダヤ教徒であった[Behbudi 1913: 5]。

3 ハン国時代の中央アジアと違って、ロシア統治は、トルキスタンに政治・社会的な安定をもたらした[小松 2000: 336]。バルトリドによると、ロシア当局は、征服の初年から現地地の世論に呼びかけ、その代表者の助けを借りて政策を実行するように努めていた。最初にオレンブルグ総督クルィジャノフスキーがタシュケントの住民宛に 1865 年 10 月 29 日付け布告を出している。その内容は、タシュケントはロシアの保護下で独立した国家を形成すべきであり、その統治案の作成は、トルキスタン地方総督チェルニャエフに委ねられる、というものであった。しかし、これより早く、9 月 18 日に、タシュケント住民は総督宛に上申書を出していた。それは、タシュケントは、自分たちの中から長を選出することを放棄し、ウスク・キョル湖からアラル海までシル川を境界とするトルキスタン地方の統治を、「ザカートチとコルバシ、アクサカルならびにそれに類する役人」を任命する権利とともに、チェルニャエフ將軍に委ねることを求める一方、シャリーアによる裁定はカーディー[イスラーム法の裁判官]・カラーン、すなわち大カーディーに委ね、彼にはチェルニャエフ將軍の承認を得て、カーディーとウラマー[学者]、ムフティー[法学者]、ライース[宗教社会秩序の監督官]、ムタワッリー[ワクフの管財人]、イマーム[モスクの導師]の任命を求めていたのである。現地民の上申書では、大カーディー職の交替手続きについては何も触れられていなかった。明らかに、征服時にこの職にあった者がロシア当局から認証を受け、彼の後継者もまた総督の命令によって、ちょうどかつてハンの勅令によってなされていたように任命されるだろうと考えられていた。たしかに、こうした職務はしばしば父から息子へと継承されており、ロシア統治下でも同様に事が運ぶものと期待されていた。事実、チェルニャエフの命令によって大カーディー職に認証されたのは、その少し前にコーカンドのハン、サイイド・ムハンマド・スルタンの勅令によって同職に任命されたハキーム・ホージャであった。このことから、カーディーやウラマーなどが大カーディーに服属することに関する要望も、ロシア政府によってかなえられたことがわかる[バルトリド 2011: 123-125]。

ここまで、ロシア征服後のトルキスタンの政治的な状況について概観したが、次に社会・経済的な変化についても整理しておきたい。

ロシア帝国はトルキスタンを征服してから、この地域に近代化をもたらした。例えば、郵便や銀行、商館、裁判所、公証所、鉄道などがトルキスタンに出現した。ロシア当局はこの地域でロシア語とロシアの文化を広め始めた。最初の総督として着任したコンスタンチン・カウフマン (K.P.Kaufman 在任 1867-1882) はロシア文化の普及を試み、着任早々から帝政ロシアに従うよう住民に呼びかけた。帝政ロシアのために働く青年を育てるために教育が大事だと考えていたカウフマンは、トルキスタンの教育改革にも取り組んだ。最初にロシア人生徒のために初等学校を開校した。次に、ロシア人と現地の生徒

がともに勉強できる初等学校を開校した。このような学校は「ロシア語・現地語学校」と呼ばれた。

しかし、トルキスタンには古くからイスラーム教が根づいており、マクラブとマドラサからなる教育システムが存在していた。マクラブは初等学校の役割を果たし、アラビア文字の読み書きやイスラーム教の基本的教理が教えられ、ペルシア語で書かれた詩の暗記も行われていた。マドラサは高等学院であり、イスラームの法学や神学を教えていた。マクラブとマドラサでは主に男子生徒が勉強していた。女子生徒のための学校もあったが、非常に少なかった。

中央アジアの土地はとても肥沃であり、綿花の生産に非常に最適だった。これはロシア側も把握しており、トルキシタンの征服後、ロシアは綿花の生産を拡大した。これについて小松は次のように述べている。

トルキスタンにおけるロシアの経済政策の基本は、綿花の生産を拡大し、これを中央アジアの工業地域に結び付けることであった。その意味で、トルキスタンを中央アジアとザカフカースに結び付けた中央アジア鉄道の建設（1881－1906）は重要な意味をもっている[小松 1998: 38]。

こうして、ロシアがトルキスタンを征服してから、様々な変化が見られるようになった。例えば、町に街路灯、鉄道、郵便、電信、綿花関連をはじめとする工場が出現し、主な河川には橋がかけられた。これについて、バルトリドはムッラー・アーリムの『トルキスタン史概説』に依拠して次のように書いている。

今やトルキシタンのステップには平安が行きわたり、文化的なロシア人の統治は、郵便、電信、鉄道によって、中央アジアを知識と文化の世界世界に結びつけたのである。治安と安全が保証されているので、かつては大多数の隊商しか通過できなかったところが、いまや独行の旅人でも通行することができる。トルキスタン商品は売れ行きがよくなり、果実や毛織物、皮革、棉花、絹などの商品が、トルキスタンからロシア内地に高値で輸出されている[バルトリド 2011: 206]。

ここからわかるように、ロシアはトルキスタンに近代化をもたらし、トルキシタンの経済も徐々に発展するようになった。さらに、ムッラー・アーリムは帝政ロシアがもたらした近代化について次のように述べている。

ムスリムの統治期にはチルチク川、シル川、アム川などの河を渡ることは難しかったが、今ではそこに鉄橋が架けられている。タシュケントからトイテパまでの30-40 露里の距離は、沼地やアシの茂みのために以前なら1日、2日かかっていたが、今は3-4時間で行ける。むかし遠くの町へは馬やアラバ〔荷馬車〕で6ヵ月かけて行ったものだが、今は鉄道ならば六日で着ける。電信で交信するなら6分ですんでしまう。市内は路面電車や自動車で好きなところへ安く、すみやかに行くことができる。トルキスタンのどの都市や郡にも、綿繰り、製油、マッチ製造、マカロニ、製材、製鉄などさまざまな工場がある。ムスリムも工場を建て始め、そこから多くの収益を得ている。ろう管再生機、写真、映画、蓄音機など、むかしは聞いたこともないものが現れた。以前のランプは電灯に代わった。新しい発明品は人間だけではなく、動物にも益をもたらしている〔バルトリド 2011: 206-207〕。

現地民の知識人のこの発言からわかるように、民衆の生活に便利をもたらす近代的な要素がトルキスタンにロシアの征服とともに入ってきた。ムッラー・アーリムは、トルキスタンの経済的な状況も良くなったことを主張している。

資金もトルキスタンへ水のように流れ始めた。住民の富は10倍いやそれ以上に増し、貧民の手間賃も地価も著しく上がった。トルキスタンからロシアへは国庫に収められる土地税と商業税の形で2000-3000万ルーブルが出ていき、ロシアからはトルキスタンの文明を支えるために毎年4000-5000万ルーブルが入ってくる〔バルトリド 2011: 206〕。

この記述からもロシアからトルキスタンへ資金が入ってくるようになったことがわかる。民衆の富も増し、労働者の収入も増えたことがわかる。鉄道によってロシアと結ばれたトルキスタンの経済は発展し、交通や通信の手段は大きく改善され、「以前のランプは電灯に代わった」と、彼はロシア統治下での経済・文化発展にも注目している。ロシア人東洋学者のナリフキンもこれに近い議論をしている。

我々が中央アジアに入ってくると、現地ではロシア人の数が増えるとともに、現地民の労働への需要も高まった。現地民は家事使用人、御者、行商人などのような高収入の新しい仕事を手に入れた。我々が来るまで労働者は1日で10-15コペーカをもらっていたのに対し、今は20-25コペーカ、大工と左官は30-40コペーカをもらっていたのに対し、今は60-80コペーカをもらうようになった。ムスリムの

使用人の年間収入は 19 ルーブルだったのに対して、ロシア人の使用人として雇われると、月に 4~7 ルーブルをもらうようになった[Nalivkin 2011: 88-89]。

ここから、ロシアの征服とともに様々な仕事も生まれ、労働者の収入も増えたことがわかる。ロシアにおける征服後、トルキスタンの経済的な生活は徐々によくなり始めたが、すべてがよくなったわけではない。タタール知識人のアブデュルレシト・イブラヒム⁴ (Abdurreshid Ibrahim 1857-1944) は 1907 年末からトルキスタンを旅し、その旅行記のなかで諸都市の状況について書いている。彼はトルキスタンの諸都市は二つに分かれていると指摘し、次のように述べている。

タシュケントは外見は一つの都市にみえるとはいえ、中はあたかも二つの国のように、二つの「ダハ」に分かれており、一つの都市であるにもかかわらず、二様の行政が行われている。すなわちロシア人地区およびムスリム地区と呼ばれるのがそれである。〔中略〕。ロシア人タシュケントには、とても立派な建物や商店、整備された街路や舗道が造られ、電灯が設備されるなど、まるでヨーロッパにきたかのようなのである。しかし、ムスリムのタシュケントはこれとは対照的に、今から 500 年前にどのようなようであったにせよ、今もそのままである。〔中略〕。ロシア人のサマルカンドは清潔でにぎわっているのに、ムスリムのサマルカンドは泥沼の中。ロシア人のコーカンドは賑やかで整備されているのに、ムスリムのコーカンドは待歩であれ騎馬であれ通行することなどかなわない。ロシア人のマルギランもしかり、ムスリムのマルギランはやはりムスリムにふさわしくという次第！ [イブラヒム 2013: 8-9]。

イブラヒムのこの記述からは、ロシアによる征服後にトルキスタンの経済が発展を迎えたとしても、それは諸都市のロシア人が多く住んでいる地区に限られていたように見える。トルキスタンのどの都市にしてもロシア人が多く住んでいる地区では近代化がみ

⁴ アブデュルレシト・イブラヒム[Abdurreshid Ibrahim 1857-1944]はユーラシアを舞台に活動した汎イスラーム主義者のウラマー、ジャーナリスト、旅行家である。西シベリアのトボリスク県タラの出身であり、ブハラ系のタタール人である。1879 年オデッサ、イスタンブル経由で巡礼に旅立ち、マディーナでイスラーム諸学を修めた。帰国後、ウファのムスリム宗務協議会でカーディー職を務めた (1892-1894)。1905 年革命後はサンクト・ペテルブルグでタタール語やアラビア語の新聞・雑誌を刊行してロシア・ムスリムの覚醒に努め、ロシア・ムスリム大会の開催とロシア・ムスリム連盟の結成に尽力した。帝政の反動が始まると、トルキスタン、シベリア、満州、日本、朝鮮、中国、東南アジア、インド、アラビア半島を巡ってイスタンブルに至る大旅行を行い、各地のムスリム事情を観察して大旅行記『イスラーム世界』(全 2 巻、1910 - 13) を著した。1944 年 8 月に東京で亡くなった。『中央ユーラシアを知る事典』25-26 頁を参照。

えるようになったが、ムスリムが多く住んでいる地域は以前とあまり変わらないことを指摘している。なぜこのような状況になったのだろうか。ロシア政府は民衆から徴収する税金の大部分をロシア人が多く住んでいる地区の整備に使い、ムスリムが多く住んでいる地区には資金を支出しなかったのである。これについてイブラヒムは次のように述べている。

どこであっても、支配権はロシア人の手にあり、税金の使途も彼らの思うがまま。彼らの街路では全経費が税金でまかなわれているのに、ムスリム地区の街路には、何であれ一銭も支出されず、舗道も街灯もなく、なにもないのである[イブラヒム 2013: 9]。

このように、ロシア統治はトルキスタンにさまざまな変化をもたらした。トルキスタンでも近代化が見えてきたが、その一方で社会的な変化も現れた。トルキスタンではイスラーム教が主な宗教で、ロシアとトルキスタンは宗教的な面でも文化的な面でも異なっていた。ロシアがトルキスタンを征服し、トルキスタン総督府を設置したあと、トルキスタンは異教徒のロシア帝国の中で文化的な危機を迎えることになった。初代の総督カウフマンはムスリム社会に対して干渉をひかえる放置政策をとった[小松久男 2014: 20]。当時のロシア側の観察者ナリフキンによると、以前、アルコール飲料を飲んだり、断食をしなかったり、モスクに行かなかったりしていた民衆を罰していたカーディー・ライース (kazi-rai) の職が廃止されてから、現地民は自分を自由に罰されないと分かって、自分の欲望を優先するようになったのである[Nalivkin 2011: 86-87]。また、彼は民衆の文化的な態度の変化について次のように述べている。

我々が開店した飲食店にムスリム男性が大挙して来るようになった。女性はロシア人と結婚するようになった。我々がフェルガナのある都市を征服した数ヶ月後、元カーディーの娘はロシア人と結婚した。〔中略〕。モスクに来る人は減り始めた。〔中略〕 イマームの権威は弱くなり、ムスリムの高等学院であるマドラサの学生も減り始めた[Nalivkin 2011: 86-87]。

このようにロシア統治のもとで、ムスリムの日常生活も変わり始めたことがわかる。ムスリムの中でロシア文化を受け入れたムスリムもいたが、非常に少なかった。そのような人々は他のムスリムに注目され、「チョクンディ (洗礼者) Chokundi」と呼ばれ、批判されるようになった[Nalivkin 2011: 91]。このような批判的な態度にもかかわらず、ムスリムの中にはロシア政府に奉仕する者もいた。その中には、サッタルハン・アブド

ウガファールロフ（Sattarhon Abdug‘afforov）、商人サイドガニ・サイドアズィム・バイ（Saidg‘ani Saidazimboy）、サイドラスール・サイドアズィーズィ（Saidrasul Saidazizi）などがいた。彼らはロシア政府のさまざまな政策に協力し、トルキスタンにおける近代化に貢献したのである[Rizaev 1997: 39]。

小結

本章では、20 世紀初頭におけるトルキスタンの状況と当時の教育状況について、史料と先行研究の議論を整理し、検討してきた。本章の第 1 節では、ロシアがトルキスタンを征服する前の政治・社会・文化的な状況について説明した。第 2 節では、ロシアによる征服後のムスリム社会の変容について考察した。

本章で論じたように、当時トルキスタンの住民の主な生業は農業、商業、牧畜、手工業であったが、かつては治安が悪く、交易も自由にできなかった時代であった。このような様々な困難の中で、ムスリム社会は成り立っていたのである。同時代にロシアやオスマン帝国に見られた近代化はこの地域では遅れていた。日常生活は不便な状況にあっても、民衆はそれを把握できなかったのである。ロシア帝国はトルキスタンを征服してから、さまざまな形で近代化を導入しはじめた。ロシアは郵便局、鉄道、さまざまな工場、電灯、電信などのようなものをもたらした。

また、ロシア帝国はトルキスタンを統治してから、綿花の生産に力を入れた。工場も建設され、経済的な状況も良くなった。ロシア人の数が増えるとともに、現地民は高収入の新しい仕事を手に入れた。また、ロシア式の飲食店も増え、ムスリムはこのような飲食店に行くようになった。ムスリムの中には近代化を理解し、ロシア政府に奉仕する人もいたが、その数は非常に少なく、他のムスリムからは悪い目で見られたのである。しかし、民衆の大多数はロシア帝国がもたらした「発明品」を積極的に使用し始めた。たとえば、ナリフキン（Nalivkin, 2011）によると、郵便システムが導入されたとき、人々は郵便局とはどのようなものかを知らなかったので、試しに必要な物を送ってみたものだという。

このようにロシア帝国はさまざまな分野を発展させようとした。教育の分野でも一連の政策を行った。ロシア式の学校を開校し、ムスリムの生徒を教育しようとした。しかし、近代的な発明品を受け入れたムスリムも、ロシア式学校には反対し、子供を送らなかったのである。

本章では、ロシアによる征服前後の状況をみてきたが、次の第 2 章ではトルキスタンにおける教育の展開を詳しく検討する。

第2章

近代教育の展開

本章の第1節では、トルキスタンに古くから存在していた教育システムの初等教育の役割を果たしていたマクタブと当時の高等学院であるマドラサについて論じる。第2節では、トルキスタンの征服後にロシア当局が開校したロシア語・現地語学校について検討する。第3節では、新方式学校の創設者であるイスマイル・ガスプリンスキーと彼の活動について述べる。

第1節 旧来の教育

20世紀初頭のマクタブ

19世紀末－20世紀初頭のマクタブについては数多くの研究がなされてきた。その中で最初になされた研究の一つはオストロウモフの「トルキスタンにおけるムスリムのマクタブとロシア語・現地語学校」（1913）である。また、バルトリドの『トルキスタン文化史』（1927）も当時の学校について詳しく述べている。さらに、ムハンマドジャノフの著作『学校とウズベク民族の教育論 19世紀－20世紀初頭』も、ロシアがトルキスタンを征服する前とその後の教育について書いている。また、ベンドリコフの『トルキスタンにおける民衆教育史解説』（1960）もトルキスタンの教育に関する最も体系的な研究である。さらに、ナリフキン⁵は『現地民の過去と現在』（タシュケント, 1913）でトルキスタンの社会・教育的な面について詳しく述べている。これらのほか、当時のムスリム知識人も数多くの論説や記事を書き残している。その中から、本章ではハージ・ムイーン、ベフブーディー、ヴァドウド・マフムド（Vadud Mahmud 1898-1976）、イシホハン・トラ・イブラット（Ishoqhon to‘ra Ibrat 1862-1937）らの論説をとりあげる。これらを参照しながら、まずマクタブについて考察する。

⁵ ナリフキン [Vladimir Petrovich Nalivkin, 1852-1918]は、トルキスタンで活動した民族誌学者、政治家である。カルーガの貴族に生まれた。ペテルブルグの第1陸軍士官学校を卒業した後、1884年からタシュケントの最初のロシア語・現地語学校で中央アジアの言語を教え始めた。1890-1895年にはトルキスタン地方国民学校視察官を務めていた。



図 2. マクタブの授業（タシュケント）（Bendrikov 1960: 36）

マクタブはトルキスタンの民衆が読み書きを習うための施設であり、中央アジアにイスラーム教とともに 8-9 世紀に入ってきた[Salijanova 1998: 30]。マクタブは最初イスラーム教の教典コーランを読むことを教えるために設立された。マクタブはモスクの中、もしくは教師の家で開かれていた。地域のモスクのイマーム、あるいはアザンチ⁶がマクタブの教師を務めていた。教師の義務は児童に読み書きを教え、彼らを礼儀正しい人に育てることであった。マクタブの目的は、生徒を真のムスリムとして育てるために読み書きを教えることであった[Salijanova 1998: 33]。マクタブは男子のための教育施設であり、女子はマクタブに通うことはなかった。もちろん女子のための学校も存在していたが、それについては第 3 章の第 1 節で触れる。ムスリムは児童を 6-8 歳からマクタブに送っていた。中にはもっと小さい時からマクタブに通う児童もいた。マクタブの教師はマクタブダール・ダムッラー *maktabdor-domla*、ムッラー *mulla*、ムアッリム *muallim* などと呼ばれていた。マクタブでの教育は 5 年から 8 年まで続いていた。19 世紀末にトルキスタンにおけるこのようなマクタブの数は 5000 校以上であった。1898 年に 5755 校、1908 年には 5734 校のマクタブが存在していた[Salijanova 1998: 40]。都市のマクタブでは生徒の数は 20 - 30 人、農村部のマクタブでは 10 - 15 人ほどであったという[Bendrikov 1960: 37]。

マクタブの休日は祭日と金曜日であり、授業は朝から午後の礼拝まで行われていた。休み時間は昼に一回しかなかった。中には二回休憩をするマクタブもあった。最初の休憩時間は「パンを食べる時間 *nonxo'rak*」と呼ばれ、10-11 時頃に置かれていた。この時間に生徒は家から持ってきたパンを食べていた。13-15 時頃に「ごはんを食べる時間

⁶ モスクで毎回礼拝の前にアザーンを唱えて、信徒を礼拝に呼びかける人。Muazzin とも言う。

oshxo‘rak」という二回目の休憩をとっていた。この時に生徒は自分たちで交代で作った温かいご飯を食べていた[Salijanova 1998: 41]。

サリジャノヴァ (2002) によると、マクタブでの長期休みは夏休みであり、生徒の両親と相談した上で、2 ヶ月間の休みがあった。また、オストロウモフは生徒が断食明けの祭りイード・ラマザンと犠牲祭イード・クルバンというイスラーム教の祭りの一週間前から一週間後まで、つまり 2 回の宗教的な祭りの時に 2 週間の休みをとっていたと述べている。

当時本格的な教育制度、もしくは文部省などは存在していなかったため、マクタブのカリキュラム、施設の設備などは監督されていなかった。そのため、様々な問題が現れていた。まず、もっとも大きな問題は読み書きを教えるための教科書がなかったことである。マクタブではイスラームの基本的教理が教えられ、ペルシア語で書かれた詩の暗誦も行われていた。また、コーランの一部も暗記させられていた。マクタブではどのような教科書や詩集が使われていたのかをみてみよう。

マクタブでは読み書きが同時に教えられていなかった。G.サリジャノヴァによると、生徒はアラビア文字を読めるようになってから、書く練習をさせられていた。生徒は最初の日に板 (taxta/lavh) を持ってくるようになっていた。教師はその板にアラビア文字の 32 文字を書き、生徒は音読しながら、一回の授業で 4 文字ずつ覚えていたという [Ostroumov 1913: 133]。文字を覚えてから、「アブジャッド abjad」という八つの単語の繋がりを暗記していた。この八つの単語の中にアラビア文字のアルファベットにある全 32 文字が含まれていた。この単語の繋がりを暗記した後に生徒は、コーランを読む「ハフティヤク xaftiyak」という次の段階に進んでいた。ハフティヤクに進んだ生徒は「キタブハン kitabxan」と呼ばれていた。キタブハンは、本、つまりコーランを読む生徒という意味を表す。この段階ではコーランを 7 部に分けて読み、各部を暗記していた。もし生徒が優秀であれば 1 年間で、普通の生徒は 2-3 年間でハフティヤクを完全に暗記していた。アラビア語で意味のわからないコーランの言葉を暗記するのは非常に難しく、途中でマクタブをやめる生徒もいた。ハフティヤクを暗記した生徒は、コーランの残りを暗記する段階に進んでいた。コーランの残りを暗記するために約 3 年間かかっていた。コーランの暗記が完成するまで生徒の読み書きが良くなっても、暗記したコーランの言葉の意味を理解してはいなかったという [Ostroumov 1913: 135]。

コーランの次の段階は、『四書 chor kitab』という段階であった。これは 4 つの部分から成り立っていた [Salijanova 1998: 44]。その内容は、シャリーアの義務、断食の規則、礼拝の規則などからなっていた。この本はペルシア語 [タジク語] で書かれていた。『四書』は最初から最後まで教師の説明で 1.5-2 年間かかっていた [Muxammadjanov 1978: 18]。『四書』を終えてから、書く練習が始まる。生徒はアルファベットを書けるように

なってから、17-18 世紀の詩人スーフィー・アッラーヤール (Sufi Allayar) の *Sabot al-ajizin* を勉強していた。この道徳的な内容の書物は、テュルク語で書かれているため、トルキスタンのムスリムには分かりやすかった。*Sabot al-ajizin* は民衆の間で『スーフィー・アッラーヤール』とも呼ばれていた。その内容は、一般的なしつけであった。アブドゥッラ・アウラーニーに (Abdulla Avloniy 1874-1934) よると、トルキスタンのマクタブでは、『四書』、*Sabot al-ajizin*、フズリー Fuzuliy、ナヴァイー Navoiy、ホージャ・ハーフィーズ Xo‘ja Hafiz、ベーディル Bedil、*Maslakul mutaqqin* などのテキストが使われていたのである [Salijanov 1998: 44]⁷。

マクタブの状況は近代的な学校の条件には対応していなかった。その場所は狭く、照明もないためとても暗かった。オストロウモフによると衛生的な状態も良くなかった。学校と言える設備もなかったという。体操や運動のための場所が存在しないこと、また、学校に医者がないことも批判している [Ostroumov 1913: 136]。

また、ナリフキンがトルキスタンにおける教育の欠陥について次のように述べている。

中央アジアではかつての天文学と数学は忘れられている。我々が征服するまで、現地民の中のもっとも優秀な知識人でも代数と幾何学はいうまでもなく、分数の理論も知らなかったのである。彼らは加減乗除しかできなかった [Nalivkin 2011: 31]。

ここからもわかるように、19 世紀末のトルキスタンでは知識人も十分な教育を受けていないということになる。ロシア人から見ると、トルキスタンのムスリムは無知であったこともわかる。

このように、マクタブはイスラーム教とともにトルキスタンに広がり、その目的はイスラームの教理を教えることであった。ここでは、アラビア文字の読み書きと宗教的な詩集の暗記が行われていた。19 世紀後半になるとロシアがトルキスタンを征服し、近代化が進み始めたが、このような学校では社会の要請に対応できなくなるのである。これについて当時のムスリム知識人はどのように考えていたのかを見てみよう。

イスハクハン・トラ・イブラットは 1907 年に『トルキスタン地方新聞』の第 22 号に「旧方式学校 (マクタブ) について *Eski maktablar xususida*」という論説を寄稿した。彼はこの論説で、旧方式学校を改革することについて次のように述べている。

⁷ Fuzuliy- ムハンマド・フズリー (1498-1556) トルコ古典詩において最も名声・影響力のあった詩人の一人である。

Navoiy- アリシェル・ナヴァイー (1441-1501) ティムール朝末期の詩人。

Bedil- アブドゥル・カディール・ベーディル (1644-1720) インドで活動したペルシア語の詩人。

教師は可愛そうな児童を理由もなく棒で殴り、5-10 年も宙に向かせて「alif, babazer, bebazer」と[アラビア文字の単純な組み合わせを]繰り返させながら、一文字も読み書きを教えないで彼らの人生を無駄にさせている。〔中略〕このように棒で殴ることなどを改革しなければいけない[Ibrat 2005: 155]。

ここから、当時の知識人もマクタブの現状に不満を感じていたのがわかる。イブラットは、ここで 5-10 年間もかけて読み書きを教えることを批判しているのである。また、児童の時間が無駄遣いされていることを批判している。

また、ニヤーズィー・ラジャブザーダ (Niyoziy Rajabzoda) は 1914 年に雑誌『アーイナ』の第 38 号に「初等学校における無秩序もしくは発展の道 Ibtidoiy maktablarimizning tartibsizligi yoxud taraqqiyning yo‘li」という論説を寄稿した。この論説では、マクタブの弱点について次のように述べている。

我々トルキスタン人は、自分たちの子供が 8-10 年間かけて勉強するマクタブの状況に注目すれば、ブハラ、サマルカンド、タシュケント、つまり全トルキスタンの諸都市に住んでいるムスリムが率直に考えれば、我々のマクタブには規律がないことがわかる。我々の学校には道德の向上や浄化といえるものはない。教育期間が長いと両親は子供を 8-10 年間もマクタブにやることができない。なぜなら、経済的に余裕がないからである。我々のマクタブには規律もない。そのため、8-10 人の生徒のうち 2-3 人しか十分な教育を受けることができない。マクタブでは必要な教科書が使われないため、そして、教科書の内容を生徒に説明しないため、生徒は読み書きの他に何も勉強できないのである[Ergashev 2001: 5]。

ここからもわかるように、ニヤーズィー・ラジャブザーダも当時のマクタブのありさまを批判している。彼もマクタブでの時間の無駄遣い、秩序と規律の不在を批判しているのである。

このように、20 世紀初頭になるとムスリム知識人もマクタブについて様々な論説を発表し、マクタブの欠陥について指摘している。ムスリム知識人にとって、マクタブは近代化し始めたトルキスタンの社会的要請に対応できなくなったと考えていたのである。ロシア側の観察者もマクタブの欠陥、衛生的な欠点などについて述べている。当時のロシア人とムスリム知識人の論説や意見を読むと、マクタブは必要性のない教育施設だったということになるが、実際はどうだったのだろうか。オストロウーモフの「トルキスタンにおけるムスリムのマクタブとロシア語・現地語学校」(1913)を分析すると、ロ

シア語・現地語学校の特徴を主張するために意図的にマクタブの弱点や欠点のみを書いているように思われる。この論説でマクタブの特徴について一つも書かれていないのは不思議である。また、ナリフキンも、ロシアがトルキスタンを征服してからの発展を示すために、それ以前の時代の知識人を無学と述べているのだろう。当時のムスリム知識人も教育改革運動を始め、新方式学校を開校し始めたことから、マクタブの欠陥を述べているように見える。

しかし、マフムードホジャ・ベフブーディー、アブドゥッラ・アウラーニー、ムナッヴァル・カリ、ハージ・ムイーンなどのような知識人がみなマクタブそしてマドラサで教育を受けて知識人になったのは事実である。したがって、マクタブは必ずしも無意味で必要性のない教育施設ではなかったといえる。また、当時のアルファベットはアラビア文字であり、マクタブではアラビア文字の読み書きが教えられていたことも事実である。ただし、マクタブにはカリキュラムがなかったこと、必要な教科書が不足していたこと、有能な教師も不足していたという点から、マクタブは近代化し始めたトルキスタンの社会的な要請に対応できなくなっていたといえるだろう。

20 世紀初頭のマドラサ

マドラサはマクタブを終えてから進学する教育施設であり、当時、高等学院の役割を果たしていた。マドラサについても数多くの研究がなされてきた。バルトリド、ムハンマドジャノフ、ベンドリコフ、ハーリドなどはマドラサについても研究している。高等学院であるマドラサはイスラームの普及とともに生まれた。マドラサは、アラビア語では講義を聴く場所という意味を表す[Muxammadjanov 1978: 21]。マドラサも最初は宗教を普及するために開かれていたが、後に高等学院に変わってきたのである。マドラサはトルキスタンの都市や大きな農村に開校され、ワクフ（宗教・教育施設の維持・運営のために設定された寄進財）で運営されていた。マドラサの建物は伝統的な形で立派に建てられていた。

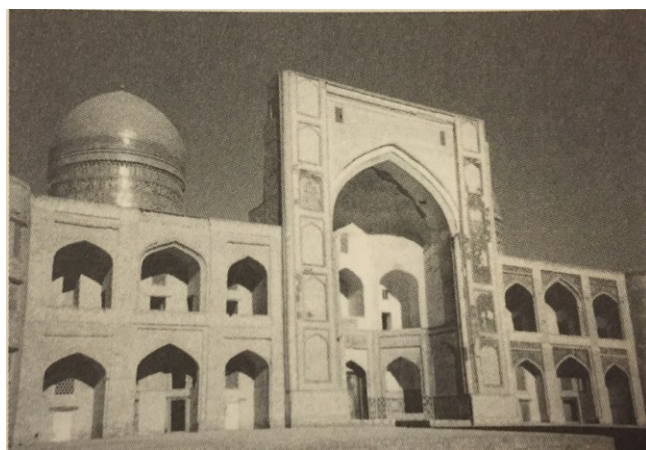


図 3. ブハラのミール・アラブ・マドラサ（小松久男 2014: 67）

マドラサは多くの場合支配者のハンやアミールによって建てられていた。また、資産家の資金、もしくは現地の人々が集めた資金で建てられていたという[Muxammadjanov 1978: 22]。ブハラのアミールであったアミール・サイード・アリムハンは次のように述べている。

ブハラ・ミナレットの下の中庭の内側に私の資金で「知識の家 Dor-ul-ulum」であるマドラサを建てさせた。様々な科目を教える教師を採用した。このマドラサに住んでいる学生の給付、衣服なども私の資金から与えた。そのために一人の係りを採用した。学生の食べ物、給付、衣服などを与えていた [Salijanov 1998: 89]。

この記述からもわかるように、当時のハンやアミールも教育の普及のために努力し、マドラサを建てていた。さらに、学生に食料や衣服も与えていたことがわかる。

タシュケント、ブハラ、サマルカンド、ヒヴァ、コーカンドなどのマドラサには図書館も存在していた。マドラサの数についての資料は非常に少なく、ムハンマドジャノフは当時のマドラサの数を次のような表で示している。

地域名	マドラサの数	学生（人）
ブハラ	80	5000 まで
コーカンド	40	3000 以上
サマルカンド	22	不明
マルギラン	28	417
タシュケント	17	5341
ヒヴァ	22	不明
アンディジャン	10	不明
ナマンガン	11	不明
シルダリヤ州のタシュケント郡	6	68
サマルカンド州のウルグット郡	2	20
新ウルゲンチ	2	不明
ハザラスプ	1	不明
マンギット	1	不明

表 2. Muxammadjanov, A., 1978, *Shkola i pedagogicheskaya mysl' Uzbekskogo naroda XIX-nachala XX v.*, Tashkent, str. 23.

この表に基づいてマドラサの数をまとめてみると、およそ 242 校のマドラサが存在していたことがわかる。しかし、上記の数は正確だとは言えない。サリジャノヴァによると、1910 年にホラズム市には約 1500 校のマクタブと 130 校のマドラサが存在していた。また、同年にヒヴァ・ハン国に 2169 校のマクタブと 132 校のマドラサが存在していた [Salijanov 1998: 99]。また、1910 年にタシュケントにマドラサの数は 22 校、フェルガナ州では 1911 年に 204 校に至った [Salijanov 1998: 101]。トルキスタンでマドラサが比較的多く存在していた地域は、コーカンド (34 校)、マルギラン (25 校)、サマルカンド (22 校)、アンディジャン (14 校)、ナマンガン (14 校)、タシュケント (14 校) とフジャンド (10 校) であった [Bendrikov 1960: 51]。

このように、資料によってトルキスタンのマドラサの数は異なる場合もあることから、マドラサの正確な数を把握するのはむずかしい。

マドラサの中には学生が居住する「フジュラ *hujra*」と呼ばれる居房があった。マドラサの教師は「ムダッリス *mudarris*」と呼ばれていた。マドラサの大きさによって居房や教師、学生数は異なっていた。

マドラサでは学生は 3 段階で教えられていた。第 1 段階は、初級「*adno (past qadam)*」、次の段階は、中級「*ausat (miyona)*」、第 3 段階は、上級「*a'lo (pesh qadam)*」と呼ばれていた。各段階の教育は約 3-4 年間続いていた。したがって、学生はマドラサを 10-12 年間で卒業していた [Salijanov 1998: 120]。

マドラサの教育システムは 11-12 世紀にある程度成立していた。教育システムは次のように分けられていた。

1. アラビア語：文法、語源学、弁論、アラビア語の歴史、コーランの読み方など。
 2. 神学と法学：コーランの注釈、ハディース、法学入門、教理、遺産分割規定など。
 3. 哲学：論理学、数学、地理学、天文学、医学、科学と自然科目、哲学など
- [Salijanov 1998: 125]。

マドラサの勉強は『学問の初歩 *Avvali ilm*』という教科書を学ぶことから始まっていた。この教科書はイスラームの教理についての質疑応答の形で書かれており、4-5 ページから成り立っていた。この教科書を終わってから、アラビア語の文法を勉強していた。その後、コーラン、ハディース、法律、哲学などが教えられていた。また、マドラサでは数学も教えられていた。数学の授業では、エウクレイデスの『原論』、プトレマイオスの『アルマゲスト』などの教科書が使われていた [Salijanov 1998: 147]。学生は地理学、神学、医学などを自習していた。イブン・スィーナーの『医学典範』は、医学の主な教科書であった。

上記に見てきたように、マドラサではアラビア語の文法、語源学、弁論学、アラビア語の歴史、法学、哲学、論理学、数学、地理学、歴史、天文学などの科目が教えられていた。

しかし、当時の知識人の論説を参照すると、19 世紀にマドラサはイスラームの教理のみを教える施設になっていたことがわかる。例えば、タタール知識人のヌーシルヴァーン・ヤウシェフ⁸ (Nushirvan Yaushev) は雑誌『トルキスタンの声』第 20 号に「現在のマドラサにおける教育 Hozirgi madrasalarimizda o'quv」という論説を寄稿した。彼はこの論説ではマドラサは以前どのようなものであったか、19 世紀にどのような状況になってきたのかについて述べている。当時のマドラサに関する知識人の見解が読み取れるので、論説の一部を引用することにする。

かつて、イスラーム教のマドラサでは宗教とともに世俗的な教育も教えられていた。イスラーム世界には時代に相応しい科学者、哲学者などが育っていた。アミール・ティムールの時代にも哲学者や科学者がいた。サマルカンドにあるミルザ・ウルグベク天文台はその証拠である。我々の祖先が残した富、手工業、技術の素晴らしさは明らかである。彼らが宗教と教育のために尽くした貢献を知るには、今から 4-5 百年前に建てられた壮大なマドラサ、大きなモスクで十分だろう。自然科学と数学の教科書を書いた学者の多くはトルキスタンに、つまりブハラとサマルカンドに育った。しかし、かつての学者によって書かれた教科書と彼らによって教えられていた教育は現在のマドラサにはないのである。経済学、農学、商学、工学、哲学、歴史、地理学などのような教育と科学は完全に失われた。現在のマドラサでは宗教のみが教えられている。しかも、それも十分には勉強できないのである[Nushirvan Yaushev 1914: 1]。

要するに、トルキスタンに存在していたマドラサの教育は時代とともに変質し、19 世紀になると宗教のみが教えられるようになった。当時のトルキスタンのマドラサを見学

⁸ ヌーシルヴァーン・ヤウシェフ[Nushirvan Yaushev]は、ジャディード知識人で、積極的なジャーナリストである。彼の生年は明らかではないが、1880 年の中頃だと見なされる。彼はウファ県ベレベイ郡ボガディ郷のミンタル村に、樵を生業とする家庭に生まれた。7 歳から 21 歳までボガディ村から 3-4 キロメートルほど離れたウラザイバシ村のマクタブで学んだ。その後、ウファに新設されたアーリエ・マドラサに入学した。マドラサを卒業してから、カザフ草原でマクタブの教師として働いた。その後、ロシア領と中国領それぞれのトルキスタンを周遊しながら、ロシア・ムスリムの代表的な定期刊行物に数多くの論説や紀行文を寄せた。ヤウシェフは 1917 年 10 月革命後まもない 11 月 23 日に、30 歳ほどの若さでこの世を去った。大石真一郎 1998 「ヌーシルヴァーン・ヤウシェフのトルキスタン周遊について」『神戸大学史学年報』第 13 号を参照。

したヤウシェフのこの記述を読むと、19 世紀のマドラサはもっぱらイスラーム法学者や神学者を養成する施設になっていたことがわかる。

マドラサのこのような状況はトルキスタンのマドラサに限られると思われる。大石真一郎はヌーシルヴァーン・ヤウシェフのトルキスタン周遊について書いた論文で、ヤウシェフが学んだウファのマドラサについて次のように述べている。

1906 年 10 月にウファ市第 3 モスクのイマームである Zarif effendi や Ziya al-Din al-Kemali らがバイ（富豪）たちの資金援助を得て開校したアーリエでは、イスタンブルやカイロで教育を受けた教師たちによって宗教的な学問だけでなく、教育方法、歴史、地理、数学、天文学、代数、化学の授業が行われ、[オレンブルグの]フセイニーエやカザンのムハンマディーエと並んで当時としてはかなり革新的なマドラサであった[大石 1998: 22]。

ここからわかるように、オレンブルグとカザン、そしてウファには革新的なマドラサが存在しており、宗教的な教育だけではなく世俗的な教育も与えられていた。それは、オレンブルグ、ウファ、クリミアなどロシア内地のムスリム知識人は近代化の必要をより早く理解し、教育の発展に大いに貢献したからであろう。

上記に見てきたように、トルキスタンではマドラサはイスラーム教の普及とともに誕生し、宗教を普及するために開かれていた。しかし、時代とともに高等学院に変わり、様々な世俗的な科目も教えられるようになった。14-15 世紀になるとマドラサの数は増加し始めた。しかし、その後トルキスタンにおける様々な政治・社会的な状況、内戦や経済の悪化などの影響でマドラサは衰退し始めた。19 世紀になると、高等学院の役割を果たすはずのトルキスタンのマドラサはその価値を失い、イスラームの教理のみを教えるようになったのである。

第 2 節 ロシア語・現地語学校の導入

ロシアはトルキスタンの征服以来、様々な政策を行ってきた。この節では、ロシア帝国のトルキスタンにおける教育改革運動、すなわちロシア語・現地語学校について考察する。

ロシアはこの地域を征服してから、ロシア文化を普及する政策も行った。そのために現地民にロシア語を教えなければいけないと考えたロシア政府は、ロシア語学校の開校を試みた。初代総督のカウフマンは、帝政ロシアのために働く青年を育てるために教育が大事だと考え、トルキスタンの教育改革に取り組んだ。ロシア人から見ると、この地域に古くから存在していたマクタブとマドラサは時代の要請に対応できていなかった。

ロシア政府はまずロシア人のための学校、後にロシア語・現地語学校を開校した。最初の現地民のためのロシア式学校は、1870年にサマルカンドに開校された。学校は、「自分の子供にロシア語を学習させたいという、管区およびサマルカンド市の現地民の希望をかなえるために」開校された。タシュケントでは、1871年になってはじめて「男女双方のための職業技術科を持つ3学年制の国民学校」が開校された[バルトリド 2011: 28]。ロシア政府はこのようにロシア式の学校を開校することにより、トルキスタンのムスリムのロシア人への接近を強めることを試みた。しかし、トルキスタンのムスリムはこのような学校に子供を送ることはしなかった。もちろん、ロシア式学校に入学した生徒はいないといえないが、ロシア人の生徒と比べて、非常に少なかった。例えば、バルトリドによると、タシュケントの男女の中学校で、生徒の数は1883年1月1日に最大に達した。それでもムスリムは、男子286人中20人(7%)、女子333人中10人(3%)であった。1896年1月1日には現地民就学者は男子327人中10人(3%)、女子377人中で8人(2%)しかいなかった。

ロシアの学校にムスリムの生徒が就学しない理由の一つは、ロシア式の学校ではイスラームの教理が教えられなかったことである。これについてのオストロウーモフの指摘をバルトリドは次のように書いている。「1872年5月31日付でツァーリの裁可を得た市立学校規程第13項への付則に従って、寄宿生はアラビア文字の読み書きとイスラームの教理は学んでいなかった[バルトリド 2011: 32]」と。イスラーム教が根強く残っているこの地域では、いきなりイスラームの教理とアラビア文字の読み書きが教えられなくなるのは、現地民の心配を呼び起こしたに違いない。バルトリドによると、授業はロシア語で行われ、教師は「現地民にわからない表現を彼らに説明する」場合に限って現地語を用いた[バルトリド 2011: 32]。このような状況の中でムスリム生徒を集めることは困難であることはロシア政府にも見えていた。

そこで、1884年にトルキスタン総督になったばかりのローゼンバフ(N.O.Rozenbakh 在任 1884-88)は、現地民の間にロシア語を広める目的で、秘密委員会(секретная комиссия)を召集し、現地民の知的生活の面を強化する方法について話し合った。その結果、ロシア語・現地語学校開校の計画が生まれた。最初のロシア語・現地語学校は1884年12月19日にタシュケント出身の商人サイイドガニ・サイイドアズィーム・バイ(Saidg'ani Saidazimboy)の自宅に開校された。サイイドアズィーム・バイのロシア語・現地語学校の後に次々とトルキスタンの様々な地域でこのような学校が開校され始めた。最初の段階では、このような学校の数はいくつか、生徒の数も非常に少なかった。1885年になると、タシュケント州のピスケントとチナーズという村にもロシア語・現地語学校が2校開校された[Nalivkin 2011: 107]。バルトリドによると1911年にロシア語・現地語

学校の数 は 89 校にのぼった[Bartol'd 1963: 308]。このようにして、トルキスタンでロシア語・現地語学校の開校が始まったのである。

このような学校では、ロシア語クラスとムスリム・クラスの二つのグループに分けて教育を行うようになった。しかし、トルキスタンの民衆が高度の教育を受けることを恐れたローゼンバフは、「トルキスタンの民衆には読み書きと最低限の教育を与えること」を命令したこともある[Ostroumov 1913: 144]。ロシア語クラスではすべての授業はロシア語で行われたのに対して、ムスリム・クラスでは現地のムッラーによるアラビア文字の読み書きとイスラームの基本が教えられていた⁹。授業ではロシア語からテュルク語（ウズベク語）に翻訳された教科書（たとえば、N.S. リュコシン（Lykoshin）の 1906 年に出版された『ロシアの歴史』）が使われていた[Rizaev 1997: 39]。また、ロシア語の『母国語 Rodnoe slovo』、『子供の世界 Detskiy mir』、『第一のロシア語読本 Pervaya russkaya kniga dlya chteniya』、『子供のための世界の物語 Mir v rasskazax dlya detey』などの教科書が使われていたが、これは現地民の児童には非常に難しかった[Muxammadjanov 1978: 45]。

総督ローゼンバフは、ロシア語・現地語学校に対するムスリムの反対を恐れ、この学校にロシア人と現地民の教師を就けた[Nalivkin 2011: 104]。総督はロシア語・現地語学校に現地民の生徒を集める責任を警察署に与えた。しかし、生徒の募集は非常に難しく、生徒は集まらなかった。そこで、警察署はムスリムの商人の子供たちを呼びかけることにした。商人たちは警察に日頃依存しており、断ることができなかった。このように、時には要請し、時には話し合い、時には威嚇しながら、最初のロシア語・現地語学校の開校式にやっと 41 人の現地民の生徒を集めることができたという[Nalivkin 2011: 105]。

警察署とは別に、ロシア政府はムスリム・クラスに生徒を集めるために「保護者 blyustitel'」という職を設定した。この職には総督の命令で現地のムスリム資産家、カーディー、商人、郷長などが就けられ、彼らはロシア語・現地語学校に資金を寄付していた[Bendrikov 1960: 195-196]。ただし、国民学校視察官を務めていたスミルノフ（N.K.Smirnov）はシルダリヤ州の「保護者」8 人について、「職務を十分にはたしていない」と批判している[Bendrikov 1960: 196]。

生徒を学校に集めることは難しく、地域によっては生徒に金銭を払って学校に「雇う」こともあった。トルキスタン地方国民学校視察官のミロピエフ（Miropiev）は 1888 年にタシュケント州のいくつかのロシア語・現地語学校を監査した。たとえば、アブリック郷のテッリャーウ（Tellyau）村のロシア語・現地語学校を 1888 年 4 月 7 日に監査したところ、生徒は 22 人いるはずなのに、現地民の生徒 11 人にしか会うことができなかった。

⁹ TsGARUz f.I-1, op.31, d.540, 49ob.

った。11 人のうち 1 人の生徒は学校に自発的に通っていたが、残り 10 人の生徒は金銭で「雇われ」ていたという[Bendrikov 1960: 192]。ミロピエフは学校の出席率と生徒の教育進捗状況を次のように説明している。

上記の生徒の 9 人は学校に 2 年通っている。〔書類上〕学校には全部で 22 人の生徒がいる。しかし、彼らは稀に学校に行くだけだ。例えば、1887/88 年の学年に、9 日間に 1 人の生徒、4 日間に 2 人の生徒と、また 4 日間に 4 人の生徒しか授業に出席しなかったのである。授業に関して非常に無関心で不注意である。ロシア語の教科書を 11 人の現地民の生徒のうち 4 人しか読めないのである[Bendrikov 1960: 193]。

ここからわかるように、農村地域の学校の生徒は出席率も教育水準も非常に低かった。現地民の生徒は自発的に学校に行こうとしないため、学校は生徒に金銭を払って、学校に通わせたこともわかる。また、このような学校にはたいていの場合、ロシア政府がもたらした近代化を理解した現地民と資産家の子供が通っていた。

生徒を「雇う」件に関して、ナリフキンも同じ意見を述べている。

郷長や長老の配下にある者の子供が強制的に学校に入れられ、また一部は、貧乏な家族の子供を毎年、両親に 20-30 ルーブルを払うという約束で学校に受け入れた[Nalivkin 2011: 106]。

ここからもわかるように、現地民のムスリムは子供をロシア語・現地語学校に送らなかったため、学校側もさまざまな対策を考えなければならなかったのである。しかし、ナリフキンによると、約束された金銭の一部のみ払われ、残りは払われなかった。約束された金銭が払われないため、生徒の両親は文句を言い、生徒は授業をさぼっていたのである[Nalivkin 2011: 108]。

ロシア語・現地語学校について、民衆の大多数は疑問を持っていた。ある人が「この学校は軍人を育成するために開校された」と考えれば、他の人は「我々の子供をロシア化するために開校された」などと考えていた。したがって、彼らは自分たちの子供のロシア化を恐れ、学校に送ることはしなかった。

ムッラー・アーリムは当時の教育問題を指摘し、「教育を受けなければ物質的な恩恵も奪われ」、やがてロシアの「教育を受けた商人や職人がムスリムに取って代わるのである」と、ムスリムの教育問題に読者の注意を喚起している。続けて、彼は次のように言う。

ムスリムの教育水準の低さは、彼らの中でもっとも学識のある教授や教師さえ地理学の理解を持たず、自分の屋敷の外で起きていることは知らないことからも明らかである。これは次の詩句を想起させる。「ほんのわずかな場所しかいらぬ虫けらには、天も地も同じこと」。宗教の知識なくして天上の王国に至ることはできないように、世俗の知識なくして地上の安寧を得ることはできない。われわれのもとにあるような宗教学校は、すべての文化的な民族のもとにある。しかし、そのほかに彼らのもとにはわれわれのもとにはないような世俗的な学校がある。たしかにムスリムの間でも教育への関心は増している。30 年前タシュケントにはロシア・ムスリム学校が 1 校あったのみで、生徒はほとんどいなかった。今ではロシア・現地民学校が 8 校あるものの、それでもなお不足しているのである[バルトリド 2011: 207-208]。

このように、ムッラー・アーリムはムスリムの教育問題にふれ、ロシア語・現地語学校が不足していることを指摘している。しかし、一方でイブラヒムは、現地民の生徒は官立の学校を卒業していないと指摘し、次のように述べている。

トルキスタンの征服から 35 年になるにもかかわらず、ロシアの高等学校を修了したムスリムは一人もいない。近い将来にもそれを期待することはできない[イブラヒム 2013: 13]。

イブラヒムのこの指摘を読むと、ロシア語・現地語学校を修了したムスリム生徒は一人もいないという印象を受けやすいが、実はこれは真実に近い話である。ロシアの高等学校を修了したムスリム生徒はいたとしても、政府関係の仕事に就いていた者はいなかった。これについてナリフキンは次のように説明している。

この 20 年間で我々が開校した数十校のロシア語・現地語学校はどのような利益をもたらしたのだろうか？この 20 年間で数千人のムスリム生徒がロシア語・現地語学校で勉強してきた。この生徒の一部は何の知識も持たずに、学校を逃げ出し、これからも逃げるだろう。少なからぬ一部は、ロシア語会話などを勉強するが、修了後、日常生活ではロシア人と接しないためすぐに忘れてしまう。修了後に生徒のごく一部が、勉強したロシア語と数学を商人として仕事に使うにすぎない。この 20 年間で、我々と現地民は何を手に入れたのだろうか？市場でロシア語のできる商人の数が増えただけである。[中略]。ロシア語・現地語学校を修了した

ムスリム生徒の世界観、本能、センスなどを普通の現地民と比較すれば、ロシア語を市場で仕事をしながら勉強した現地民と何の違いもないことがわかる[Nalivkin 2011: 110-111]。

イブラヒムとナリフキンの上記の記述からわかるように、ムスリム生徒はロシア語・現地語学校を修了するまでほとんど勉強せず、途中退学する場合が多かった。また、このような学校を修了したとしても、ロシア語のみを勉強したということになり、普通のムスリムと変わらないということもわかる。

1905-1907年の革命後、ロシア語・現地語学校は良好な成果が得られなかったため、権威を失いはじめた。学校の中には何年間も卒業生がいない学校もあった。たとえば、1906年に13校は卒業生を出していなかった。また、1907年に17校、1908年には11校で卒業生はいなかった[Muxammadjanov 1978: 72]。

このように、トルキスタンではロシア語・現地語学校が開校され、何十年にもわたってムスリム生徒をこの学校に集めようとしたが、現地民は自分の子供を学校に送らなかった。たとえ両親が学校に子供を通わせたとしても、ムスリム生徒の大多数は授業をさぼったり、学校から逃げたりして、学校に通わなかったのである。このような状況の中で、ロシア語・現地語学校の役割はロシア語会話を教える程度に過ぎなかった。

第3節 新方式学校の創設者－イスマイル・ガスプリンスキー (1851-1914)

ロシア帝国が開設したロシア語・現地語学校は、トルキスタンのムスリムにはなかなか受容されなかった。ムスリムはこのような学校に子供を送らなかったため、生徒を集めるのは政府にとって大きな問題だった。このような状況の中で、当時のムスリム知識人の代表的な人物であるクリミア・タタール人のイスマイル・ベイ・ガスプリンスキー (Ismail Bey Gaspirinskiy 1851-1914) は、1884年にクリミアのバフチサライに新しい方式の初等学校を開校した。彼は自分の考案した「発声方式 *usul-i savtiya*」もしくは「新方式 *usul-i jadid*」を用いて、40日間で12人の生徒を教え、読み書きができるようにした。これは旧来のマクタブに比べて、格段にすぐれた教育効果を発揮したことを意味する[ジャスル・ヒクマトラエフ 2014: 379]。彼は古くから存在していたマクタブとマドラサを改革するために新しい方式を導入したのである。この方式は「ウスーリ・ジャディード *usul-i jadid*」と呼ばれたため、この教育改革運動は「ジャディード運動」と呼ばれるようになった。「ジャディード *jadid*」とはアラビア語で「新しい」という意味を表し、ガスプリンスキーの学校は「新方式学校 *usul-i jadid maktabi*」と呼ばれ始めた。彼は自分の教育改革に関する構想を新聞『テルジュマン 翻訳者 *Tarjimon*』（1883-1918）や当時のほ

かの出版物に寄稿し始めた。新聞『テルジュマン』をガスプリンスキーはバフチサライで自ら編集・発行していた[磯貝 2014: 194]。『テルジュマン』はバフチサライだけでなく、ロシア領内のムスリム地域でも広く読まれていた。トルキスタンでも人気になり、トルキスタンのムスリム知識人にも広く読まれていた。

ガスプリンスキーは、1851 年にクリミアに生まれた。マドラサで初等程度の教育を 2 年ほど受けた後、10 歳でシンフェローポリのギムナジアに学び、ヴォロネジの陸軍幼年学校での 2 年間を経て、1864~1867 年モスクワ第 2 軍ギムナジアで勉学を続けた[磯貝 2014: 196]。1867 年に彼はオスマン帝国の軍に入るためにギムナジアを退学し、ロシアから出国するが、途中オデッサで捕まり、バフチサライに戻らなければならなくなった[Mustafa Tuna 2002: 267]。クリミアに戻ってから、現地のマドラサでロシア語をしばらく教えていた¹⁰。その後、1871 年にフランスに渡り、1874 年までフランスの文化を見聞し、同年オスマン帝国の首都イスタンブルに行った。彼はオスマン帝国の社会や文化を、とくに教育制度に関心をもって観察し、翌年帰国した[磯貝 2014: 197]。ムスタファー・トゥナ[2002]によると、彼は 1878-1882 年にバフチサライ市の市長を務めていた。このように、さまざまな活動を行ってきたガスプリンスキーは教育改革をフランスとオスマン帝国を訪問してから考え始めたと思われる。もちろん、彼はフランスに渡る前にマドラサでロシア語を教え、教師としての活動を始めていた。しかし、オスマン帝国とフランスの文化と教育制度を観察したあと、新しい方式の導入について考え始めたと言える。また、ガスプリンスキーは、1881 年にシンフェローポリで、『ロシアのムスリム Russkoe Musul'manstvo』という長文のロシア語論説を発表した[磯貝 2014: 197]。

ガスプリンスキーの教育改革構想

ガスプリンスキーが、教育改革に取り組む理由は、たんにムスリムを教育するのではなく、ロシア帝国のあらゆる地域のムスリムを統合することであった。彼の『ロシアのムスリム』を参照すれば、ロシアのムスリムは無学でロシア語を知らないため、ロシア帝国の権益や願望を理解しないと主張していることがわかる。彼はこの論説で、ロシアのムスリムについて次のように述べている。

ロシアのムスリムはロシアに生まれ、この地域に生活し、国の保護と後援の下で暮らしている。他の〔ロシア人〕民衆と同じ権利を持ち、国に関する責任と奉仕を国民として果たしている。しかし、これでは不十分である。この外面的で公式な関係は、もっと道徳的な関係に変わることが望ましい。〔中略〕。ロシアのムスリムが、彼らの将来をロシア人の将来と統合すれば、ロシアのムスリムにとっ

¹⁰ TsGARUz f.I-1, op.11, d.806, 2.

て近代化と教育の道が開かれるということに信念を持ってほしい[Gasprinskii 1881: 13]。

要するに、ガспリンスキーは、ロシアのムスリムとロシア人の道徳的な統合を望んでいる。また、ロシア人と統合することによって、ムスリムは教育の発展と近代化を手に入れると主張している。これについては、磯貝真澄も書いている。彼女によると、ガспリンスキーは、「ロシアがムスリムを飲み込むようなロシア化や同化ではなく、ロシア国家やロシア的文物についての知識普及と啓蒙による、ムスリムの「道徳的統合」」を望んでいた[磯貝 2014: 198]。要するに、ムスリムに教育を与えることで彼らを啓蒙し、ロシア人と統合させようとしたのである。そのために、古くから残っていたマクタブとマドラサの改革が必要であった。これについて、ガспリンスキーは『ロシアのムスリム』で次のように述べている。

ロシア・ムスリムの知的な発展の問題を従来の基礎の上に据えるには、カザン、ウファ、オレンブルグ、アストラハン、タシュケント、サマルカンド、バクー、ヌハ、バフチサライのような、ロシア中のムスリム中心地のマドラサ 9~10 校に、小さな改革を施すことのみが必要である。.....改革の要となるのは、.....これらのマドラサの課程に初等の、普通教育の諸科学の、タタール語による教授を導入することであるはずだ（地理、歴史、理科、算数.....）。.....[その後] 15 年も経ずしてロシアのムスリム集団は、現在の無学な聖職者らのかわりに、教育を受けたウラマーである進歩的な聖職者らを、.....専門教育を受けた進歩的な教育者らを、擁するだろう。そうなれば、初等学校であるマクタブの課程を時代が要請するレベルにまで引き上げ、そこに.....より良い、改善された教授法を導入できるだろうに[磯貝 2014: 198]。

これは、磯貝真澄が『ロシアのムスリム』の内容をまとめたものである。上記のように、ガспリンスキーはロシア・ムスリム地域の教育施設を改革することにより、ムスリムとロシア人の道徳的統合を望んでいた。そのために、ムスリムを現地の言語、つまりタタール語で教育し、近代化や科学の必要性を説明すべきことを主張している。

『ロシアのムスリム』を分析すれば、ガспリンスキーの教育構想が見えてくる。彼は、ロシアのムスリムはロシア語ができないことを問題としている。初等教育でロシア語を勉強するには時間がかかるため、民衆を現地の言語で教育するように呼びかけている。ロシアのムスリムに世俗的な科学を教えない限り、彼らは近代化、科学、教育の必要性を理解できないと述べている。近代化・教育・科学の必要性を理解できなければ、

ロシアの学校にも行けないと述べ、古くから存在しているマクタブとマドラサに現地語（タタール語）による教授法を導入しなければいけないと主張している。また、現地語で雑誌・新聞などのような出版物の必要性にも触れている。

本論説の最後に、彼の意図とムスリムとロシア人の統合できない理由を次のように書いている。

- 1) 無学による不信はロシアのムスリムとロシア政府の統合の障壁となっている。
- 2) ロシアのムスリム社会にロシア語でロシア文化を普及することは無意味である。ムスリム 100 人のうち一人もロシア式の学校に興味を持っていない。
- 3) もし、基本的な初等教育をタタール語で教えるのであれば、ロシアのムスリムの知識へのアクセスはより簡単になる。これは政府にとって危害もなく、中流階級の知識水準も向上する。
- 4) タタール語による出版事業の状況の促進する必要がある。タタール人の多くは読み書きができるため、直ちに必要とされ有用で実用的な情報を普及させなければいけない。そのために、ムスリムが話す言語によるあらゆる出版物を保護し、推進しなければいけない。
- 5) タタール人が住んでいる地域の裁判所には現地の通訳者が必要である。これは、祖国に対する冷淡さという大きな損失と不幸からムスリムを救うためである。また、ロシア語による命令を現地語の訳付きで公表しなければいけない。
- 6) 上記のような対策はロシア語にも、ロシア政府にも悪い影響を与えないのである[Gasprinskii 1881: 43]。

ガスプリンスキーのこうした意図を見ると、彼の目的は明らかになってくる。彼はロシアのムスリムの発展を試み、初等学校ではタタール語で教えなければいけないと主張している。また、彼は民衆に当時の状況を伝えるために現地語による出版物が必要だと述べている。彼は、タタール人だけではなく、ロシアのすべてのムスリムの発展をめざしていた。そのため、史料や先行研究によると、ガスプリンスキーはトルキスタンを 2 回訪問したのである。

次に、ガスプリンスキーの「新方式学校」に関する関心を引き起こした要因について検討してみたい。これについてはアブディラシドフ[Abdirashidov 2011]が詳しく書いている。彼によると、第 1 の理由は、コメニウス（Jan Amos Komensky 1592-1670）の教育理論である。教育の最初の段階で生徒に母語を教えることについてコメニウスは、誰かに母語を教える前に外国語を教えることは不合理であると書いている。ガスプリンスキーも旧方式学校について、アラビア文字を教えてからすぐに生徒にペルシア語もしくはアラビア語の本が読まされていたことを指摘し、このような方法は生徒にとって非常に

難しく、これに関しては誰もが無関心だったと述べている[Abdirashidov 2011: 175]。もう一つの理由は、ヨハン・ハインリッヒ・ペスタロッチ（Johann Heinrich Pestalozzi 1746-1827）の教授法であった。ペスタロッチの教授法の重点は「Anschauungsprinzip」つまり、「観測の原則」に基づいている。ペスタロッチによると、観測は、生徒が正しく考え、明確な発想ができるようになる思考過程の最初のポイントである。ペスタロッチの教授法では、教育は初歩から始まるべきであり、生徒の発達に合わせて段階的に前進しなければならない。生徒は主題を完全に習得しない限り先生が前に進んではならない。先生と生徒間の関係、学校の規律などは愛に基づかなければならない[Abdirashidov 2011: 176]。アブディラシドフは、ペスタロッチの上記の教授法がガスプリンスキーの教授法でもムスリムの伝統に適応された形で見られると指摘している。また、第 3 の理由（刺激）は、オスマン帝国の教育制度である。オスマン帝国における教育の変換は 18 世紀に始まった。その背景に、ヨーロッパ諸国に対する軍事行動におけるオスマン帝国の敗北がある。1734、1776、1795 年に新型の軍事学校が開校された。1827 年には医科学校が開校された。スルタン・マフムード II（Sultan Mahmud II 1808-1839）は、1824 年に初等・高等教育機関を改革するように命令した。後に、1869 年に学校における教育課程を改めた「普通教育プログラム」が規定された。このプログラムに基づいて初等学校の「新方式 usul-i jadid」というコースに『初歩の簡単な算数』、『オスマン帝国小史』、『初歩の地理』などの科目が導入された[Abdirashidov 2011: 180-181]。アブディラシドフによると、「新方式」という用語は、初めてトルコの学校でセリム・サービト（Selim Sabit 1829-1911）によって 1865 年に使用されたという。またアブディラシドフは、ロシアのムスリムは「新方式」をトルコの教師から借用したと指摘している[Abdirashidov 2011: 181]。

上記に見てきたように、アブディラシドフはガスプリンスキーの新方式学校の開設には三つの要因があると主張している。総合的に考えてみると、彼の主張はうなずける。このような要因から、ガスプリンスキーの新方式学校は開校されたのである。

次に、ガスプリンスキーの教授法検討してみよう。ガスプリンスキーの教授法は次の通りである。

- A. 学校に 30-40 人の生徒を受け入れる。生徒の数はこの数字を超えれば、教師は助手を雇わなければいけない。
- B. 1 学年に 2 回、夏の初めと冬の初めに生徒を受け入れる。毎回受け入れられた生徒からクラスを作る。
- C. 教師は生徒の数によって 3-4 クラスに分ける。
- D. 3 年制学校のカリキュラムは次の通りである。1 年生：アルファベットの読み書き、トルコ語音読、暗算。2 年生：トルコ語とアラビア語音読、覚えた単語の書

き方、精神的な計算法による練習問題、数字の書き方、鉛筆による練習。3年生：トルコ語とアラビア語音読（学校によってはペルシア語も）、宗教に関する最初の基礎、礼拝作法、トルコ語の文法、算数、読み終わったテキストのトルコ語での口頭発表もしくは要約の文章。

E. 授業は午前3時間と午後2時間であり、合計で1日に5時間である。各授業の間に10分の休憩がある。昼の休憩は30-45分である[Abdirashidov 2011: 182-183]。

このように、ガスプリンスキーの新方式学校のカリキュラムと教授法は明確に定められており、近代的な小学校の形に近かったのである。

トルキスタンへの旅

ガスプリンスキーは、ロシア人とロシアのムスリムの統合のための教育改革運動をクリミアだけではなく、ロシア領内の全てのムスリムの間で展開するつもりだった。彼が、トルキスタンのムスリムの教育改革も望んでいたことは、彼の『ロシアのムスリム』からもわかる。たとえば、この論説ではマドラサの改革について次のように書いている。

ロシア人は、有名な科学者と哲学者を育成したロシア領内のムスリムのマドラサを復興させることでロシア帝国と人類の発展に貢献できると思う。これを実現するのは難しくなく、費用もそれほど高くない。ロシアのムスリムを教育するためにカザン、ウファ、オレンブルグ、アストラハン、タシュケント、サマルカンド、バクー、ヌハ、バフチサライなどのような諸都市の9-10校のマドラサを改革すべきである[Gasprinskii 1881: 40]。

この記述からわかるように、ガスプリンスキーはトルキスタンの教育改革も試みていた。1893年にブハラのアミールであるアブドゥル・アハドはロシア帝国を訪問したときに、バフチサライも訪ねた。ここでガスプリンスキーと会って、彼をブハラに招待した[Sharipov 2002: 31]。これを受けて、ガスプリンスキーは同年の5月にブハラを訪ねた。旅中にサマルカンドとタシュケントも訪問し、いくつかの旧方式学校（マクタブ）を見学したという。この旅について、ナイム・カリモフも書いている。

バフチサライでイスマイル・ガスプリンスキーによって刊行され始めた新聞『テルジュマン』は、トルキスタンの文化・社会的な生活に大きな影響を与えた。自分の新聞がトルキスタンでも人気を集めたことを喜んだガスプリンスキーは1893年と1898年にトルキスタンを訪問した[Karimov 2011: 29]。

このように、ガスプリンスキーは 2 度トルキスタンを訪れ、現地のマクタブとマドラサを見学した。さらに、現地のムスリム知識人やロシア政府関係者などとも話し合い、トルキスタンにおける新方式学校の開校に貢献した。ガスプリンスキーは、トルキスタンの代表的な知識人であるベフブーディーとも会った。この出会いをハージ・ムイーンは次のように描いている。

ある日（1908 年）新聞『テルジュマン』の編集者であるイスマイル・ベイ・ガスプリンスキーは（創刊 25 周年の記念祭後）サマルカンドに来たときに、ベフブーディーは泣きながら抱きしめて挨拶をした。ベフブーディーは挨拶しながら「我々には、今日はあなたのところに来て、あなたと話しをして理解できる知識人はいません」と言った。イスマイル・ベイは「ベフブーディー殿、泣かないでください。（会議に来た観客を示しながら）この方々で十分ではないですか？さらに、あなたがたが努力すれば、短い期間で民族に奉仕できる大勢の人々を育てられるでしょう」と答えた[Hoji Muin 2005: 30]。

要するに、ガスプリンスキーは 1908 年にトルキスタンを訪問したときに現地のムスリム知識人のために会議を行い、彼らを教育改革に呼びかけていたことが推察できる。ベフブーディーと会って、トルキスタンの教育改革について意見交換したとも言える。さらに、ガスプリンスキーは現地のムスリムだけではなく、ロシア政府の教育関係者とも会ったことがある。たとえば、シャリポフによると、ガスプリンスキーは 1893 年にトルキスタンを訪問したときに、オストロウモフとも会って、トルキスタンの教育制度について話したのである[Sharipov 2002: 32]。

小結

本章ではトルキスタンでは古くから存在していた初等学校のマクタブ、高等学院のマドラサ、さらに、ロシア政府によって開校されたロシア語・現地語学校、そして、ジャディード運動の創設者であるガスプリンスキーについて検討した。

マクタブは 20 世紀初頭になると、時代の要請に対応できなくなった。この時代はマクタブの崩壊期とも言える。マドラサも価値を失ってきた。

ロシア側の観察者もムスリム知識人もマクタブとマドラサを批判的に捉えていることがわかる。なぜ両者ともマクタブとマドラサを批判的に評価しているのだろうか。ロシア当局はトルキスタンの教育を改革しようとし、そのために、ロシア語・現地語学校を開校し、ムスリムの子供を教育しようとした。その一方、ロシア統治後の発展を示すために、マクタブとマドラサを意図的に批判しているように思われる。

もちろん、トルキスタンでも近代化が進み、マクタブとマドラサで行われる教育だけでは不十分になり、これらの改革が必要になったのは事実である。しかし、マクタブとマドラサはムスリムの子弟を教育する上では大きな役割を果たしていたといえる。

新方式学校の担い手であるジャディード知識人もマクタブを批判的にみていた。その理由は、トルキスタンの発展のためにはイスラーム教だけではなく、世俗的な教育も受けた若い青年が必要だと考えていたからである。そこで、ムスリム知識人はマクタブを改革しようとしたのである。彼らはマクタブを閉ざすのではなく、マクタブの改革を試みたのである。

ロシア帝国がトルキスタンを征服してから、支配するためにはロシア語が必要だと見なし、ロシア語・現地語学校を開校し始めた。ロシア帝国はこのような方法でロシア語とロシアの文化を広めようとした。しかし、トルキスタンのムスリムはロシア語・現地語学校に疑問を持ち、これはムスリムのロシア化のために開校された学校だと考え、自分の子供をこの学校に送ることはしなかった。ロシア側もさまざまな方法を考え、ムスリムの生徒を集めようとしたが、成功することはできなかった。

このような状況の中で、クリミア・タタール人のガスプリンスキーは、ムスリムのために「新方式学校」を開設した。彼は 40 日間 12 人のムスリム生徒を教育し、読み書きができるようにした。彼は新方式学校をクリミアだけではなく、トルキスタンでも開校しようとしたのである。この目的で彼は 2 度トルキスタンを訪問し、現地の知識人と新方式学校の開校について話し合った。このようにして、ガスプリンスキーの影響でトルキスタンでも教育改革運が出発することになった。次の章では、トルキスタンにおけるジャディード運動の誕生と、知識人の試みについて述べる。

第3章

トルキスタンにおけるジャディード運動

本章では、ロシア統治下に入ってからトルキスタンで行われた教育改革運動について考察する。とくに、民衆の啓蒙運動を試みたジャディード知識人の教育の発展への貢献について考察する。さらに、ジャディード知識人の代表的な人物であるマフムードホジャ・ベフブーディーの活動を分析し、彼が刊行していた雑誌『アーイナ Ayina』も検討する。

すでに述べたように、トルキスタンの征服後、ロシア帝国はロシア語・現地語学校の導入によって教育を改革しようとした。これと同時に、クリミアではムスリム知識人による教育改革運動が始まっていた。この教育改革運動の創設者であるイスマイル・ガสปリンスキーは新方式学校を開校し、それをトルキスタンにも普及しようとしたのである。彼はその目的でトルキスタンを訪問し、この地のムスリム知識人と対話した。彼の影響でトルキスタンでもジャディード運動は広まり、新方式学校の開校が始まった。トルキスタンのジャディード知識人も教育改革運動に積極的に取り組み、様々な形で教育の発展を試みたのである。彼らは女子教育の発展のためにも努力したが成功を収めることはできなかった。さらに、民衆を啓蒙し、自由、進歩をもたらそうとしたジャディード知識人はこれを実現する方法の一つは演劇と理解し、この方面でも努力した。このようにしてジャディード知識人はトルキスタンで30年ほど続くことになる。

本章の第1節では、トルキスタンにおけるジャディード運動の展開について論じる。ここでは、女子教育の問題や戯曲の創刊についてもふれ、最後に、ジャディード知識人によって開校された新方式学校について検討する。第2節では、トルキスタンにおけるジャディード運動の代表者であるマフムードホジャ・ベフブーディーの活動について述べる。第3節では、ベフブーディーによって刊行された雑誌『アーイナ』について述べ、教育の発展における『アーイナ』の役割について検討する。

第1節 ジャディード運動の展開

ジャディードとはアラビア語で「新しい」という意味を表す。19世紀末からムスリム知識人はトルキスタンで「新方式学校」を中心とした改革運動を始めた。この運動はこの名前にちなんで「ジャディード運動」と呼ばれる[Khikmatullaev 2014: 379]。

トルキスタンにおけるジャディード運動の展開の背景にはクリミア・タタール人のイスマイル・ガสปリンスキーの役割が大きい。前章にも述べたように、ガสปリンスキ

ーは、新方式教育をロシア領内の全てのムスリムの間で展開するつもりだった。その目的で2度トルキスタンを訪問している。

もちろん、トルキスタンにおけるジャディード運動の展開にはガスプリンスキーとともに、当時の出版物も大きく影響を与えた。ゼキ・ヴェリディ・トガン（Zeki Velidi Togan）の指摘によると、トルキスタンの知識人は新しい発想をアゼルバイジャン、イラン、トルコとタタールの文学から学び、彼らの大多数は『テルジュマン』から学んでいたという[Abdirashidov 2011: 160]。たとえば、アブドゥッラ・アウラーニー（Abdulla Avloniy 1874-1934）の『自伝 Tarjimai hol』によると、彼は『テルジュマン』を読み始めてから、当時の状況を認識し始めた。彼は、次のように書いている。

当時、家族を養うために冬の日々も働かなければならなくなった。経済的にも中産階層であったため、マドラサをやめることにした。その当時、私は労働者になったので、資産家やモッラーたちに反対する詩を書き始めた。マドラサをやめても、教育の世界を去らなかった。様々な新聞を読んでいた。当時、ロシアの様々な地域で出版された出版物を読み始め、自分の知識を増やしていった。新聞『テルジュマン』を読んで、この時代の状況を認識し始めた。この時に、保守派と新方式派（eskilik-yangilik）の間で対立が始まった。私もジャディード知識人の一人となった。1904 年からジャディード知識人とともに働き始めた。「新方式学校」を開校し、教師を務め始めたのである[Karimov 1999: 24]。

ここにあるように、アウラーニーはロシアの様々な出版物とともに『テルジュマン』も読んでいたことがわかる。その影響で彼はジャディード知識人になったのである。また、ハージ・ムイーンはベフブーディーも『テルジュマン』を読んでいたと述べている。

1899 年の巡礼から戻ってきた後、ベフブーディーはバフチサライで刊行されている『テルジュマン』を読み始めた。また、様々な伝統・科学的な教科書を読んで、自分の知識を広めていった[Hoji Muin 2005: 22]。

このように、ベフブーディーもガスプリンスキーの『テルジュマン』を読みながら、自分の知識を広めていた。また、ハムザ・ハキムザーダ・ニヤズィーもこの新聞を読んでいたことを自分の『自伝』に書いている。

1907 年に親父の巡礼を見送るためにカシュガルまで行き、そこで初めて新聞『時 Vaqt』と『バフチサライ Boqchasaroi』（実は『テルジュマン』-Karimov）を読む

ようになって帰ってきた。そのときから、古い習慣、マドラサの教育、民衆の日常生活の変化、文化や経済などについて調べ始めた[Karimov 1999: 25]。

上記の記述からわかるように、トルキスタンにおけるジャディード運動の展開において出版物、とくに『テルジュマン』の役割は大きかった。トルキスタンの代表的な知識人はこのような出版物を読んだり、近代化がより進んでいる諸都市を訪問したりして近代化を理解し、民衆の啓蒙の必要性を認めたのである。

もちろん、タタール人によって広がり始めた教育改革よりも先にトルキスタンの発展を目指していたアフマド・ダーニシュ (Ahmad Donish 1827-1897)、フルカト (Furqat 1859-1909) などのような知識人もいた。たとえば、アフマド・ダーニシュはブハラ・アミール国の大使として3度 (1857, 1869, 1874) ロシアを訪問した[Rizaev 1997: 29]。小松久男はアフマド・ダーニシュについて次のように述べている。

彼 (アフマド・ダーニシュ) は、イスラームの神学、法学はもとより、天文学、幾何学、医学、歴史、文学そして書道にすぐれた卓越したウラマーであり、またアミールのロシア派遣使節団の書記として3度ロシアの地を旅したことのある経験豊富な外交官でもあった[小松 1996: 45]。

リザエフと小松久男によると、アフマド・ダーニシュは3度ロシアを旅し、ロシアの中心的な地域を訪問し、その印象を自分の著作に残している。ロシアを訪問した後、彼はブハラの変革を目指していた。しかし、フルカト、アフマド・ダーニシュらの活動にみられるような先覚的な思想が生まれていたとしても、それが広く人々に共有されることはなかった。しかし、19世紀末になるとトルキスタンでは様々な変化が現れた。ロシアがトルキスタンを征服して、トルキスタン総督府を設立してから、トルキスタンの社会と文化は大きく変化し始めた。ロシアはトルキスタンにロシア文化を広めるために、教育の分野を改革しようとした。第2章で述べたように、ムスリムの子供は初等学校のマクタブに通っており、ロシア政府が開校したロシア語学校に入学するムスリムの生徒はきわめて少なかった。こうした中で、トルキスタンのムスリム知識人は、マクタブはロシアがもたらした近代的な社会の要請に対応できていないと判断し、教育改革を考え始めたのである。

ここで、もっとも代表的なジャディード知識人を紹介しておこう。サマルカンドではベフブーディー(1875-1919)、ハージ・ムイーン(1883-1942)、タシュケントではムナツヴァル・カリ(1878-1931)、アブドゥッラ・アウラーニー(1878-1934)、アブドゥッラ・カーディリー(1894-1938)、ブハラではフィトラト(1886-1938)、アンディジャンではチョルパ

ン(1897-1938)、コーカンドではハムザ・ハキムザーダ(1889-1929)などがいる。彼らの活動の範囲は非常に広がった。

トルキスタンのジャディード知識人はそれぞれ自分の目的を持っていたが、彼らの主な目的は民衆を啓蒙することだと言える。トルキスタンの各地域のジャディード知識人は様々な形で交流し、お互いに意見交換していたことは明らかである。彼らの交流手段は、出版、戯曲、文通などである。たとえば、1913年にサマルカンドで出版されたベフブーディーの『父殺し』を1914年2月にタシュケントのジャディード知識人ムナツヴァール・カリ、アウラーニーらによって創設された「トゥラン」劇団が上演した。また、ムナツヴァール・カリとハムザ・ハキムゾダは手紙を通じて連絡をとっていた。ここで、彼らの手紙を紹介しておきたい。

親愛なるカリ・エフエンディ

この本をすみやかに下記の住所に送っていただくようお願いいたします。この本が手書きということは郵便局の従業員に分からないように包装するようにお願いいたします。全ての出費は私が払います。

住所：旧マルギラン市 (Star.Margilan)、チャイニーバザール (Chaini bazar)、ザイヌーリン様へ、ハムザ・ハキムゾダより。

ハムザ・ニヤズィー

親愛なるハムザ・エフエンディ

『フェルザ・ハーヌム Ferzaxanim』はまだ送らないでください。近いうちに私があなたのところに行く可能性があります。そのときに話し合しましょう。現在、どこでも紙が不足しています。[中略]。あなたの『民族歌 Milliy ashulalar』は短かったので、出版されたのです。

あなたの友 ムナツヴァール・カリ 1916年1月17日[Munavvar Qori 2003: 38-39]

このように、ジャディード知識人は様々な形で交流し、トルキスタンの民衆を啓蒙しようとした。当時のトルキスタンの民衆の大多数は無知で無学であったため、第1の目的は無学な民衆の啓蒙だったに違いない。この目的で、ジャディード知識人はムスリムの教育を改革しようとした。また、戯曲を書き、上演したりして社会のかかえる問題をわかりやすく民衆に紹介しようとした。さらに、1905年の革命後ジャディード知識人は、様々な新聞や雑誌を出版しさまざまな論説を通して、トルキスタンの現状を近代化の方法を伝えようとした。ここまでトルキスタンにおけるジャディード運動の展開について

検討したが、次にトルキスタンのジャディード知識人の試みと新方式学校について考察する。

民衆の啓蒙運動としての新方式学校

ジャディード知識人の主な活動の一つは教育改革運動だった。彼らはトルキスタンに古くから存在していたマクタブとマドラサを改革しようとした。トルキスタンのムスリムは自分の子供のロシア化を恐れ、ロシア政府のロシア語・現地語学校に送ることはしなかった。そこでトルキスタンの知識人が新しい教育改革運動を始め、新方式学校を開校し始めた。この運動はジャディード運動と呼ばれた。新方式学校の創設者はガスプリンスキー（1852-1914）である[Qosimov 1990: 71]。彼は 1884 年に自分で提案した新方式を用いて 40 日間で 12 人の生徒を教え、読み書きができるようにした。その後、ガスプリンスキーの影響で、トルキスタンで新方式学校が開校され始めた。では、新方式学校はどのようなもので、どのような教育が行われていたのかをみてみよう。新方式学校について日本の代表的な研究者である小松久男は次のように述べている。

この学校は、発声方式による読み書きの訓練、イスラームの基本知識に加えて数学、理科、歴史、地理、ロシア語などの基礎的な教養諸科目の導入、さらに母語による教科書や教室の使用などを特徴とする近代的な小学校であった[小松 1996: 57]。

オストロウーモフによると、トルキスタンでは最初の新方式学校は 1890 年代初頭にフェルガナで開校された。このような学校はタタール人の児童のためにタタール人によって開校された[Abdirashidov 2011: 199]。また、バルトリドによると、フェルガナに 1896-1898 年にタタール人によって新方式学校が開校された[Abdirashidov 2011: 199]。20 世紀初頭にタシケント、サマルカンド、ブハラ、フェルガナ地方では数 10 校以上の「新方式」の学校が開かれていた。ハージ・ムイーンによると 1901 年からコーカンドとタシケントに、1903 年からサマルカンドにも新方式学校が開かれた。しかし、A.ムハンマドジャノフによると 1900 年にブハラの近くにモッラー・ジョラバイによって新方式学校が開かれた。同年タシケントでも新方式学校が開かれたという[Muxammadjanov 1978: 53]。

トルキスタンにおける教育運動の発展の上で 1905-1907 年の革命の影響は大きかった。1905 年まで、数千校の旧方式のマクタブと比べて、新方式学校数十校しかなかった。さらに、現地民とイスラーム保守派は新方式学校に関して悪意に満ちた非難を示していた。

しかし、1905 年から知識人が開校していた新方式学校の数は急速に増加し始めた [Bendrikov 1960: 248]。

新方式学校が増えるとともに教科書の問題も出てきた。ガスプリンスキーによる最初の教科書『子供の先生 Xo‘jai sibyon』に続いてトルキスタンのジャディードも次々と教科書を出版するようになった。例えば、サイドラスルホジャは 1900 年に、『第一の師匠 Ustodi avval』を刊行した。ベフブーディーは 1901 年に『第一の作家 Adibi avval』を書いたが、それは 1907 年に刊行された。1912 年にアブドゥッラ・アウラーニー [1878 - 1934] は『最初の先生 Birinchi muallim』に続いて『第二の先生 Ikkinchi muallim』、『テュルク語のグリスタンあるいは道徳 Turkiy Guliston yoxud axloq』などの教科書を書いている [Rizaev 1997: 42]。

トルキスタンの日常生活では地域によってウズベク語、タジク語（ペルシア語に近い）などが使われており、開校される新方式学校の授業ではウズベク語、もしくはタジク語が用いられていた。また、トルキスタンにはタタール人も数多く住んでおり、彼らの言語はテュルク諸語の一つであるためウズベク人、カザフ人、キルギス人、カラカルパク人、トルクメン人に分かりやすかった。トルキスタンにおける最初の新方式学校の教師はタタール人であったため、授業中にタタール語も使われていたという。多くの学校ではタタール語の教科書も使われていた。また、トルコでトルコ語で教育を受けていた教師もいたため、多くの学校では「テュルク語¹¹」が使われていた [Bendrikov 1960: 250]。ここで語られるテュルク語は、基本的にウズベク語と変わらないが、ペルシア語やアラビア語からの借用語が多く使われる言語のことであり、当時出版されていた雑誌や新聞の論説でも同じテュルク語が使われていた。

ここまで、新方式学校の成立過程、使われた教科書、言語などについて検討したが、ここでトルキスタンにおける新方式学校の教授法とカリキュラムを検討してみよう。たとえば、ベンドリコフは、タシュケントで開校されたムナッヴァル・カリの 6 年制の新方式学校のカリキュラムを提示している [Bendrikov 1960: 266-267]。

5 年生のカリキュラム：

各科目ではなく、各教科書に掛かる時間が提示されている（ここで旧方式のやり方が見える）。

11 時間：イスラーム教の教科書『宗教の教え Xavaidj diniya』

3 時間：イスラーム教徒の問答

4 時間：コーランの音読

¹¹ 現在のウズベク語に非常に近い。

2 時間：ラヒモフの『神聖な歴史 Tarixi-i Muqaddas』（預言者ムハンマドの生涯について）

2 時間：コーランの正しい読み方、『読誦 Tajvid』ウズベク語訳

9 時間：様々な教科書からイスラーム道徳の音読と書き取り。

2 時間：A.ムミンハジャエフの『児童への教訓 Nasaix-ul-Atfol』

2 時間：『宗教の作法 Odob-i din』

4 時間：『第二の書き手 Adib-i soni』

1 時間：スーフィー・アッラーヤール（Sufi Allayar）の詩集の音読

2 時間：算数

2 時間：地理学

1 時間：自然科学

ここからわかるように、ムナツヴァル・カリの新方式学校のカリキュラムの 8 割は宗教に基づく教科書であった。算数、地理学や自然科学に与えられる時間は非常に短かった。それは、世俗的な科目を教える教科書が不足していたからと言える。

このようにジャディード知識人は、トルキスタンの様々な地域に新方式学校を開校し、ムスリムの生徒を宗教・世俗的に教育しようとした。

女子教育

ここで、当時の女子教育はどのような状況にあり、民衆は女子教育に関してどのように考えていたのかを見てみよう。まず、19 世紀末の女子教育を把握するにはベンドリコフのモノグラフが参考になる。マクタブとマドラサは男性のために開かれており、女子学校は非常に少なかった。女子学校は中央アジアの都市部により多く開かれていた。これらはアトゥン・ビビ（atun-bibi）と呼ばれる女性教師の家に開かれていた。教師はアトゥン・ビビと呼ばれていたため、その学校も「アトゥン・ビビ学校」と呼ばれていた。多くの場合、アトゥン・ビビ学校の教師は、マクタブの教師であるイマームの妻であった。このような学校では、生徒に書くことを教えるのは禁止されていた。農村部にはアトゥン・ビビ学校の数は非常に少なかった[Bendrikov 1960: 46]。このような学校の教育費はマクタブのそれより高かった。ここからもわかるように、アトゥン・ビビ学校の生徒は経済的に余裕のある家族の子女であった。アトゥン・ビビ学校の教育内容はマクタブの教育内容と近かった。しかし、コーランの暗記より、ペルシア語、テュルク語の詩の暗記のほうが多かった[Bendrikov 1960: 47]。

タタール知識人で旅行家のヌーシルヴァーン・ヤウシェフはトルキスタンの女子教育の状況について雑誌『トルキスタンの声』に論説を寄稿した。彼はトルキスタンの女性の教育と彼らの立場について次のように述べている。

一年以上トルキスタンを旅した。大きくて有名な諸都市にも滞在した。しかし、残念ながら女性のための学校は一枚も見ることができなかった。すなわち、トルキスタンでは女性は勉強しないのである。そのため、児童教育にあたる女性や本当の女性教師はいない。我々の若く無垢な子供たちは無知な母親のもとで、不作法で無知なままに育つ。〔中略〕

今日まで我々は女性や母親に圧力をかけてきた。つまり、読み書きを教えなかった。親愛な母親を「悪魔」と決め付けていた。自分のことだけを考え、母親たちを動物扱いした。もうたくさんだ。彼らにも人々に有益な読み書きを教えよう。彼らのために女性用の学校・師範学校を開校しよう。この方法で本格的な教師と教育を受けた母親が増えるように[Nushirvan Yaushev 1914: 2]。

ここで、ヌーシルヴァーン・ヤウシェフはトルキスタンで女性が教育を受けないことを強く批判している。彼によると、トルキスタンでは女子学校は一枚もなく、トルキスタンの女性は勉強できないのである。この論説では、彼は、子供に最初の教育を与えるのは母親であり、無知な母親は子供に必要な教育を与えることができないことを指摘している。また、ずっと圧力をかけられてきたトルキスタンの女性に教育を与えるように呼びかけている。

女子教育について、ハージ・ムイーンは革命直後、1918年に新聞『労働者の声 Mehnatkashlar tovushi』に「我々の若者と娘たちの育成」という論説を寄稿した。この論説で彼は近代的な女子学校が開かれていないことについて次のように主張している。

我々のトルキスタンでタタール人の教師、後にはトルキスタンの青年によって男子生徒のために新方式学校が開かれてから 15 年間過ぎた。この間に、トルキスタンでは 50 校以上の新方式学校が開かれた。しかし、恥ずかしいことに、たった 1 校も「女子学校」は開かれなかった。正直、開くための努力もしなかったのである[Hoji Muin 2005: 77]。

ここで、ハージ・ムイーンはアトゥン・ビビ学校とは異なる、女子生徒のための近代的な新方式学校が開かれていないことを批判している。また、彼は、宗教的な面からも女性を教育しなければいけないことについて次のように述べている。

預言者ムハンマドは、すべてのムスリム（女性も男性も）は教育を受けることは義務であることをはっきりと伝えている。しかし、我々は自分の娘たちを学校に送ることをせず、動物のように家の中に閉じ込め、教育しないのである[Hoji Muin 2005: 78]。

ハージ・ムイーンの考えに従えば、トルキスタンのムスリムはイスラーム教の教えも無視していたことになる。近代的な女子学校がなかったのはもとより、トルキスタンのムスリムは娘たちを旧式のアトゥン・ビビ学校にも送ることはしなかった。彼は、「娘たちを学校に送らない理由は、トルキスタンでは女性の義務は家庭の家事と子供のしつけであること」だと指摘し、このような因習を強く批判している。

トルキスタンにおけるジャディード演劇の誕生

20 世紀初頭にロシア帝国、トルコ、アゼルバイジャンなどで始まった近代化のもう一つの重要な分野は演劇である。まず、ヨーロッパで誕生し盛んになった演劇はロシア領内のアゼルバイジャンにも見られるようになった。もちろん、トルキスタンでも発展し始めた。トルキスタンにおける演劇の誕生にはタタール人とアゼルバイジャン人の知識人の役割が大きい。ここではトルキスタンにおける演劇の成立過程を検討してみよう。

19 世紀後半に、ロシア帝国がトルキスタンを征服してから、ロシアの文化を広める目的でロシアの演劇が上演されるようになった。1867 年にレハノフ（S.V. Lexanov）、レハノヴァ（M.G. Lexanova）、ウリヤノフ（N.F. Ul'yanov）らによって、タシュケントに最初の演劇サークルが開設された[Rizaev 1997: 21]。その後、次々とトルキスタンの他の様々な地域にも演劇サークルが生まれた。1877 年 10 月 7 日にロシアからナドレル（F.I. Nadler）が率いるロシア劇団がトルキスタンを訪問した。その後も様々な劇団が訪問し、ロシア物だけでなく、シェイクスピア、エウリピデスなどの悲劇なども演じた。1880-1917 年の間にトルキスタンを 100 以上の劇団が訪問したという[Rizaev 1997: 22-23]。また、リザエフによると、1905-1907 年の間に西洋の劇団の訪問が増えた。とくに 1907-1910 年にはイタリアのオペラ団がトルキスタンを 4 度も訪問した[Rizaev 1997: 23]。

トルキスタンへの西洋の演劇と戯曲の導入のうえではアゼルバイジャンの知識人の役割が大きい。1911 年からアゼルバイジャンの役者がトルキスタンを訪問し、様々な演劇を演じたという[Rizaev 1997: 23]。また、アゼルバイジャンだけではなく、タタール知識人もトルキスタンで演劇の普及に大きな役割を果たした。1904 年からはタタール人の劇団もトルキスタンを訪問し、タタール語による演劇を上演し始めた[Rizaev 1997: 26]。このようにして、トルキスタンでも西洋式の演劇が盛んになり始めた。

このような中でトルキスタンのムスリム知識人は演劇の効果を理解し、戯曲を書き始めた。20世紀初頭は、トルキスタンの文化史ではウズベク民族演劇の登場の時代でもあった。民衆を啓蒙し、自由、進歩をもたらそうとしたジャディード知識人はこれを実現する方法の一つは演劇と理解し、この方面で努力した。なぜなら、当時、民衆の大多数は読み書きができなかったため、社会的な問題は雑誌や新聞で読むより、演劇の形で示す方が分かりやすいと考えたからである。

1911年にベフブーディーは『父殺し、もしくは学ばなかった若者の末路 Padarkush yoxud o'qumagan bolaning holi』という「3幕4場からなる民族的で最初の悲劇作品」を書いた。『父殺し』の出版はウズベク民族演劇の誕生と考えられている[ヒクマトラエフ 2014: 381]。これは最初のウズベク戯曲である。この戯曲について 1913 年 12 月 28 日に雑誌『アーイナ』に「サマルカンドにおける演劇 Samarqandda tiyotr」という記事が掲載された。この記事には次のように書かれている。

サマルカンドのウズベク人とタタール人の若い進歩主義者は団結し、ウズベク語の『父殺し』、タタール語の『騙し、騙された Oldaduk ham oldanduk』という戯曲をサマルカンドのムスリム読書室のために 1914 年 1 月 15 日の夕方にサマルカンドで演じようとした。また、この熱心なウズベク人とタタール人は団結して、コーカンド、ブハラとトルキスタンの他の諸都市でも民族演劇を演じようとしている。彼らの目標と熱意は賞賛するに値する。編集部が届いている手紙によると、コーカンドとタシケントでも『父殺し』を演じるための準備をしているそうである。もし熱心な若者が民族戯曲を発展させれば、他の戯曲も出版されるであろう[Idora 1913: 234]。

このように、20 世紀初頭にタタール知識人の影響でトルキスタンの知識人の間でも演劇が盛んになり、トルキスタンの若者も熱心に演劇運動に取り組んだ。トルキスタンの演劇の成立の上でベフブーディーの『父殺し』は大きな役割を果たした。ベフブーディーは、『アーイナ』の 1914 年 5 月 10 日の 29 号に「演劇とは何か Tiyotr nadur?」と言う論説を掲載し、演劇を次のように説明している。

演劇は何だろう？その答えは次の通りである。演劇は戒めと説教の場であり、道徳的などがめである。演劇は鏡であり、目が見える人も耳が聞こえない人も普段の現実を明らかに見たり、聞いたりして、感動する。要するに、演劇は民衆を忠告し、戒める場所であり、悪しき習慣、悪しき慣習と悪い伝統、悲惨な行為と被害を明らかに映し出してみせる場所である。[Behbudiy 1914: 550]

演劇は民衆に社会に起きている現実を知らせる有効な手段であった。ベフブーディーも『父殺し』を通じて、民衆に無学と無知であることは危険であることを説明しようとした。『父殺し』は後にサマルカンドをはじめ、コーカンド、タシュケント、カッタクルガン、ブハラ、アンディジャン、ナマンガン、フジャンドなどの諸都市でも上演され、高い評価を得た[Shimada 2002: 4]。

ベフブーディーの作品の影響で、トルキスタンのほかの諸都市でも演劇の必要性を理解した若い進歩主義者が演劇を上演し始めた。さらに、様々な劇団も形成され始めた。ウズベク文化史における最初の劇団は 1913 年に非公式的な形で活動を始めたが、1914 年になって『トゥラン劇団 Turon truppasi』として組織された。これについてリザエフは次のように書いている。

1913 年に素人として集まったこの劇団は 1914 年末になると公式に「トゥラン劇団」と名乗り、組織的な形態をとった[Rizaev 1997: 60]。

この劇団の創設者はアブドゥッラ・アウラーニーである。アウラーニーは、『自伝』で次のように書いている。

私は 1913 年から民衆を啓蒙し、文化に接近させるために演劇を始め、役者の代表としてトルキスタンのいくつかの諸都市を訪問し、ウズベク人の間で演劇への道を開いた。『トゥラン』という慈善劇団を形成したのである[Rizaev 1997: 60]。

このように、タシュケントで最初の劇団はアウラーニーが結成したが、彼とともにタシュケントの他の知識人も演劇運動に熱心だった。たとえば、ムナツヴァル・カリ、ウバイドッラ・ホジャエフなども『トゥラン』の組織的な事業に積極的に参加した。ムナツヴァル・カリのこのような活動についてシロジッディン・アフマドは次のように書いている。

ムナツヴァル・カリは、1913 年に活動を始めたトゥラン劇団の主催者の一人である。彼は友人のアウラーニー、イルハムジャン・イナガモフ、コムルベク・ナルベコフ、トラガン・ホジャムヤロフ（タヴァッラー）、ムハンマド・パシャホジャエフ、ウバイドゥッラ・ホジャエフ、タシュポラト・ナルブタベコフらとともに劇団のすべての事業に参加した。1913 年 6-7 月にトゥラン劇団は非公式な演劇

を上演した。ムナツヴァル・カリは劇団の組織的な仕事や宣伝に積極的に参加した[Ahmad 1992: 110]。

このように、ムナツヴァル・カリも『トゥラン』の代表的な人物の一人であったことがわかる。1914年トゥラン劇団は1914年2月27日の午後7時にタシケントの新市街にある2000人収容の「コリゼー」劇場で「ムスリム支援協会」のために上演を公式的に始めた。その日はウズベク語の『父殺し』とアゼルバイジャン語の『ホル・ホル』を演じた。タシケントの劇団による『父殺し』の上演は期待された以上に上手だった[Rizaev 1997: 63]。この日、開演の前に行われたムナツヴァル・カリのスピーチの内容は次の通りである。

皆様、今までトルキスタン語¹²で演劇は一つも上演されなかったことはご存知でしょう。そのため、一部の人々は演劇を道化芝居だと理解しているのです。実は、戯曲の本当の意味は、教化の場(ibratxona)もしくは、偉人の学校(ulug‘lar maktabi)ということです。戯曲のステージ全ての側面は鏡でできている家に似ています。この家に入った人は、自分の特徴と弱点、障害と欠陥を見て、啓発されるのです。さらに、このステージで上演される悪しき習慣や欠陥などを見た人は、そのような欠陥を捨てようと努力するでしょう。演劇を悪しき習慣の薬に例える人は間違っていないでしょうか。ステージに上がり、顔に色をつけて道化師となる人は、まるで熟練した医師のようではありませんか[Munavvar qori 2003: 153-154]。

このように、ベフブーディーもムナツヴァル・カリも、演劇を高く評価し、人々に社会の弱点を教えてくれる場所だと述べている。この2人の知識人の意見からわかるように、ジャディード知識人は演劇を教育改革の一つの武器として考えていたのである。

『トゥラン』劇団は、1914年末にハージ・ムイーンとヌスラトッラ・クドラトッラの『トイ（割礼）』を上演した。この演目も『父殺し』のように成功した[Rizaev 1997: 65]。また、フェルガナ地方の町への巡業をはじめた。この巡業の目標は二つあり、一つは、資金を集め、廃刊のおそれがある『トルキスタンの声』を守ることであり、もう一つは、盆地の若者に教育・文化的なサービスを提供することで、彼らを演劇に呼び込むことであった[Rizaev 1997: 66]。1915年からトゥラン劇団は翻訳作品だけではなく、民族演劇の新たな劇作を上演し続けた。1915-1916年にアブドゥッラ・カーディリーの『不幸な花

¹² 当時トルキスタンで民衆の大多数が話していた言語であり、現在のウズベク語に非常に近い。

婿』、アブドゥッラ・アウラーニーの『弁護士は楽か』、『眠気』、ハージ・ムイーンの『虐げられた妻』などを上演した[Rizaev 1997: 67]。

上記のように、『トゥラン』劇団は、当時のもっとも代表的な劇団となり、タシュケントだけではなく、トルキスタンの諸都市を訪問し、演劇を上演したのである。この劇団は本格的な活動を続け、規約も作った。この規約は、「タシケント市のムスリム演劇愛好者の「トゥラン」劇団規約 Toshkent shahridagi musulmon drama san'ati havaskorlarining “Turon” jamiyati Nizomi」であり、1916年11月11日に公証人エゴローフによって確認された。この規約は73条から成り立っており、劇団の目的や貢献が記されている[Rizaev 1997: 68]。

1916年になって、トルキスタンでは社会・政治的に困難な状況が始まり、帝政に反対する暴動が始まった。ニコライⅡ世（Nikolai Alexandrovich Romanov 2 1894-1918）によって第一次世界大戦中の1916年6月25日に「トルキスタン、カフカス、シベリアの19歳から43歳までの男性を戦時労働へ動員する」という命令が發布されたからである。その結果、シルダリヤ州から8万7千人、サマルカンド州から3万8千人、フェルガナ州から5万人が派遣されるように決定された[Tillaboyev 2010: 102-103]。この命令に反対して、トルキスタンの諸都市で暴動が始まった。1916年7月4日にフジャンドで、7月5日にはサマルカンドで暴動が始まった。同年の7月11日にはタシュケントでも暴動が始まった。7月10日にエスキ・マルギランでも2万5千人からなる暴動が起こった。さらに、7月13日にジッザフでも大きな暴動が始まった[Tillaboyev 2010: 103-106]。

このような状況のなかで演劇運動も停滞するようになった。『トゥラン』劇団はある程度活動を続けたが、以前ほど積極的ではなかった。なぜなら劇団のメンバーはこのときに沸騰していた政治・社会的な活動に忙殺されていたからである。サマルカンドや他の諸都市の劇団は完全に活躍を止めていた[Rizaev 1997: 90]。

1917年のロシア二月革命後、『トゥラン劇団』などを基礎としたトルキスタン地方のムスリムを代表する「イスラーム協議会 Sho'roi islomiya¹³」が組織された[Rizaev 1997: 105]。しかし、やがて「保守派とジャディード」の対立が激化した。ムスリム聖職者はこれとは別に「ウラマー」協会を組織した。このようにして、イスラーム保守派のウラマーとジャディード知識人の対立は大きくなっていった。両者の対立は1917年10月にボリシェビキが政権を握ることを可能にすることになる。

¹³ Sho'roi islomiya—1917年のロシア二月革命後、タシュケントで1917年3月14日に、トルキスタンのムスリムを統合し、政治的な権利を獲得するために開設された協会である[Mingnorov 2002: 4]を参照。

教育問題をめぐる議論

ロシア統治以前のトルキスタンでは寺子屋式の初等学校マクタブと高等学院のマドラサが存在していた。これに対して、ロシアは 1884 年からロシア語・現地語学校を開設し、ロシア語クラスとムスリム・クラス二つのグループに分けて教育を行うようになった。その背景には、教育を通してロシアの文化を普及することとともにマクタブは時代の要求に対応できていないという判断があった。

トルキスタンで活動していたロシア人東洋学者オストロウモフはマクタブの環境の悪さ、体罰の存在、教授法の欠如、教師と生徒の家父長的な関係などの否定的側面を指摘し、何よりも、アラビア文字は読めるようになって母語の読み書きができるようにならない点、テキストを暗誦するばかりで知的発想が少ない点を厳しく批判している[帯谷知可 2005: 20]。

これに関連して、ガスプリンスキーが 1892 年ロシア政府宛に書いた「ムスリム学校に関する覚書」がウズベキスタン国立文書館に残っている。彼はこの覚書で当時の教育問題について詳しく述べているが、ムスリムの子弟がロシア語を勉強しない理由を次のように説明している。

何年間かマドラサに付属するロシア語クラスで教師として働き、その後ムスリムの間に暮らし、ロシア語の勉強について話したことがあるが、ロシア語を勉強することに反対する意見は一度も聞いたことがない。しかし、人々はいつも私に「ロシア語を勉強する余裕がない。子供たちがシャリーア[イスラーム法]で義務付けられている宗教の勉強に間に合わないからだ。もしロシアの学校あるいはロシア語のクラスに行けば、宗教の勉強はなくなる」と苦情を述べていた¹⁴。

ここでガスプリンスキーはムスリムの子弟がロシア語を勉強しない理由を説明している。ムスリムにとって宗教教育は最も大事な教育だった。しかし、ムスリムの生徒がマクタブで宗教を学ぶならばロシア語を勉強する余裕はなくなることが指摘されている。ムスリムの子弟には何よりもイスラーム教育が優先されていたのである。また、このマクタブの教育についてガスプリンスキーは次のように述べている。

7-8 歳でマクタブに入ると生徒はアラビア語の読み方（コーランと祈り）とテュルク語（信仰と儀礼）そしてときたま書き方と数学の初歩を勉強する。このコースはマクタブの規律や教授法が存在しないことから 4-5 年間ほど

¹⁴ TsGARUz f.I-1, op.11, d.806, 2.

続く。したがってマクタブを 13-14 歳で卒業した男子は父親の仕事を手伝い、女子は花嫁になる。マクタブに行くまでは子供であり、マクタブを卒業してからも社会的条件のためにムスリムの子弟はロシア語は言うまでもなく、狭く宗教に関わる教育以外に何にもふれることができない¹⁵。

この指摘からわかるように、ムスリムの生徒は 4-5 年間のマクタブでは十分な教育を受けず、その後は父親の仕事を手伝ったり、結婚したりする。ガスプリンスキーはここに不満を感じている。このようなマクタブの機能の低さ、教師の乏しさ、そして母語の読み書きが十分にできないことは当時の教育の大きな問題であった。それでも、ムスリムは伝統的なマクタブに子弟を送り続けていた。

それでは、ジャディードの新方式学校はどのような目的で開設されたのか、また、現地のイスラーム保守派は新方式学校をどう受け入れたのか、ロシア側は新方式学校に対してどのように対応したのかを検討しよう。

ジャディード知識人は、当時のマクタブやマドラサは時代の要求に対応できないと判断し民衆を啓蒙するために新方式学校を開いた。彼らの目的は無知の中にとり残されている民衆を啓蒙することだった。これについて小松久男は次のように述べている。

ガスプリンスキーの目標は、この新方式学校によって、啓蒙されたムスリムの新世代を創出すること、換言すれば無知と因習に束縛されたムスリム社会を変革し、ロシアにおけるムスリムの地位の向上と権利の獲得とをはかることにあった[小松 1996: 58]。

上記の説明から分かるように、ジャディード知識人の目的は、民衆を教育し、ロシアにおけるムスリムの地位を向上させることにあった。ベフブーディーも先に「二つではなく四つの言語が必要なり」に次のように述べている。

我々に必要なものは何か、自分たちの利益のためにロシア語を知ろう、公立の学校で勉強しよう。国の役職に就こう。祖国と自分の宗教のために仕えよう。ムスリムとして進歩しようではないか。現代の商業、産業と国の業務、さらにイスラーム教と祖国への奉仕はロシアの学問拔きに実現できない。例えば、現在のドゥーマ「国会」で自分たちの宗教と共同体の利益のために発言することが我々にも可能になる。しかし、我々にはこのように発言する人がいない。祖国と民族のために発言するにはロシアの学校で 10 年ほど勉強しなければならない。現代と法律

¹⁵ Ibid, 2.

を知らなければならないのである[Behbudiy 1913: 13]。

ベフブーディーの目的も民衆を教育し、祖国のために奉仕できる人材を育成することだった。ジャディード知識人は新方式学校だけではなく、演劇も演じていた。民族演劇の思想は、10 年代の半ばごろにトルキスタンのすべての都市の若い知識人の心をとらえた。民衆を救うには教育が必要だと考えたジャディード知識人は、演劇の重要性を深く理解していた。特にサマルカンドとタシケントでの悲劇『父殺し』の成功は、様々な都市の若者に刺激を与えた。さらに、演劇からの収入は、その地域で経済的に困窮し、閉鎖されようとしている「新方式」学校への支援にも必要だったのである。

ジャディード運動が直面した障壁

トルキスタンにおけるジャディード運動の発展には二つの障壁があった。第一はロシアの植民地主義であった。ロシア当局はジャディード運動の発展をさまざまな方法で妨害していた。ロシア帝国は、民族主義者を育てる学校だと理解し、新方式学校に関して大きな疑いを持っていた[Muxammadjanov 1978: 53]。1910 年代に入ると、新方式学校の設立と運営にあたっていたタタール人教師を教職から追放することによって、ジャディード運動に大きな打撃を与えた[小松久男 1996: 60]。また、『父殺し』は書かれてから 2 年間出版の許可が与えられず、ティフリスの検閲官に申請してようやく許可が得られたのはその一例である。その後、「ロシア・フランス戦争におけるボロディノの会戦でロシアが勝利した 100 周年を記念して」と最初のページに記載したのは、検閲官への「ごまかし」であったことは明らかである。ロシア当局の対応は経済的な障害ともなった。例えば、演劇の上演の許可が得られないときは、賄賂を渡さなければいけなかった。もっと厳しいのは、演劇からの収入の 5 割まで政府に収めることが要求されていたことである[Rizaev 1997: 92]。さらに、ジャディード知識人の活動は、ロシア帝国の一体性を脅かす汎イスラーム主義や汎トルコ主義の運動として、たえずロシア官憲による警戒や取り締まりの対象となっていたことも事実である。

さらに、ロシア帝国は、新方式学校に疑いを持ち、このような学校を管理しようとした。トルキスタン総督サムソノフ (A.V.Samsonov 在任 1909-1914) は、1912 年 1 月 25 日にシルダリヤ州の国民学校長に次のような秘密命令を送っている。

1. 一般的な教育の基礎を持つ「新方式」学校の開校は国民学校視学局の許可を得なければならない。
2. 新しく開校される学校には生徒と同じ民族の教師が雇われるようにしなければならない。

3. 生徒に学校でロシア語が教えられるように新方式学校を開校する責任者に推奨する。
4. 学校の教育カリキュラムと使用される教科書のリストを提供するように新方式学校を開校する責任者に求める。
5. この命令が公布されたときから、全ての「新方式」学校はこの規則に従わなければならない[Muxammadjanov 1978: 79-80]。

このようにロシア当局はジャディード知識人によって開校された新方式学校を管理・監視する方法をとった。また、トルキスタンの保安機関は、ジャディード知識人を汎イスラーム主義者、ジャディード運動を汎イスラーム運動だと理解していた。これについて、現代ロシアの研究者アラポフとラーリナは「進歩主義者は、新方式学校を汎イスラーム主義思想の宣伝（propaganda）のために使用している」というロシア当局の報告を紹介している[Arapov, Larina 2006: 285]。ロシア政府は当時の出版活動にも疑いをもっていた。第一次世界大戦中に作成された「1914 年 10 月のトルキスタン地方におけるムスリム住民の動向」を記したこの報告書は、次のように述べている。

汎イスラーム主義思想の宣伝の主な方法は、近代的なムスリム出版である。ムスリム出版は多くの場合、汎イスラーム主義のために使用されていた。このようにして、ムスリム運動としての汎イスラーム主義は帝国の政治体制に反対する運動であった[Arapov, Larina 2006: 282-283]。

さらに、ロシア当局は、タシュケントのジャディード知識人ムナツヴァル・カリを汎イスラーム主義者だと理解し、彼の活動に疑いを持っていた。これについて、同じ報告書は次のように指摘している。

保安機関で汎イスラーム主義者だと登録されているムナツヴァル・カリ、ホジャエフ兄弟、ムッラー・アブドゥッラ・アウリャモフ、サリムサコフなどが集まるタシュケントの「ギャプ gap」¹⁶は保安機関に知られている。[中略]。ムナツヴァル・カリは、進歩主義者、ロシア政府によって廃刊された新聞の創設者、『トルキスタンの声』の共同編集者、タシュケントで開かれていたジャディード知識人

¹⁶ 「ギャプ gap」は、一般的に、10 数人程度の固定メンバーが、月に 1,2 回程度、定期的に誰かの家に参集し、饗宴や歓談を楽しむという形態をとる。樋渡『習慣経済と市場・開発』159 頁を参照。

が集まる「ギャブ」の参加者である。同時に、ロシア帝国の憎い敵でもある [Arapov, Larina 2006: 290-294]。

このように、ロシア政府は、新方式学校だけではなく、ジャディード運動そのものを汎イスラーム主義運動だと理解し、疑いを持っていた。

しかし、ジャディード運動は本当に汎イスラーム主義的な運動だったのかを知るために、ジャディード運動について詳しい知見を持っていたリュバコフ¹⁷の指摘を見る必要がある。彼は、ロシア二月革命後に汎イスラーム主義やジャディード運動について次のように述べている。

ロシア・ムスリムの間には大きくわけて 3 つの政治・文化的な潮流が表れた。汎イスラーム主義、汎テュルク主義、そしていわゆる新方式運動である。汎イスラーム主義は宗教を基に全世界のムスリムの統合を、汎テュルク主義は出自の共通性を基にテュルク系ムスリム諸族の統合を目的とし、[中略]、その後全ロシア・ムスリムの間に普及した新方式運動は、宗教・民族的な基盤をもとに諸民族の広く知的、文化的な向上をはかることをみずからの課題としている[小松 2012: 41]。

ここからわかるように、リュバコフは、ジャディード運動と汎イスラーム主義とを区別している。彼によると、汎イスラーム主義者は、全世界のムスリムを統合しようとしたが、ジャディード知識人は、個々の民族を知的・文化的に向上させようとしたことになる。そして、彼はジャディード知識人に対するロシア政府の見方について次のように指摘している。

新方式運動は、宗教的な基盤に基づいて全ロシア・ムスリムを統合することを目指しているという前提から出発して、旧政権は運動の中に国家の危険、ロシアの一体性を脅かす要因を認め、それゆえに活動家には疑惑の目を向け、これを否定的に扱った。運動は個々の民族で最良の聖職者を擁していたが、内務省はムスリムの宗務を管理するにあたり、彼ら以外の保守的で知的にもモラルの面でもこれに劣る分子に頼ることをよしとしたのである。

¹⁷ リュバコフ（1867 - 1922）は、内務省の外国宗教宗務部の官吏であった。サンクト・ペテルブルグ大学の歴史文献学部に学ぶとともに、音楽院ではかのリムスキー＝コルサコフから作曲の授業を受けたリュバコフは、民族誌学・音楽学の専門家であり、ウラル地方のムスリムの歌謡などの研究で知られていた。そして勤務先では帝国内のムスリム問題に関する報告を受け、これを分析する仕事にあたっていた[小松 2012: 40]。

しかしながら、個別の民族の文化的・民族的な自立への志向は、国家の一体性への脅威どころではない。民族は自立しえるが、国家からの分離を求めるわけではない[小松 2012: 44]。

このように、ロシア政府は、ジャディード運動を汎イスラーム主義運動だと判断し、彼らを抑圧した。また、彼らのあらゆる活動を管理・監視するようになったのである。

一方、イスラーム保守派も新方式学校に反対する立場をとった。たとえば、ブハラでは 1907 年に「発声方式¹⁸」を使用した新方式学校が開校され、生徒を 9 ヶ月で読み書きと四則演算ができるようにした。本学校の創設者は試験を行い、その試験に両親、イスラーム保守派、市民の有名人からなるおよそ 100 人を誘った。試験に集まった観客の間で新方式学校の教授法と教育内容に関する討論が始まり、参加者は二つのグループに分かれた。一つが、ムッラー・イクラームが率いる新方式学校の賛成派であったとすれば、もう一つは、ムッラー・アブドゥラーフィクが率いる新方式学校への反対派である。前者は、新方式学校が国と民衆の発展のために有益で、反イスラーム的な教育ではないと主張した。しかし、後者は、新方式学校が反イスラーム的、反政府的だと主張した。反対派は新方式学校に対して二つの論点を挙げた。一つ目は、教え方はイスラーム的ではなく、ロシア式もしくはユダヤ式だと主張した。生徒は机を使い、同時に読み同時に書くことを批判した。二つ目は、新方式学校はイスラーム教の原則に適應していない。イスラーム教の世界観に反する算数、地理学、自然科学のような科目が教えられていることも批判している。ブハラのイスラーム保守派は、新方式学校を次のように評した。

シャリーアの精神に反している。1 年目に、生徒は新聞を読めるようになる。2 年目に、自由を要求する。3 年目に、彼らは陛下を玉座から退陣させ、彼を刑務所に投獄する[Bendrikov 1960: 265-266]。

保守派とジャディードの対立は、新方式学校の問題と並んで演劇の問題においても激化した。

保守派の反発は、発展し始めた演劇にとって大きな障害となった。保守派のウラマーはお笑い芸人や道化役者などをただの遊びで、害のない存在だと考えていた。しかし、新方式学校と新しい演劇がムスリム民衆の間で人気を得ると、これが民衆のイデオロギーに影響を与えることを懸念するようになった。リザエフによると、ジャディード知識人の演劇活動に脅威を感じた保守派は公然たる闘争の方法を選んだ。彼らはジャディード知識人を暴力的に攻撃すらしめた。これについてリザエフ [Rizaev 1997] は M.ムハンマ

¹⁸ ガスプリンスキーの新方式であり、「新方式」もしくは「発声方式」と呼ばれていた。

ドジャノフの次の記憶を引用している。「我々知識人が上演した演劇は多くの人々に好まれたが、ウラマーやロシア帝国の官吏は我々を敵視し、さらに我々に「父殺したち」というあだ名もつけた。ナマンガンで民衆はアブドゥルカディル・ホジャという資産家によって、ナマンガンの青年運動に反対するように煽動されていた。アブドゥルカディル・ホジャはモスクで、演劇を上演した者には商店で何も売らないように、床屋では彼らを散髪しないようになどの指示を出した」と[Rizaev 1997: 93]。

演劇の普及者に対する妨害はナマンガンだけではなく、文化の面では先進的なタシケントでも激化した。保守派は、トゥラン劇団の 1914 年 2 月 27 日の演劇ポスターに手を加え、『父殺し』と『ホル・ホル』という題目の上に、「父を殺して食え」という言葉を書いたのはその一例である。この演劇の上演に努力したアブドゥッラ・アウラーニーは、自分の学校から追放された。トルキスタンの他の都市でも役者は「父殺したち」というあだ名で呼ばれていた。その元凶はモッラーたちであった[Rizaev 1997: 94]。

このようにして、ムスリム保守派はジャディード運動に様々な方法で反対、対抗した。ジャディード知識人は身体的にも思想的にも攻撃を受けたのである。教育改革の進展に脅威を感じた保守派のウラマーは、新方式学校をシャリーアからの逸脱だと決めつけ、新方式学校に反対した。これ以降、トルキスタンのムスリムは新方式学校を支持するジャディードとこれに反対するムスリム保守派の二派に分断されることになった。

第2節 ベフブーディーと彼の活動

ベフブーディーはトルキスタンにおけるジャディード運動の創始者の一人であり、代表的な教育者、積極的なジャーナリストでもあった。ベフブーディーは 1875 年 1 月 19 日にサマルカンドのバフシテパ村に生まれた[Karimov 2011: 9]。彼の父親ベフブードホジャ (Behbud Khoja) は、12 世紀のスーフィー聖者アフマド・ヤサヴィー (Ahmad Yasavi) の子孫と言われ、村のカーディー¹⁹だった[Shimada 2002: 2]。ベフブーディーは 6-7 歳になってから、母方の叔父の下で読み書きを習い、父親のベフブードホジャにコーランを習い始めた。そして、3-4 年間でコーランを完全に暗記したという [Hoji Muin 2005: 21]。15 歳になると、母方の叔父モッラー・アディルの下で宗教の基本を学んだ。27 歳でメッカへの巡礼に出発し、途中でイスタンブル、カイロなどに寄り、新旧の教育施設を訪問した。イスタンブルとエジプトからは様々な新聞や本を持って帰ったという。帰国してから、ガスプリンスキーの創刊した新聞『テルジュマン』を読み始め、民衆の啓蒙について考え始めた。これについて同郷の知識人であるハージ・ムイーンは次のように書いている。

¹⁹ カーディーはイスラーム法の裁判官。

ベフブーディーは、巡礼から戻り、何年間かオストロウモフの『トルキスタン地方新聞 Turkiston viloyati gazet²⁰』を読んでいたが、この新聞が彼に啓蒙思想のアイデアを抱かせることはなかった。『テルジュマン』を読み始めてはじめて啓蒙の必要性を実感するようになった[Hoji Muin 2005: 23]。

また、ハージ・ムイーンは新聞『ザラフシャン Zarafshan』（1923 年 3 月 25 日）で次のように書いている。

5 年（1905）の革命後、ロシアとトルキスタンでは多数の新聞や雑誌が刊行され始め、ベフブーディーもこのような新聞や雑誌に様々なテーマで記事を書いていた。[中略] 1321（1903）年サマルカンドに新方式学校が開校されてから、ベフブーディーは、民衆に教育を呼びかけるかたわら、このような学校で母語による教科書がないことを知り、新方式学校のために教科書を書き、自分で出版した[Karimov 2011: 31]。

このように、ベフブーディーは新方式学校を開校し、そのための教科書を作成・刊行した。さらに、民衆を啓蒙する方法の一つは演劇だと考えたベフブーディーは、戯曲作品も書き始めた。1911 年にベフブーディーは『父殺し、もしくは学ばなかった若者の末路』という「3 幕 4 場からなる民族的で最初の悲劇作品」を書いた。『父殺し』の出版はウズベク民族演劇の誕生と考えられている。

以上に加えて、ベフブーディーは、新聞や雑誌も刊行している。1913 年に新聞『サマルカンド Samarqand』と雑誌『アーイナ』を創刊した。この新聞と雑誌は彼の教育・文化の改革に関する考え方を明瞭に伝えている。新聞『サマルカンド』は 1913 年 4 月から同年の 9 月まで刊行された。この 5 ヶ月間で 45 号刊行されたが、経済的な困難に直面し、刊行は停止した。しかし、雑誌『アーイナ』の刊行は続けた。『アーイナ』は 1915 年まで約 2 年間刊行された。『アーイナ』には、ベフブーディーだけではなく、多くのムスリム知識人が当時の社会問題について自分の見解を寄せるようになった。

²⁰ トルキスタン地方新聞 [Turkiston Viloyatining Gazeti（ウズベク語）]は、ロシア領トルキスタンで刊行されたサルト語（ウズベク語）の新聞である。1870 年 4 月トルキスタンの総督カウフマンの命令により、植民地の官報にあたるロシア語紙「トルキスタン通報」の付録としてタシュケントで刊行された。85 年からはムスリム住民の間にロシア語を普及させる観点から、総督命令によってサルト語とロシア語のバイリンガル紙となり、論説や記事のタイトルにはロシア語訳が付けられるようになった。植民地当局の刊行した新聞とはいえ、中央アジアにおける定期刊行物の発展に果たした役割は大きい。『中央ユーラシアを知る事典』391 頁を参照。

ベフブーディーは当時の進歩主義者の間で英雄になった。当時の雑誌や新聞などに彼について数多くの論説や記事が掲載された。ハージ・ムイーンは 1923 年 3 月 25 日に新聞『ザラフシャン Zarafshon』にベフブーディーの出版活動をたたえて、次のように書いている。

ベフブーディー師は、カフカス・タタルスタンとトルキスタンで刊行されていた出版物にいつも文学・科学的、社会・政治的な論説と記事を掲載していた。彼の記事は、（『アーイナ』と『サマルカンド』以外）次の新聞と雑誌に掲載された。それは、『トルキスタン地方新聞』、『進歩』、『商人』、『太陽』、『名誉』、『アジア Osiyo』、『トゥラン Turon』、『自由 Hurriyat』、『労働者の声 Mehnatkashlar tovushi』、『偉大なトルキスタン Ulug‘ Turkiston』、『救済 Najot』、『現在の言葉 Tirik so‘z』、『テルジュマン』、『時間 Vaqt』、『シューラー Sho‘ro』、『ウルファット Ulfat』、『エルダッシュ Irdosh』、『純粋な生命 Toza hayot』などである。この 18 種類の雑誌と新聞に掲載されたベフブーディーの論説と記事を集めると、500-600 頁からなる本になるだろう。この論説や記事の多くには、重要な課題が取り上げられ、現在もその価値を失っていない。今日も我々にとって規範（dasturamal）になれる有益な内容である[Hoji Muin 2005: 27]。

この論説から、ベフブーディーは幅広く活動していたことがわかる。彼は、教育改革だけではなく、政治的、文学・科学的な問題も考えていたのである。彼が刊行していた『アーイナ』にも歴史、地理学、社会・政治的、宗教的な論説が多くみられる。また、ベフブーディーの死後、ラズィズ・アズィズザーダ（Laziz Azizzoda）は雑誌『教育と教師 Maorif va o‘qituvchi』でベフブーディーを次のように評価している。

彼の価値は歴史のある段階で、歴史的な過程において行った奉仕のためである。ベフブーディーの奉仕は、フランス人のジャン・ジャック・ルソー、ロシア人のロモノーソフ、チェルヌイシェフスキー、ドブロリューボフ、カフカス・トルコ人のファトハリ・アフンドフとナジャフベック・ヴァズィロフ、タタール人のマルジャニーとナースィリーらの奉仕と同様である。ウズベク文学もベフブーディーによってはじまり、新しい道を歩み始めた。ベフブーディーは、もっとも先にトルキスタンをロシア帝国から解放するための構想を民衆に知らせようとし人物であるとともに、民衆の破碎された状況を認識し、様々な巧妙な方法で民衆を発展のために呼びかけた人物の一人である[Karimov 2011: 4]。

この論説からわかるように、ベフブーディーは民衆の困難な状況を誰よりも先に把握し、民衆を無知と無学から啓蒙しようとした。それを可能にするために、様々な方法を考え、積極的に民衆啓蒙運動に取り組んだ。

ベフブーディーの活動はサマルカンドだけではなく、全ロシアに知られ、評価されていた。たとえば、タタール知識人のイブラヒムはベフブーディーを高く評価し、次のように述べている。

今日のサマルカンドには、その名を聖なる額に金文字で記すにふさわしい高潔で
大志ある人々がいる。専制の迫害にあわぬよう、用心のために名前は記さないで
おくが、イスラームの歴史は彼らの名前を忘れることはない。サマルカンドには
現在、志ある人々によって開設されたきわめて立派な初等学校と中等学校があり、
それぞれ全トルキスタンにとって模範となっている。開設者のアブドゥルカーデ
イル・エフェンディとその後援者ムフティーのマフムードホジャ師は、ウズベク
の英雄である[イブラヒム 2013: 26]。

タタール知識人のイブラヒムはここで、ベフブーディーが開設した新方式学校を高く評価している。すでに述べたように、ベフブーディーは新方式学校を開校し、その学校のために教科書を書いた。しかし、彼は教育改革活動だけではなく、演劇、出版などにも取り組んでいた。従って、イブラヒムは、ベフブーディーの新方式学校だけではなく、彼の活動と志を評価したのに違いない。

ベフブーディーは、1900 年に巡礼に出発した。この巡礼は 8 ヶ月間続いた[Behbudiy 2009: 55]。これについてベフブーディーは『アーイナ』の 31 号に「旅の目的 Qasdi safar」という論説を書いている。また、1914 に 2 回目の旅行に出発した。この旅行の詳細について『アーイナ』に「旅行記 Sayohat hotiralari」を書いている。この旅行記には、様々な諸都市に見たことや体験したことを書いていた。たとえば、オスマン帝国で見た教育の状況について次のように書いている。

トルコ人には一つの大学（dorulmuallimin）があり、その学生は 105 人である。学生
の全てが午後勉強する。学生 200 人用の席が用意されており、大学は 3 階建て
である。調理室、食堂、お風呂、練習室と会議室のそれぞれが分かれている。庭
もある。大学には教師 12 名と物理学教室（Hikmatxona）もある[Behbudiy 2009: 80]。

このように、ベフブーディーは旅行記には訪問した地域の社会・政治・文化的な状況を書いていた。また、バイルートの市の教育について次のように述べている。

ベイルート市はベイルート州の中心であり、教育のうえではエジプトの次に東洋では第 1 の都市である。しかし、教育の創設者はヨーロッパとアメリカの宣教師たちであり、学校と大学の発展に貢献している。ベイルートの大学はヨーロッパ人とアメリカ人によって管理されていても、使用される言語と授業はアラビア語であり、フランス語、ドイツ語あるいは英語はそれぞれ科目として教えられているらしい。ベイルート大学には、トルキスタンとブハラ以外のイスラーム世界の各地域から学生がいる。東洋の日本からも学生がいるらしい。大勢のタタール人学生もいる[Behbudiy 2009: 104]。

ベフブーディーは、ベイルート大学の学生のなかに日本人、タタール人、さらに他のムスリムの学生がいることを感動し、トルキスタンとブハラから学生がいないことを残念に思っている。このような大学を見て、学生を外国の大学に留学に送る考えは強くなったに違いないと言える。この旅行中にベフブーディーは、イスタンブルでガスプリンスキーと会って、会話したこともある。これについて『アーイナ』の第 49 号に書いている。

公園を出て馬車に乗り、ガスプリンスキー氏の泊まっているホテル「シャーヒン・パシヤ Shohin poshsho」に着きました。[中略]。部屋で私にロシア、トルキスタン、イスラーム界と世界について話してくれました。ムスリムは徐々に発展していることを話して喜びました。そして、今度あなたが話してくださいと私に言いました。

私は、サマルカンド、ブハラ、タシュケント、ヒヴァ、フェルガナなどについて話しました。

ガスプリンスキー氏は、「神様に感謝することに、トルキスタンのムスリムも政府の学校に子供を送るようになったそうです。今、あなたがたには刊行されている雑誌二つと新聞一つがある。あなた方の学校もある程度発展している。必ず、政府の発展に貢献する学校にもっと大勢の生徒を送ってください。ロシアの文化を避けないでください。ブハラはどうなるか心配です」と言いました。私は「先生、ブハラを我々の政府、つまりロシアが管理しなければ、ブハラから何かを期待することはできません」と答えました[Behbudiy 2009: 82]。

この会話から、ガスプリンスキーとベフブーディー主な話題は、教育であり、ガスプリンスキーはロシアの学校に生徒をもっと送るように進めていることがわかる。ベフブ

ーディーもブハラを将来を心配し、ロシア政府がブハラを管理したほうがいいと述べている。この 2 人の代表的なジャディード知識人はロシア政府がもたらす近代化を理解していたこともわかる。さて、なぜベフブーディーはこのように、旅行し、トルキスタンの教育改革を目指したのだろうか。

ベフブーディーには大きな構想があった。彼はトルキスタンのムスリムを統合し、ここに自治を実現する方面で努力した。そのためにも教育が必要不可欠だったのは明らかであった。ロシア 10 月革命後の 1917 年 11 月 26 日コーカンドで第 4 回トルキスタン・ムスリム大会が開かれ、ここで「トルキスタン自治政府 Turkiston muxtoriyati²¹」が宣言された。しかし、トルキスタン自治政府は 1918 年 2 月 22 日ソビエト政権によって打倒された。トルキスタン自治の構想について後に詳しく検討する。

このように、ベフブーディーは幅広く活動し、トルキスタンのムスリムを無学と無知から啓蒙する方面で努力した。ベフブーディーの死は突然であった。ベフブーディーは 1919 年にカルシ市のハーキム（知事）であるムハンマド・サイードベク・ビー・イナキ・カラシ [Muhammad Sayyid Bek Bi Inaqi kalan]（ブハラのアミールであるアミール・アーリム・ハンの叔父）によって逮捕され、後に殺害された[Shimada 2002: 6]。

第 3 節 雑誌『アーイナ』について

20 世紀初頭になると、トルキスタンではムスリム知識人がジャディード運動を展開し、教育改革運動を始めた。1905 年のロシア革命が帝政に一時的な動揺をもたらすと、ロシア領内のムスリムの改革・民族運動はかつてない高揚をみた。タタール人やアゼルバイジャン人のジャディード知識人は、ロシア・ムスリム大会の開催や最初のムスリム政党「ムスリム連盟」の結成などを通してロシア・ムスリム組織化を試み、主要な都市ではムスリムの主張を掲げた新聞・雑誌が続々と創刊された。トルキスタンにおけるムスリム・ジャーナリズムもこのときに誕生した[間野 1999: 195]。1896 年からイスマイル・アビドフ (Ismoil Obidov) は新聞『進歩 Taraqqiy』を創刊し始めた。以後、新聞『太陽 Xurshid』、『名誉 Shuhrat』（1907 年）、『商人 Tujjar』（1907 年）、『トルキスタンの声 Sadoi Turkiston』、『フェルガナの声 Sadoi Farg'ona』（1914 年）などの新聞や雑誌が創刊された[Alimova D. 1998: 5]。

²¹ Turkiston Muxtoriyati[ウズベク語]ーロシア二月革命は、植民地トルキスタンにおいてもムスリムの政治・社会運動の活性化を促し、自治の実現が中心的な課題となった。1917 年 11 月にフェルガナ地方のコーカンドで開かれた第 4 回臨時トルキスタン・ムスリム大会は、民主的なロシア連邦共和国の形成を前提としたトルキスタンの自治を決議した。しかし、1918 年 2 月 19 日、トルキスタン自治政府はソビエト政権とアルメニア人民族組織の軍事力により打倒され、コーカンドは流血と破壊の巷と化した。『中央ユーラシアを知る事典』389 - 390 頁を参照。

サマルカンドの代表的な知識人であるベフブーディーも 1913 年に新聞『サマルカンド Samarqand』と雑誌『鏡 Oyna（アーイナ）』を刊行している。この新聞と雑誌は彼の教育・文化の改革に関する考え方を明瞭に伝えている。新聞『サマルカンド』は 1913 年 4 月から同年の 9 月まで刊行された。この 5 ヶ月間で 44 号刊行されたが、経済的な困難に直面して刊行は停止した。しかし、雑誌『アーイナ』の刊行は続けた。『アーイナ』は 1915 年まで約 2 年間刊行された。『アーイナ』には、ベフブーディーだけではなく、多くのムスリム知識人が当時の社会問題について自分の見解を寄せるようになった[ジャスル・ヒクマトラエフ 2014: 380-381]。『アーイナ』の第 1 号は 1913 年 8 月 20 日に刊行された[Shimada 2002: 7]。『アーイナ』は各号 24~32 頁、発行部数は 400~600 程度であった[小松 1996: 8]。ベフブーディーの刊行についてハージ・ムイーンは次のように書いている。

ベフブーディーは 1913 年にサマルカンドで最初に『サマルカンド』という新聞を創刊した。経済的な困難に直面して、第 44 号を出した後刊行が停止された。その代わりとして、週刊誌『アーイナ』を創刊し始めた。この雑誌は、トルキスタンと世界のムスリムの間で有名になった。雑誌『アーイナ』はおよそ 2 年刊行され、経済的な困難に直面し、刊行は停止された。この雑誌は合計 68 号刊行された[Hoji Muin 2005: 27]。

このように、ベフブーディーの『アーイナ』は 1913 年から刊行され始めた。この雑誌は鏡という雑誌名のとおりに、当時の社会・政治的な欠陥を鏡のように映し出してみせる雑誌となった。『アーイナ』は、アラビア文字で出版されていたが、使用されていた言語はテュルク語（現在のウズベク語に近い）とペルシア語であった。1914 年の春と夏、ベフブーディーはサマルカンドにいなかったため、ハージ・ムイーンが編集者になった。ハージ・ムイーンは、テュルク語学者であったため、テュルク語による論説や記事を増やした[Baldauf 2001: 44]。そのため、1914 年まで両言語で書かれた論説や記事が多く見られるが、1914 年後半になるとペルシア語の論説や記事が著しく減少した。ベフブーディーは、トルキスタンのムスリムに四つの言語が必要だと考えていた。これは『アーイナ』の表紙にも見ることができる。『アーイナ』の表紙には雑誌名がウズベク語、ペルシア語、アラビア語とロシア語で書かれている。この雑誌は、カフカス、クリミア、アフガニスタン、イラン、トルコとインドまで広がった[Pardaev 2008:13]。ベフブーディーは、経済的な困難に直面し、1915 年に『アーイナ』の発行を停止した。これについて、小松久男は次のように書いている。

1915年6月資金難のために発行を停止するまでに合計68号を出したが、これは革命前のトルキスタンの定期刊行物ではもっとも長寿の部類に属する[小松 1996: 8]。

この雑誌は最後に1915年6月15日に刊行された[Shimada 2002: 7]。

『アーイナ』の論説と記事を分析すると、様々な分野に関する論説を読むことができる。言語に関する論説も数多く掲載されている。たとえば、第1号にベフブーディーの「二つではなく四つの言語が必要なり Ikki emas to‘rt til lozim」、第11号と第12号にベフブーディーの「言語問題 Til masalasi」、第11号にハージ・ムイーンの「言語を統合することについて Til birlashtirmaq haqinda」、第30号にシーン・アイン (Sin Ayn) の「どの民族も自分の言語を誇りに思う Har millat o‘z tili ila fahr etar」などの論説が掲載されている。歴史と地理学に関しては、第10号にハージ・ムイーンの「民族の歴史について Milliy tarix haqinda」、第27号と第28号にベフブーディーの「歴史と地理学 Tarix va jug‘rofiya」と第38号にベフブーディーの「トルキスタンの歴史が必要である Turkiston tarixi kerak」などの論説が掲載されている。文化・日常的な論説も少なくない。たとえば、第6号と第7号にはベフブーディーの「我々の希望もしくは願望 A‘molimiz yoyinki murodimiz」、第29号にベフブーディーの「演劇とは何か? Tiyotr nadur?」、第39号にマフブーブハンの「新しく整った人生儀礼 Yangi tartiblik to‘y」などの論説も掲載されている。また、ベフブーディーはトルキスタンに発展をもたらすのは高い教育を受けた若者だと考え、教育改革に取り組んでいたため、教育に関する論説も数多く掲載されている。ハージ・ムイーンの「未来の感慨 Istiqbol qayg‘usi」(第2号)、ベフブーディーの「我々の希望もしくは願望 A‘molimiz yoyinki murodimiz」(第7号)、ヌーシルヴァー・ヤウシェフの「マクタブ Maktab」(第11号)、「教師を教育する方法 Muallimlar tayyarlamaq usuli」(第26号)などがその例としてあげられる。

また、トルキスタンのムスリムの欠陥や弱点を知るために、先進諸国の現状も知った方がよいと考えたベフブーディーは『アーイナ』において日本、トルコ、ロシア帝国、ドイツ、フランスなどに関する論説やニュースを載せていた。『アーイナ』には「世界の報知 Axbor-i Jahon」、「海外通信 Xorijiy xabarlar」、第一次世界大戦に関する「戦争の報知 Muhoraba xabarlari」などのニュース記事がみられる。また、第4号の「中国と日本におけるイスラームの普及 Xitoyda va Yaponiyada islomning intishori」、第7号の「ペテルブルグにおける犠牲祭 Peterburgda qurbon iydi」、第36号の「エジプトにおける学生の試験 Misrda talaba imtihoni」、第43号の「日本における学生の日常生活 Yaponiyada talaba maishati」などの論説からベフブーディーは世界の出来事にも無関心ではなかったことがわかる。

以上見てきたように、『アーイナ』は約 2 年間刊行され、幅広い内容で読者を集めた。この雑誌に、ハージ・ムイーン、サドリッディーン・アイニー、ヌーシルヴァーン・ヤウシェフなどのような代表的なジャディード知識人が自分の見解、論説、夢や目的などを寄稿した。『アーイナ』は、ジャディード運動を研究する上で欠かせない雑誌だと言える。

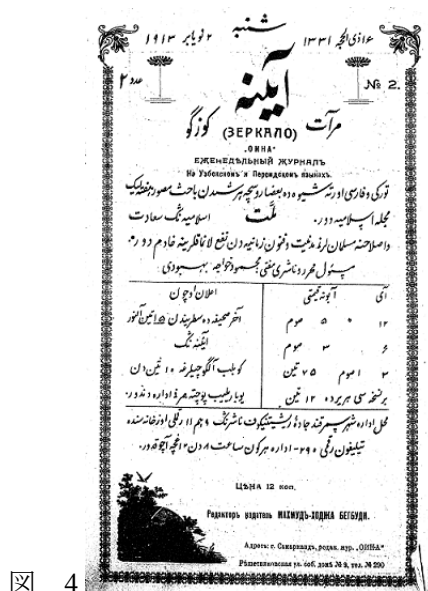


図 4. 『アーイナ』第 2 号 1913 年 11 月 02 日刊行 表紙

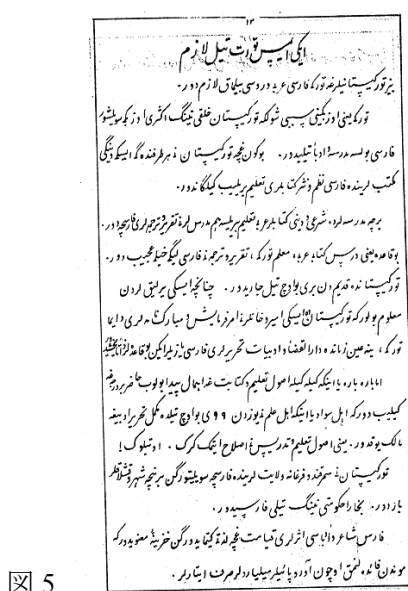


図 5. 『アーイナ』第 1 号 1913 年 08 月 20 日刊行 バフブーディー「二つではなく四つの言語が必要なり Ikki emas to'rt til lozim」 p.12

小結

本章では、トルキスタンにおけるジャディード運動の誕生、ムスリム知識人の試み、さらに、教育問題について検討した。また、バフブーディーの活動にも触れ、彼が刊行していた雑誌『アーイナ』についても検討した。

20 世紀初頭にトルキスタンの民衆の無学と無知を把握したムスリム知識人は、ガスプリンスキーの影響で教育改革運動、すなわち民衆啓蒙運動に積極的に取り組んだ。ジャディード知識人は、新方式学校の開校、教科書の出版、慈善団体の設立、雑誌や新聞の刊行と並んで演劇運動にも着手した。20 世紀初頭のタシケント、サマルカンド、ブハラ、フェルガナ地方には数 10 校以上の「新方式」の学校が開かれたが、その生徒は男子であった。ジャディード知識人の中にはハージ・ムイーンのような女子教育に注目した知識人もいたが、結局、女子のための新方式学校が開校されなかった。ハージ・ムイーンは、その理由を、「トルキスタンでは女性の義務は家庭の家事と子供のしつけである」と指摘し、民衆の無学を強く批判した。

ジャディード知識人を代表としてマフムードホジャ・ベフブーディーが最初の戯曲を書き、出版した。この戯曲はトルキスタンのさまざまな諸都市に上演され、民衆の人気を集めた。その影響でトルキスタンではさまざまな劇団が設立され始めた。もっとも先に開設され、もっとも長く活躍していた劇団は『トゥラン』劇団であり、その創設者はタシュケント出身のアウラーニーとムナツヴァル・カリである。やがてこの劇団は「イスラーム協議会」に変わっていった。

さて、なぜトルキスタンのムスリムを啓蒙し、教育しなければいけなかったのか。ジャディード知識人の代表者であるベフブーディーにはトルキスタンのムスリムを統合し、自治を実現する夢があった。自治の実現のためにも教育が必要不可欠だったのは明らかであった。彼はこの目的で雑誌『アーイナ』の第 9 号・10 号・11 号に「計画 Loyiha」を書き、「トルキスタン自治」を実現しようと努力した。ロシア革命直後の 1917 年 11 月、トルキスタン・ムスリム大会はトルキスタン自治を宣言したが、自治政府は創設のおよそ 3 ヶ月後ソビエト政権によって打倒された。

このように、ジャディードの改革運動はたえず圧力と妨害にさらされた。まず、ロシア当局の観点からすれば、ジャディードの活動は帝国の統合と安全を脅かす危険な「汎イスラーム主義」、「汎トルコ主義」にほかならず、「新方式学校」の開設や出版の認可をとりつけることは容易ではなかった。一方、保守的なウラマーたちは、教育改革の進展がこれまで教育を独占してきた彼らの地位を権威を脅かすことを恐れ、「新方式学校」をシャリーアからの逸脱と断じてこれに対抗した[小松久男 1999: 196]。

次の章では、2 人の代表的な知識人、ベフブーディーとムナツヴァル・カリの教育論について分析し、彼らの教育論の共通点と相違点について述べる。

第4章

ベフブーディーとムナツヴァル・カリの教育論

本章では、トルキスタンの代表的な知識人である、マフムードホジャ・ベフブーディーとムナツヴァル・カリの教育論を検討する。2人の知識人はどのような目的で教育を改革しようとしたのか、そしてどのような方法で活動したのかを明らかにする。それぞれの教育論を詳しく検討し、彼らの教育論に見られる共通点について述べる。

第1節 ベフブーディーの教育論

ベフブーディーの教育論を考察するには、まず、第一に彼の代表的な作品である『父殺し』について検討する必要がある。

上述したように、この作品を1911年に書いたが、検閲のためにおよそ2年間出版できなかったが、1812年のロシア・フランス戦争におけるボロディノの会戦でロシアが勝利した100周年を記念して、と副題をつけてティフリスの検閲官に送り、ようやく出版できるようになった。ティフリス検閲官の1913年3月23日の19940号の裁定により、1913年にサマルカンドで出版された[Rizaev 1997: 53]。これは同時期に開校され始めた「新方式」学校などで子弟を教育することを呼びかける作品であった[ヒクマトラエフ 2014: 381]。

この戯曲は1914年1月15日サマルカンドの新市街で初演された。ベフブーディーによると1914年1月~9月の間に『父殺し』は全部で15回演じられたが、そのうちベフブーディーの承諾を得て上演されたのは7回にすぎなかった。ベフブーディーは無断の上演という無責任な行為について遺憾に思ったことにふれている。なぜなら、演劇の目標は二つあり、その一つは、民衆の社会・文化的な意識を向上させ、教育の必要性を訴えることだったが、もう一つは、演劇からの収益で「新方式」学校などの教育事業、慈善団体、出版事業などを支えることであったからである。

『父殺し』は、息子に教育を与えるのは必要ではないと考える資産家（バイ²²）とその無学な息子の末路を描いた作品である。バイは金持ちになるのに教育は必要ではないと考え、息子に教育を与えず、その結果、無学な息子は父殺しという大罪を犯してしまうという筋書きの悲劇作品である。これは当時開校され始めた新方式学校などで子弟を教育することを呼びかける作品であった。ベフブーディーはこの作品で、ダムッラーと知識人の二役を通して教育の必要性を述べている。ダムッラーは改革派のイスラーム学者であり、知識人はロシア語を通して近代文化を学んだムスリムである。

²² バイーウズベク語では「金持ち」や「資産家」を意味する。

『父殺し』に見える教育の理念を考えるために、まずバイとダムッラーの会話の一部を引用してみよう。『父殺し』はバイとダムッラーの会話から始まる。次の場面は、ダムッラーがバイの家を訪ね、バイと話をしている。途中でバイの息子が部屋に入ってきて、遊ぶためにお金をもらい、出て行く。その後の会話である。

バイ： 話をしましょうか？

ダムッラー： ええ、息子さんも大きくなって、神が長生きさせんことを。新方式の学校で学んでいるのですか？それとも旧式の学校で？

バイ： 両方とも行っていない。

ダムッラー： 家で教育していらっしゃる？

バイ： いや、いや。わしは息子を教育しようとは考えておらんのだ。

ダムッラー： これは驚いた。なぜ教育しないのです。読み書きは義務で、勉強はこの世の尊敬、あの世の名誉ですよ。

バイ： わしの考えでは、この世の尊敬の理由は富だ。あの世は神の定めによる。例えば、人はムッラーよりも金持ちを尊敬するものだ。特に銀行が増えておるが、大金もちはその役員になり、みなも役員を尊敬している。さらに実業家すら役員の財産を評価する。そのうえ役員が好意を持たぬ人には、銀行はお金を貸さない。そうすれば関係が崩れて貧しくなっていくことくらいはご存知でしょうに。

ダムッラー： あなたの言葉は今の時代には当てはまりますが、会員や富豪への尊敬は民衆の目が開かれるまでですよ。実業家たちは彼らを尊敬していますが、ムッラーは全ての民衆が尊敬しているのです。つまりムッラーの学識を尊敬しているのです。

バイ： わしの富はムスリムだけでなく、ロシア人やドイツ人の間でも尊敬されておる。

ダムッラー： 尊敬は別にして、もし息子さんを教育すれば、彼は帳簿をつけることや、祈りやムスリムの務めを良く知り、あなたにも報いるでしょう。

バイ： 書記の仕事は簡単だ。このハイルッラー（バイの使用人）に、ひと月7ソムをやって、昼は書き物、夜は居間の仕事、しかも眠くなるまで仕事をして、本も読んでくれる。

ダムッラー： コーランやイスラームを知るために、若旦那を教育することは当然の義務ですぞ。

バイ： コーランを教えることが必要とは思わない。息子をムフティーやイマーム、ムアッジンにしようとは思わないからな。わしの財産はやつには十分だ。

ダムッラー： 宗教上、必要なことはどうです？

バイ： わし自身、5回の礼拝の必要な祈りを知っている。わしが自分で教えてやる。

ダムッラー： 読み書きについてはどうですか？ 実際読み書きのできない人は何もできませんよ。

バイ： あんたの考えはおかしい。わしは読み書きができないが、この街の大富豪で、何でも知っておる。

ダムッラー： あなたは以前、何とかして富豪になったのですが、しかし今は富豪になるために教育が必要です。御存知でしょうが、20、30年来あらゆる商業がアルメニア人、ユダヤ人などの外国人の手中にあったのは、われわれに学がないためなのです。学のない若旦那は、父上の財産を使い果たして、ついには破産に至るでしょう。だから若旦那を教育するよう提案しているのです。

バイ： ああ、ダムッラー。わしを説教するのかね。息子はわしのものだ。財産はわしのものだ。あんたには関係ない。あなたは教育を受けた人の一人だが、食べようにもパンもないじゃないか。それなのにわしに忠告する。ハイルッラー！ 客間の鍵をかけろ！ 眠くなった²³。

上記の会話から分かるように、ダムッラーの教育への呼びかけに対して、バイは教育は必要ではないと語る。ジャディード知識人は当時の社会問題、とりわけ教育の不足と欠陥を訴えるためにこのような作品を書き、それを上演したのである。ダムッラー役を通じてベフブーディーは改革のメッセージを伝えようとしている。

かつての資産家は読み書きができなくても、それを代行してくれる使用人がいた。しかしロシア統治が始まるとともに銀行、鉄道、裁判などの近代的な要素が導入されるようになった。資産家には無用と考えられていた教育も必要になってきた。こうした変化をジャディード知識人、とくにベフブーディーは理解し、『父殺し』を創作・上演したのである。

²³ ベフブーディー作『父殺し Padarkush』、坂井弘紀訳（未刊行、一部修正した）。

次に知識人とバイの会話をみてみよう。

バイ： （観客に）ダムッラーの話をあんたにしなければよかったよ。
よし、話をするなら、できるだけ早く喋って終われるようにしよう。眠くなった（あくびをする）。人は自分の子供を教育しろ、だろ。

知識人： 今は新しい、以前とは違った時代です。この時代に学問と技術のない民

族は、富や土地、財産を、日に日に手元から失い、道徳や権力までもなくし、さらに宗教までも弱くなるのです。だから、我々はムスリムを教育することが必要なのです。ですから、我が栄えある宗教はあらゆる有益な学問を学ぶことを、ゆりかごから墓場までの我々の義務としたのです。この教えはシャリーアの教えです。我々ムスリムには特に現在二種類のウラマーが必要なのです。一つは宗教の学者、もう一つは近代的な学者です。宗教の学者は、イマーム（指導者）、ハティーブ（説教師）、ムダッリス（マドラサの教授）、ムアッリム（教師）、カーディー（裁判官）、ムフティー（法学者）で、人々の宗教や倫理、精神の仕事を指導する。〔中略〕。ご理解できましたか、ご主人。

バイ： （頭をを起こして）はいはい、続けてください。聞いておるよ。

知識人： 近代的な学者になるためには、子供たちをまず、ムスリムとして読み書くができて、宗教の必要と自分の民族の言葉を教えてから、政府の公立学校に行かせなくてはなりません。つまり、ギムナジウムや町の学校の教育が終了したら、ペテルブルグやモスクワの大学に送って、医者、弁護士、技術者、裁判官になるための学問、つまり商学、農学、芸術、経済学、工学、教育学、その他の学問を修めさせるのです。祖国ロシア、国家と協同しなくてははいけません。そして公職に就くことが必要です。〔中略〕。（バイに向かって）私の言ったことが、もちろん分かったでしょうね。ご主人、ご主じーん。

バイ： （いねむりをして、首を起こす）うん、うん²⁴。

²⁴ ベフブーディー作『父殺し Padarkush』、坂井弘紀訳（未刊行、一部修正した）。

この会話でベフブーディーは、2種類の知識人が必要だと指摘している。その一つは宗教上の知識人、もう一つは、世俗的な知識人である。トルキスタンに宗教上の学者が必要であることは明らかであった。しかし、ベフブーディーが構想していた「トルキスタン自治政府」の実現には、世俗的な知識を備え、ロシア語もできる知識人が必要不可欠であった。もっとも、ベフブーディーは、別の論説でムスリムとして読み書きができないといけないと指摘し、ロシア語よりも宗教と自分の民族の言葉を教育するように呼びかけている。言語の習得についてベフブーディーは『アーイナ』誌上で「二つではなく四つの言語が必要なり」という論説を刊行しているが、これについては後に説明する。ベフブーディーは、さらにギムナジウムや、ロシアの公立学校で勉強することを呼びかけていることから、ベフブーディーはムスリム生徒が新方式学校だけではなく、広くロシアの学校で世俗的な教育を受けることが必要と考えていたことがわかる。

『父殺し』の最後に知識人の言葉がある。その言葉は『父殺し』に込めたベフブーディーの考えを明瞭に表現しているので、以下にその言葉を引用することにしよう。

知識人： （入る。犯人に向かい残念がる。観客に向かい） 学問や教育がない子供の結果がこれです。もし彼らの父が教育していれば、このような罪や父殺しを彼らは起こさず、酒をこのように飲まず、血を不当に流すこともなく、一生シベリアで繋がれ、最後の審判で地獄に落ちることにもならなかったでしょう。もし酒を飲まなかったら、この世でもあの世でも永遠の苦しみも苦労もなかったでしょう。ああ、本当にバイを殺し、この若者に永遠の苦しみを与えたのは、無学です。私たちの生活を破滅させ、バイの子供を苦しませ、国を追われたのは無学と無知です。国を追われ、流浪すること、貧しさと困窮の奴隷や恥辱はみな、無学と無知の結果です。発展した民族は、学問によって発展しました。隷属し、惨めな人があるのは無学のためです。私たちが無教育な民衆と我々の子供を教育しなければ、不幸な事が、私たちの間でいつまでも終わりません。これをなくすためには、勉強すること、させること以外に方法はないのです。神が他の人々に導きを、あなた方に忍耐を与えますように²⁵。

²⁵ ベフブーディー作『父殺し Padarkush』、坂井弘紀訳（未刊行、一部修正した）。

この語りからわかるように、同時代のトルキスタンの大きな問題の一つは民衆の無知と無学だった。そのために社会発展は遅れるようになった。また、ジャディード運動と新方式学校に反対していた保守派とジャディードとの対立の背景にも無知と無学があり、ロシアに支配されることになったのも無教育と無知の結果と考えられていたことがわかる。

上記の知識人とダムッラーの話を比較してみると、両者とも子弟を教育するように呼びかけている内容である。二人とも社会が発展しない理由は無学と無知だと指摘している。ダムッラーは「学のない若旦那は、父上の財産を使い果たして、ついには破産に至るでしょう」と指摘しているが、知識人は「国を追われ、流浪すること、貧しさと困窮の奴隷や恥はみな、無学と無知の結果です」と述べている。ベフブーディーは二人の知識人の役を通して自分の考えを民衆に伝えようとした。ベフブーディーは若い新世代の知識人に期待をかけており、民衆に自由と発展をもたらすのは教育を受けた青年だと考えていることがわかる。

『父殺し』は、すぐに有名になり、サマルカンドだけではなく、トルキスタンの様々な都市で上演された。しかし、ムスリム社会の中にはジャディード運動や演劇に反対する保守派もいた。ムスリム保守派は『父殺し』を上演した役者やベフブーディーを「父殺したち」と呼び始めた。その理由として保守派には旧方式学校（マクタブ）の教師が多かったことがあげられる。

1914年1月3日にサマルカンドのウルグベク・マドラサで行われた金曜礼拝の後にムアッジン²⁶は、ジャディードとロシア語の勉強を呼びかける者はムスリムではないこと、また新方式学校に子弟を送る者は異教徒になり、自動的に妻と離婚したことになることを宣告した[Yo‘ldoshev 2001: 153]。このような障害にもかかわらず、ベフブーディーは活動を続けた。

ベフブーディーは、1913年8月20日付の『アーイナ』に「二つではなく四つの言語が必要なり Ikki emas to‘rt til lozim」という論説を書いている。この論説は、ベフブーディーの「我々トルキスタン人はテュルク語（turki²⁷）、ペルシア語、アラビア語とロシア語を知らねばならない」という一文から始まる。この論説でベフブーディーは四つの言語それぞれの必要性について以下のように述べている。

まず、テュルク語に関しては、「テュルク語、すなわちウズベク語を学ぶべき理由とは、トルキスタン人の大多数がウズベク語で話すからである」と説明している[Behbudiy 1913: 12]。確かに、ロシア領トルキスタンの地域にはタジク人、カザフ人、キルギズ人、

²⁶ Muazzin – モスクで毎回礼拝の前にアザーンを唱えて、信徒を礼拝に呼びかける人。

²⁷ 当時トルキスタンで民衆の大多数が話していた言語であり、現代のウズベク語に非常に近い。

トルクメン人も数多く住んでいたが、人口の大多数はウズベク人であり、テュルク語はもっとも多くの人々に使用されていた。また、「すべてのマドラサでは法学と神学の書物はアラビア語で教えられているとしても、ムダッリスの注釈書はペルシア語である。この規則、つまり教科書はアラビア語、講義はテュルク語、解説と翻訳はペルシア語であることはとても素晴らしいことである」とも述べている[Behbudiy 1913: 12]。

旧方式学校のマクタブは、初等学校の役割を果たし、大都市だけではなく、トルキスタン全土に存在していた。当時の共通言語はテュルク語であったため、授業はすべての生徒に分かりやすくなるためにテュルク語で行われていたと考えられる。

アラビア語は宗教、すなわちイスラームを正しく理解するために必要であると述べている。

ベフブーディーは、ペルシア語の必要性については、次のように述べている。

ペルシア語はマドラサと文学の言語である。現在に至るまでトルキスタン全土の旧方式および新方式の学校ではペルシア語の韻文や散文の本を使って教育が行われてきた[Behbudiy 1913: 12]。

さらに、「また、同時に裁判の場と文学ではペルシア語で書かれたようだ」も述べている。しかし、ベフブーディーはこう指摘している。

いまや知識人もしくは学者の 100 人のうち 99 人までもがこの三つの言語を完璧に操ることができないというレベルに達した[Behbudiy 1913: 13]。

この背景には、マクタブではアラビア語もペルシア語も完全には教えられていなかったことや詩集も暗記するばかりであったことがある。生徒はナヴァイー、フズーリー、ベーディルらの詩集の意味を理解することなく、ひたすら暗記に努めていた。なかにはその意味を理解する上級クラスの生徒もいたが、それは非常に少なかったようである[Bendrikov 1960: 39]。三つの言語の読み書きを完璧に操る者は少なかったと考えられる。

そこで、ベフブーディーは、「教育方法を改革しなければならない。改革しようではないか」と述べ、教育方法を改革するように呼びかけている。ベフブーディーは、

我々にとって幸いなことにテュルク語とペルシア語は教わらなくても知っている。テュルク語を母語とする者は皆ペルシア語を知る必要があり、ペルシア語を母語とする者は皆テュルク語を知る必要がある[Behbudiy 1913: 13]。

と述べている。この発言を解釈すると、ベフブーディーは、新方式学校ではテュルク語を母語とする者にはペルシア語、ペルシア語を母語とする者にはテュルク語を教えなければいけないと考えていたことがわかる。また、「テュルク語とペルシア語は教わらなくても知っている」と述べているが、これは話し言葉をさしているのだろう。古くからサマルカンドやブハラにはペルシア語もテュルク語も話せるタジク人が数多く暮らしていた。タジク人とウズベク人はお互いにテュルク語、すなわちウズベク語で会話していたが、タジク人の中ではペルシア語を話していた。しかし、ペルシア語とテュルク語で話していても、人々の多くは読み書きができなかった。したがって、ベフブーディーが「テュルク語を母語とする者は皆ペルシア語を知る必要があり、ペルシア語を母語とする者は皆テュルク語を知る必要がある」と指摘するとき、彼は両言語の読み書きのことを言っていると考えられる。

ロシア語の必要性について、ベフブーディーは次のように書いている。

ロシア語を学ぶべき理由とは、我々はロシアの臣民、すなわち国民だからである。我々はロシア人と同じ市民権と財産権を持っている。しかし我々には能力がないことが残念である。銀行や商館、裁判所、公証所、鉄道など、つまり現代が生み出したすべての新しいものを必要とするならば、まず、第一にロシア語を知ることが必要である[Behbudiy 1913: 13]。

ここでベフブーディーは当時のトルキスタンの状況を正しく理解し、評価していると思われる。なぜなら、トルキスタンは、ロシアの植民地であり、トルキスタンのムスリムはロシアの臣民であった。「現代が生み出したすべての新しいもの」は、確かにロシア人によってトルキスタンに導入され、それらを使うためにロシア語が必要だったのは明らかなことである。ロシア語が当時の必要不可欠な言語だったことは疑いない。

さらに、ロシア人について、ベフブーディーは次のように述べている。「我々の考えではロシア人は今日来て、明日出て行くというようなことはない。我々のこの間違った考えは、地理、歴史と現代を知らないことによる」と[Behbudiy 1913: 14]。

ここでベフブーディーは、ロシア人はトルキスタンから出て行くことはないと言っている。このことからベフブーディーはロシアからの独立を考えてはいなかったと言える。実際にベフブーディーはトルキスタン自治政府の実現を構想しており、その方面で努力を重ねることになる。

また、ベフブーディーは、

我々に必要なものは何か、自分たちの利益のためにロシア語を知ろう、公立の学校で勉強しよう。国の役職に就こう。祖国と自分の宗教のために仕えよう。ムスリムとして進歩しようではないか。現代の商業、産業と国の業務、さらにイスラーム教と祖国への奉仕はロシアの学問拔きに実現できない。例えば、現在のドゥーマ「国会」で自分たちの宗教と共同体の利益のために発言することが我々にも可能になる[Behbudiy 1913: 14]。

ここでベフブーディーは、ロシア語を学び、国の公務に就き、祖国に奉仕するように呼びかけている。また、ロシアの学問拔きに祖国への奉仕は実現できないと述べていることから、ロシア語だけではなく、ロシアの学問も必要だと主張していることがわかる。ロシアの学問というのは、ロシア人の学校で教えられていた法学、地理、歴史などと考えられる。ベフブーディーによれば、

祖国と民族のために発言するにはロシアの学校で 10 年ほど勉強しなければならぬ。現代と法律を知らなければならないのである[Behbudiy 1913: 14]。

この指摘では、ロシアの学校で勉強するように呼びかけており、ロシアの法律習得の必要性についても述べている。伝統的なマクタブやマドラサでは法律、歴史、地理などは教えられていなかった。当時のトルキスタン人はロシア化を恐れ、また、ロシアに対する拒否感も強く、トルキスタン人の多くは子供をロシア語現地語学校に行かせなかった。そこで、ベフブーディーは、新方式学校を開き、ムスリム子弟の教育を始めたのである。

上記の戯曲『父殺し』と『アーイナ』の論説からもわかるように、ベフブーディーにとって教育の普及が第一の課題であり、トルキスタンにムスリムの自治を実現するためにもテュルク語だけではなくロシア語もできる知識人が必要であった。

なお、ベフブーディーはこの論説で自説を自由に述べていると考えられるが、独立後（1991 年以降）のウズベキスタンで刊行されている彼の著作集ではロシアとロシア語に関する部分が削除されている場合がある。例えば、『マフムードホジャ・ベフブーディー』[Qosimov 2009] に収められた「二つではなく四つの言語が必要なり」では以下の部分が削除されている。

ロシア語を学ぶべき理由とは、我々はロシアの臣民、すなわち国民だからである。ロシア人と同じ市民権と財産権を持っている。しかし我々には能力がないことが残念である。銀行や商館、裁判所、公証所、鉄道など、つまり現

代が生み出した全ての新しいものを必要とするならば、まず第一にロシア語を知ることが必要である。50 年も前から我々はロシアに属している。しかしこの間ロシア人とムスリムはまだお互いによく理解していないのである。我々の考えではロシア人は今日来て、明日出て行くというようなことはない。我々のこの間違った考えは、地理、歴史と現代を知らないことによる。

これはなぜだろうか。独立後のウズベキスタンではベフブーディーは民族独立のために尽力した知識人と教えられている。この観点からすると、独立よりも、ロシアの一部として発展すること、つまり「トルキスタン自治の実現」をめざしていたベフブーディーの発言は好ましくないと判断された可能性が高い。しかし、ベフブーディーの真意を理解するには彼の著作のオリジナルを検討しなければならない。

第2節 ムナツヴァル・カリの教育論

ムナツヴァル・カリ・アブドラシドハーンは 1878 年にタシュケントに生まれた。ジャディード運動の創設者の一人であり、教育改革とともに出版活動、演劇活動にも取り組んだ詩人でもある。彼はタシュケント市、シャイホントフル区のダルハン地区に知識人の家族で生まれた。彼の父親アブドラシドハーン (Abdurashidxon) はムダッリス、母親ハーシャット・アートウン (Xosiyat otin) は、アートウンビビ学校 (女子学校) の教師であった。彼は家族で 3 番目の子供であり、2 人の兄がいた。兄アーザムハーン (A'zamxon) とムスリムハーン (Muslimxon) らは教師であった。ムナツヴァル・カリは当時の有名な教師ウスマンハーンの下でコーランを習った[Munavvar qori 2003: 10]。1885-1890 年にブハラのみール・アラブ Miriarab マドラサに学んだが、経済的な困難に陥ったため、学業半ばでタシュケントに戻らねばならなかった[Ahmad 1992: 106]。タシュケントに戻ってからイマーム、教師として働き始めた。

その後、1901 年にタシュケントで最初の「発声方式学校」を開設した[Munavvar qori 2003: 16]。1905 年にはトルキスタン人子弟のための「新方式学校」を開設している[小松久男 1999: 194]。しかし、ウズベク語の教科書がなかったため、自ら教科書を書き始めた。1907 年に『最初の書き手 Adibi avval』、同年末に「第二の書き手 Adibus-soniy」を書いて出版した。彼は教科書を出版するだけでなく、新方式学校のために『指導書 dastur』も作成した。1910-1911 年に多くの新方式学校ではムナツヴァル・カリの指導書が使われていた[Munavvar qori 2003: 18]。

彼は教育の改革を目指し、教科書だけではなく雑誌や新聞も刊行している。彼は 1906 年に創刊された『進歩 Taraqqiy』の創設者の一人である。それが資金難で停刊となると、

彼は同年、新聞『太陽 Xurshid』を創刊した[Qosimov 2002: 237]。1917年のロシア2月革命後には雑誌『救済 Najot』の編集長ともなっている。

ムナツヴァル・カリは当時の知識人とともに1909年に『慈善団体 Jamiyati xayriya』を創設した。1913年に活動を始めた『トゥラン』劇団の設立にも大きな役割を果たした。これについてシラジッディン・アフマドは「ムナツヴァル・カリ Munavvar Qori」というエッセーの中で「ムナツヴァル・カリは1913年に活動を始めたトゥラン劇団の主催者の一人である。彼はアウラーニー、イルハムジャン・イナガモフ、コムルベク・ナルベコフ、トラガン・ホジャムヤロフ（タヴァッラー）、ムハンマド・パッシャホジャエフ、ウバイドゥッラ・ホジャエフ、タシュポラト・ナルブタベコフらの友人とともに劇団のすべての活動に参加した。1913年6-7月にトゥラン劇団は非公式の演劇を上演した。ムナツヴァル・カリは劇団の組織的な仕事や宣伝に積極的に参加した」と書いている[Ahmad 1992: 110]。このようにムナツヴァル・カリの青年を教育するために様々な方法で努力した。彼は1917年、2月革命後にタシュケント市のドゥーマの議員に選出されたこともある[Munavvar qori 2003: 20]。こうしてムナツヴァル・カリは政治家としても活動し、様々な結社を設立した。たとえば、『統一と進歩 Ittihodi taraqqiy』、『民族統一 Milliy ittihad』、『民族独立 Milliy istiqlol』などの結社である。[Irgasheva 1997: 32]。このように民族主義的な活動のためにムナツヴァル・カリは、ソヴィエト政権によって1921年3月30日から同年12月1日まで逮捕・拘禁された。その後、彼は『教育普及 Nashri maorif』という団体を作っている。この団体の目的は、教育を改革することであった。しかし、この団体は1924年に活動を終えた[Munavvar qori 2003: 54]。1929年11月6日、再び当局に逮捕され、1931年4月23日にモスクワの刑務所で死亡した[Munavvar qori 2003: 57]。

すでに述べたように、ムナツヴァル・カリの主な活動は教育を改革することであった。教育を通じてトルキスタンの若者を啓蒙しようとした。ムナツヴァル・カリの目的、教育論を考察するには、彼の作成した教科書『第二の書き手』や論説を分析する必要がある。

まず、彼が『第二の書き手』に書いた知識の定義を見てみよう。

知識とは、知らないものを知っている人に聞きながら勉強することである。人間は知識のないまま生まれてくる。話すこと、書くこと、良い物と悪い物、白と黒の違いを区別するようなもっとも必要不可欠なことなども知らないまま生まれる。そして、少しずつ習いながらいろいろ知るようになる。我々の両親と先生が教育してくれなかったならば、今我々は何も知らなかっただろう。だから、人々にとってもっとも必要なものは、知らないことを知っている人に聞きながら、勉強し

ながら、知識という大事で有益なものを手に入れるために努力することである。
知識は、人々の知性を開き、能力を高め、知らないことを知らせる。人々を幸せにし、尊敬をもたらす。あの世の幸福ももたらすのである[Munavvar qori 2003: 73]。

ムナツヴァル・カリは、ここで知識は人々にとって必要不可欠なものであることを主張し、生徒に勉強するように呼びかけている。なぜなら、当時の民衆は知識は不要だと考え、勉強しなかったからである。こうした状況を見ていたムナツヴァル・カリは、『第二の書き手』を知識の定義から始め、生徒に知識の必要を教えようとしたのである。彼は、知識について詩も書いている。彼の考えを理解するために、この詩も引用することにした。

世界でもっとも良い才能は知識であり、
無知な人より口のきけない人と耳の聞こえない人の方がまさる。
知識と仲良くする人は、
いつも富と尊敬を手に入れる。
無知な人はいつも虐げられる、
他の人に悪い目で見られるのである[Munavvar qori 2003: 73-74]。

この詩を分析してみても、知識の大事さを理解できる。たとえば、無知な人よりも口のきけない人と耳の聞こえない人の方が良いと主張している。この発言から、無知な人は何にも知らないため、自分の意見を持たないという意味が読み取れる。また、「知識と仲良くする人は富と尊敬を手に入れる」と述べているが、ここでムナツヴァル・カリの考えがわかる。彼は青少年を教育し、やがて彼らが政府の仕事に就いて、トルキスタンのために働いてくれることを望んでいたのである。ロシアがトルキスタンを征服して以来、行政職に就いていたのはほとんどがロシア人であった。そこで、ムナツヴァル・カリはトルキスタンのムスリムを教育し、政府の仕事に就けるようにしなければいけないと考えたのである。タシュケントで最初に新方式学校を開校したのもそのためであったと考えられる。彼は、同じく『第二の書き手』の中で学校について次のように書いている。

子どもは生まれてから、6-7 日経ってからゆりかごに入れられる。親は夜も昼も努力し、母乳を与えて大きくするのである。子どもは 6-7 歳になったら、学校に送る。学校では教師が全力を尽くして、児童を教育するのである。そうだとすれば、学校は子どもにとって 2 つ目のゆりかごである。最初のゆりかごでは、母親が母乳

を与えて子どもを育てる。2 つ目のゆりかごでは、教師は知識とマナーを教え、児童の知恵と考え方を育てる。子どもにとって健康であることは、とても大事なことである。しかし、知恵と考え方が健全であることはもっと大事である。なぜなら、無学で無知な人は自分のためにも他の人のためにも何の利益をもたらさないからである。だから、子どもにとっては最初のゆりかごより 2 つ目のゆりかごである学校の方が大切であり、利益も多い。児童は、最初のゆりかごで母乳と食べ物を与えて育てた両親を尊敬するが、2 つ目のゆりかご（学校）では知識とマナーを教え、教育した教師も尊敬すべきである[Munavvar qori 2003: 80]。

ここでも、教育と学校の必要性を読者に伝えようとしているのがわかる。ムナツヴァル・カリは、学校をゆりかごに例えていることから、彼にとって学校はいかに大事なところだったのを理解できる。ここで、彼は学校の必要性だけではなく、教師を両親と同様に尊敬しなければいけないと主張している。また、この教科書の「人間と他の動物の違い」という節でも、興味深い話をしている。

人は人間と呼ばれる。人間も動物の一種類である。なぜなら、動物がするような寝る、食べる、飲むという動作を人間もするからである。人間が持っている足、手、目、耳、口などのようなものは動物も持っている。この面では人間と動物の間に違いは少ないのである。人間と他の動物との違いは、読むこと、書くこと、話すこと、頭を使って仕事をするにある。[中略]。本当の人間になるためには、読み書きをしっかりと勉強しなければいけない[Munavvar qori 2003: 92]。

ここでも、読み書きと知識の必要性を強く主張しているのがわかる。ここで、勉強しない人を動物に例えていることから、ムナツヴァル・カリにとって、無学で無知な人は動物と変わらないことになる。このように『第二の書き手』では、教育と学問の必要性について繰り返し書いている。また、この教科書にはしつけに関する節も多くみられる。たとえば、「両親」という節では次のように書いている。

子供にとってもっとも親しい友達と優しい人は彼らの両親である。母親は 9 ヶ月間苦勞しながら生むのである。子どもは生まれたときに泣く以外のことはできない。母親は子供を時には持ち上げ、時には寝かせ、時には立たせ、時には座らせながら育てるのである。子供が泣けば落ち着かせ、お腹が空けば母乳を与える。[中略]。父親は夜も昼も働き、稼いだ金を子供の料理、パン、衣服などに使う。[中略]。子供にこのような優しさを両親以外の人は与えることができない。だから

子供は両親と本当の友達になり、命じたことに従い、禁止したことはするべきではないのである[Munavvar qori 2003: 82]。

ここで、ムナツヴァル・カリは両親を大事にし、尊敬すべきだと主張している。この教科書で彼は、両親への尊敬だけではなく、「児童のしつけ」、「嘘」、「兄弟の尊敬」、「動物」、「世俗的な教育」、「地理学」、「有名な湖、山」などについても書いている。この教科書は、多くの新方式学校で一年生の教科書として使われていた。

新方式学校のために出版された教科書の中でムナツヴァル・カリの『最初の書き手』と『第二の書き手』は、もっとも完璧だったといえる。彼は『最初の書き手』において文字の書き方、文字の発音などを例の単語を使って説明している。文字を説明してから、日常生活でよく使われる物を細かく説明している。彼は『最初の書き手』の最後の節を「教育の手順 *tartibi ta'lim*」と名づけ、ここに学校の教育期間、教えられる科目、教授法などについて細かく説明している。彼によると、新方式学校の教育機関は 4 年間であり、この 4 年間で、文字の読み書き、信仰、お祈りの仕方、会話、コーランの読み方、地理学、道徳、イスラームの歴史、算数などが教えられなければならない[Irgasheva 1997: 82]。このように、ムナツヴァル・カリは教科書を当時の社会的な状況を把握したうえで、あるべき教育の姿をこの教科書で示したと言える。教科書ではイスラームの信仰や作法に関する教えも多く見られる。この方法は、イスラームが根強く残っているトルキスタンのムスリム児童を新方式学校に呼びかける上で最も良い方法の一つだったとも言える。

先に述べたように、ムナツヴァル・カリは新聞も刊行し、数多くの記事や論説を書いている。たとえば、1906 年 6 月 14 日に新聞『進歩』に「我々の無知は、まったくの無知なり *Bizni jaholat – jahli murakkab*」という論説を書いている。この論説では、旧来のマクタブの弱点を強く批判している。特に使用されている教科書を批判して、次のように述べている。

マクタブの教師の大多数は教授法を全く知らない人々であり、また、読み書きも十分に知らないため、[中略] 生徒に世俗的にも宗教的にも利益のないフズリー、ナヴァイー、ホージャ・ハーフィーズ、ベーディルのような難しい詩集を 4-5 年もかけて教えるのである。[中略]。ある人によると、上記の詩集を勉強しないと、児童は読み書きができないらしい。これは証拠のない話である。もし、これが本当の話だとすれば、トルキスタン以外の地域の児童は皆読み書きができなかっただろう。実際のところ、トルキスタン以外の地域では読み書きのできない人は 100 人のうち 10 人とすれば、トルキスタンでは 100 人のうち 90 人である。ここからわかるように、読み書きができるために上記の詩集は必要ではない。逆に、この詩

集は難しすぎるために児童は読み書きができなくなるのである[Munavvar qori 2003: 143-145]。

この論説では、ムナツヴァル・カリは寺子屋式のマクタブの教科書を強く批判している。なぜなら、他の知識人のように彼もマクタブは時代の要請に対応できなくなったのを理解していたからである。第 2 章で述べたように、教科書の不足のため、また、マクタブの教師はフズーリー、ナヴァイー、ホージャ・ハーフィーズ、ベーディルなどを暗記しながら教育を受けたために、他の教科書を使うことは想像もできなかったのだろう。ジャディード知識人は様々な新聞や雑誌を読んだり、先進諸国に行ったりして、時代の要請に対応できる教育制度を理解していたのである。続いてこの論説では、ムナツヴァル・カリは教師の無学、悪行を批判し、次のように述べている。

マクタブの教師は手に長い棒を持って、本を読ませる。[生徒は本を読んでいるときに音読のリズムを取るために頭を前後に動かさなければいけなかった]。頭が動いていない生徒をその棒で殴っていた。生徒は声を出して読んでいるかどうかは大事ではなく、頭を動かしていれば十分だった。[中略]。このような無学な教師に教育を受けた生徒には何も求めることができない。生徒は悪い道德しか勉強しないのである。[中略]。これは無学な教師と秩序のないマクタブのせいである。もし、我々の学校も他の民族の学校のように制度化されるのであれば、生徒はもっと教育を受けることができただろう[Munavvar qori 2003: 145]。

ここからわかるように、ムナツヴァル・カリは、マクタブの教師も時代の要請に対応できていないと指摘している。この発言から、ムナツヴァル・カリの本当の目的が見えてくる。彼はマクタブでは制度が整っていないことを不満に思っていたがゆえに、自分で新方式学校のために指導書を作ったのである。数多くの新方式学校では彼の指導書が使用されていた。

さらに、ムナツヴァル・カリには、現地のムスリム生徒を先進諸国に教育のために送り、民族の将来のために人材を育てる夢もあった。その目的で、タシュケントの資産家やアクサカルを集め会議も行っていた。ある会議で彼は、「ウズベク人の優秀な若者をドイツに送って教育させなければいけない。若者がドイツに行って、勉強してくるならば、民族のために奉仕するだろう」と述べている。また、この話を続けて「若者がドイツに行くのはあなたのような資産家の支援ではじめて可能になる」と述べると、何人かの資産家はムナツヴァル・カリに資金を渡したという[Irgasheva 1997: 47]。

上記に見てきたように、ムナツヴァル・カリの目的は民族の将来のために児童を教育することであった。そのために、新方式学校を開校し、このような学校のために様々な教科書も出版した。彼の教科書や論説の多くの内容は、教育への呼びかけ、子供のしつけであった。また、ムナツヴァル・カリは、ムスリム青年を先進諸国に送って教育しようとしたのである。

小結

教育はどの社会の発展においても必要不可欠であり、それをベフブーディーはいち早く理解していた。民衆に自由と発展を与えるのも教育だと考えていたベフブーディーは、教育改革に力を入れた。先に述べたように、保守派とロシア当局といった二つの障壁にもかかわらず、教育改革運動を続け、トルキスタン自治の実現のために人生を捧げた。彼は、当時の社会問題、とりわけ教育の不足と欠陥を訴えるためにさまざまな作品を書き、それを上演したのである。自分の著作や戯曲を通じてベフブーディーは改革のメッセージを伝えようとした。ベフブーディーは、トルキスタン自治の実現には、世俗的な知識をそなえ、ロシア語もできる知識人が必要不可欠と考えていた。また、ベフブーディーは、ムスリムとして読み書きができなければならないと指摘し、宗教と自分の民族の言葉を読み書きできるように呼びかけている。ベフブーディーは、さらにギムナジウムや、ロシアの公立学校で勉強することも主張した。ベフブーディーにとって、トルキスタン自治の実現は極めて重要なことであり、そのためにも、ムスリム青年を教育することは大切なことであった。彼は若い新世代の知識人に期待をかけており、民衆に自由と発展をもたらすのは教育を受けた青年であると考えていた。

その一方で、ムナツヴァル・カリも旧来のマクタブは時代の要請に対応できなくなったことを理解していた。そのために、新方式学校を開校し、その学校のために教科書を出版した。ムナツヴァル・カリにとって民族の発展は大事なことであり、それには児童の教育が大切だと考えていた。ベフブーディーの教科書や論説では勉強するための呼びかけが、ムナツヴァル・カリの教科書では児童のしつけに関する論説が数多く見られる。また、ムナツヴァル・カリもベフブーディーと同様に、若者を先進諸国に送り、教育しなければいけないと考え、その方面で努力した。ベフブーディーとムナツヴァル・カリの教育論を比較すると共通点が多いことがわかる。2人の教育論を比較してみると、2人ともムスリムの子供を教育する方法を考え、その方面で努力した。ベフブーディーにトルキスタン自治を実現するという夢があったとすれば、ムナツヴァル・カリには民族の発展のために優秀なムスリム若者を教育するという夢があった。2人の教育論をまてみると、2人とも初等教育をはじめ、高等教育に到るまでの教育課程を考えていたこと

がわかる。また、2 人とも青年を外国に留学に送ることも想定していた。彼らの教育論を見てみると、ジャディード知識人の目的はいつそう明らかになってくる。ジャディード知識人はトルキスタンの青年を教育し、ムスリムの啓蒙と発展を目指していたと言える。

第5章

教育改革と社会問題をめぐる議論 ―人生儀礼―

今まで、ジャディード運動やジャディード戯曲について様々な研究が行われているが、ジャディード知識人が取り組んだ人生儀礼の問題に関する研究はまだ十分になされていない。そこで本章では、ジャディード戯曲や知識人の論説を手がかりに、20世紀初頭のトルキスタンにおいて大きな社会問題とされていた「人生儀礼」と教育改革への影響について考察したい。具体的には結婚式 (to'y)、葬式 (aza)、割礼 (xatna) を取り上げ、当時トルキスタンで活動していた代表的な知識人が「人生儀礼」についてどのように考えていたのかを考察したい。

まず、当時の結婚式、葬式、割礼の実態を検討する。その際、同時代の雑誌や新聞に掲載されていた知識人の論説を分析する。具体的には次の三点を中心に分析する：①ハージ・ムイーンの戯曲『割礼 To'y』(1914)、②アブドゥッラ・カーディリーの戯曲『不幸な花婿 Baxtsiz kuyov』(1915)、③雑誌『アーイナ』に掲載されたマフムードホジャ・ベフブーディーの論説「我々の希望もしくは願望 A'molimiz yoinki murodimiz」(1913)。上記の戯曲や論説を分析し、「人生儀礼」の問題点とその解決策について検討する。そして最後に、「人生儀礼」はなぜ社会問題としてとらえられたのかを述べ、「人生儀礼」に関する知識人の見解をまとめることにしたい。

第1節 20世紀初頭のトルキスタンにおける人生儀礼について

トルキスタンでは古くから人生儀礼を盛大にあげるという習慣が存在していた。ベフブーディーは、雑誌『アーイナ』に掲載された「我々の希望もしくは願望」という記事に「ほとんどの民衆の希望は働いてお金を稼ぐことであり、息子や娘の結婚式をあげることである。それはどんな結婚式だろうか？それは自分と同じ程度の人々の結婚式より立派な結婚式である」と書いているように、人々は皆、立派な結婚式をあげるために昼も夜も働いていた。昔から、子供がいる家族は、結婚式を盛大にあげなければ、親戚や近所の人々の間で尊敬を失うことになっていた。そのため、一生苦勞し、稼いだお金のすべてを人生儀礼に使っていた。それでは、人生儀礼、つまり「割礼、結婚式、葬式」がはらんでいた問題を見てみよう。

ロシア革命から間もない1919年3月22日に新聞『労働者の声 Mehnatkashlar tovushi』にハージ・ムイーンの「人生儀礼について To'y va aza marosimi haqinda」という論説が掲載された。ここでハージ・ムイーンは当時の結婚式、割礼、葬式について詳しく説明し

ている[Hoji Muin 2005: 89-93]。この論説で、ハージ・ムイーンは人生儀礼を盛大にあげることを批判し、次のように述べている。

我々トルキスタンの民衆は無学であるため、様々な儀礼のせいで困難な状況に陥り、精神・経済的に大きな損害を受けている民族である。我々を巻き込んでいる慣習のなかで最も有害なのは割礼と結婚式、葬式である[Hoji Muin 2005: 89]。

ここでハージ・ムイーンは、人生儀礼のありさまを強く批判し、最も有害な慣習だと主張している。同じことは、すでに革命前からベフブーディーらも主張していた。当時は貧しい職人であっても人々に尊敬されるために、借金してでも盛大な人生儀礼をあげていたのである。これについてハージ・ムイーンは次のように述べている。

我々の民衆は「財産と命を失っても、尊敬を失ってはならない」と考え、割礼、結婚式、もしくは葬式を盛大に行うために、手元にあるすべての物を大なしにし、借金もする。借金を返せないと、自分の園庭や家を売って、借金を返すのである。このようにして、一方で、財産をなくし、路頭に迷う。他方で、尊敬も失い、あの世に行ってしまう[Hoji Muin 2005: 89-90]。

このように、当時の人々は将来の生活を考えずに、借金までして盛大な人生儀礼をあげていたのである。こうした状況をジャディード知識人は鋭く批判する。彼らは、民衆に幸せをもたらすには、人生儀礼のあげ方を改革しなければならないと考えていた。ハージ・ムイーンはこの論説で、割礼、結婚式、葬式はどのようなもので、どのように改革するべきかについて検討している。これをもとに、上記の人生儀礼はどのようなものだったのかを見てみよう。

割礼

割礼はイスラーム教のスナット²⁸ (sunnat) の一つである。ふつう男子が生まれてから9歳になるまでの間に行われる。11-12歳の時に行う人もいるが、非常に少ない。トルキスタンではこの儀礼は1日から5~6日ほどの時間をかけて行われる[Hoji Muin 2005: 90]。割礼を受ける男児のために新しい敷布団や掛け布団、たくさんの服などが用意される。家族によっては子馬を買って与える親もいた。割礼式には宴会 (bazzm)、コブカリ

²⁸ 預言者ムハンマドの教えや習慣に由来するイスラーム法の慣行。

(ko'pkari²⁹)といった行事も含まれていた。コプカリは 1~3 日間行われ、主催者は優勝者に賞品を用意しなければならなかった。

結婚式

19 世紀末の結婚式は五つの部分からなっていた。それは、「仮の婚約 non shikanon」、「婚約 fotiha」、「披露宴 nikoh」、「花嫁の挨拶 ro'yi binon」と「花婿へのご馳走 domod talabon」である。結婚式をあげる人は客人の一部に伝統的な長衣 (to'n) をプレゼントしなければならなかった。また、客人は帰るときにパンやお菓子を持って帰っていた。また、女性の客が帰るときにはプロフ（伝統的な料理 palov）も配られていた。

葬式

ハージ・ムイーンによると、当時は葬式に集まった人々に「生地 yirtish」を配る慣行もあったという。また人が亡くなってからその家族は三日、七日、二十日、四十日、一年目に近所や親戚の人々に伝統的な料理「プロフ」をふるまわなければならなかった。

上記の儀礼のいずれも主催者には大きな経済的負担がかかる儀礼であった。ここで人生儀礼の実態について説明したが、次にハージ・ムイーンの説く改革方法について考察しよう。

この論説で、ハージ・ムイーンは、トルキスタンでは人生儀礼のために資金を浪費していることを批判し、このような習慣はトルキスタン以外のムスリムにはないと主張している。例えば、アラビア、エジプト、イスタンブール、カフカス、クリミアやイランなどの地域では、割礼のために盛大な儀礼あるいは宴会は举行しないことを述べている。彼らは預言者ムハンマドのスナットである割礼だけで済ませていることを指摘し、トルキスタンのムスリムも割礼を彼らのように簡素な方法で行うべきと述べている。結婚式と葬式に関しても、派手すぎることを、無駄遣いが多いこと、贈物が多いことを強く批判し、できるだけ小規模に行うように呼びかけている。

ここまで、当時の人生儀礼はどのようなものだったのかについて検討したが、次にこれに関係するジャディード知識人の戯曲や論説を分析してみよう。

²⁹ 馬に乗って子羊を奪い取るゲームであり、割礼式を行う人はコプカリを開催しなければならなかった。

第2節 戯曲『割礼 to'y』

サマルカンド出身のハージ・ムイーンは12歳の時に両親をなくし、モスクのイマームを務めていた祖父の下で育った。1901年に旧方式学校（マクタブ）の教師として働き始め、1903年にサマルカンドで新方式学校を開校した[Hoji Muin 2005: 5]。

ハージ・ムイーンはヌスラトッラ・クドラトッラと共に1914年に戯曲『割礼』を書いている[Hoji Muin 2005: 8]。『割礼』は1914年末にトゥラン劇団によって上演され、成功をおさめた[Rizaev 1997: 65]。『割礼』が1915年6月1~3日にフジャンド（Xo'jand）でも上演されたことを証明する戯曲ポスターがアブドゥッラ・アウラーニーの記念館に所在している[Rizaev 1997: 66]。

『割礼』は、息子の割礼のために大きな祝宴をあげ、その結果、破産してしまう資産家（バイ³⁰）を描いた作品である。資産家は盛大な割礼をあげないと人々に笑われ、面目を失うと考え、盛大な儀礼をあげる。その結果、すべての資産を割礼に使ってしまい、破産するという筋書きの悲劇作品である。この戯曲は4幕から成り立っており、第1幕の内容は割礼の相談である。この相談の場では資産家に助言する人物が二つに分かれており、一つは、割礼を小規模に行うように資産家に勧める人々、もう一つはできるだけ盛大に行うように勧める人々である。

小規模で行うように勧めるのは、ハージ・ババ（Hoji bobo）と銀行員（Mirzo）である。盛大に行うように勧めるのは、地区長アクサカル³¹（oqsoqol）、ババ・ヒタブ（Bobo Xitob）、エシュナザル（Eshnazar）、ヒディルバイ（Xidirboy）などである。盛大に行うように呼びかける人々は皆、「割礼を盛大にやらないと皆に笑われる」、「割礼にカーディー、ムフティー、ムダッリス、ウラマーなどを招待し、皆に一着ずつ『伝統的な高級な長衣 To'n』をあげないといけない」、「大きなコプカリをやらないとほかの地区の人々に笑われる」、「稚児遊びのない割礼は良くない」などのアドバイスをする。

「稚児遊び juvonbozlik」というのは少年（juvon）の踊りを楽しみながらの飲み会のことである[Begmatova 2006: 11]。

この戯曲でハージ・ババは一回しか発言しないが、それはとても興味深く、意味のある発言である。彼はメッカへの巡礼に行く途中にイスタンブルで26日間滞在し、元スルタンの子息の割礼に参加したこと、割礼式には30~40人ぐらいの客が参加したこと、そ

³⁰ ウズベク語では「金持ち」や「資産家」を意味する。

³¹ アクサカルは地区長のこと。[トルキスタン統治]規程案により、[タシュケント]市内各地区（このような地区や街区の数を定めることは総督に委ねられていたが、実際には以前からあったタシュケントの四区分が維持された）のミンバシは、「アクサカル」に代えられ、しかもそれは「キルギズ人の郷長[に相当する]権力」を行使するはずであった（アクサカルはペルシア語では rish-i safid「白ひげ」の意で、トルキスタンには古くからあったが、実際は決まった法的な権限はなく、その年齢と富、以前の貢献によって尊敬をかちえた人物になった）。バルトリド『トルキスタン文化史2』157-158頁を参照。

の割礼ではお茶一杯しか出されていないこと、またイスタンブールでは盛大な割礼、祝宴、コプカリなどは行われないことについて述べられているからである。

ハージ・ムイーンは、巡礼を行ったことで尊敬されるべきハージ・ババの発言を通じて、トルキスタン以外の地域のムスリムは割礼を小規模で行っていることを民衆に伝えようとしていることがわかる。

また、相談の場に途中から参加した銀行員は資産家に次のような助言をする。それは次のように要約できる。

人生儀礼のためにお金を無駄遣いするのはトルキスタンの民衆だけで、他の民族はこのような無駄使いはしません。だから、彼らは次第に発展し、我々は無駄遣いのせいで破産してしまいます。あなたも苦勞して稼いだお金を無駄使いしないでください。割礼に使おうとしている 1 万 5 千スムのうち 5 千スムを使って息子さんを教育すれば、あなたの息子さんは知識人になり、残りの 1 万スムはあなたに残ります[Rizaev 1997: 161]。

このように、銀行員は資産家に無駄遣いをせず、小さな割礼式を行うように勧めている。ハージ・ババも銀行員も比較的近代化が進んでいるイスタンブールとほかの民族の例を示しているが、これは彼らが他のイスラーム諸国に行って自分の目で見えてきたものを民衆に伝えたかったからである。

しかし、資産家はこのような忠告を無視し、すべての資産を使って盛大な割礼をあげる。その結果、資産の全てを失って破産してしまうのである。

『割礼』の最後に銀行員の言葉がある。その言葉は『割礼』に込めたハージ・ムイーンの考えを明瞭に表現しているので、以下にその言葉を引用することにしよう。

我々トルキスタンのムスリムがお酒を飲み、稚児遊びをし、さらに無駄遣いをするのは我々には知識がないからです。ほかの民族は皆、稼いだお金を学問と教育、宗教のために使い、だんだん発展していますが、我々は知識がないために我々の庭や家売って、そのお金で人生儀礼を行い、最後には破産しています。ムスリム諸兄、もし我々が今から人生儀礼の無駄遣いをやめないならば、最後にはすべての物を失ってしまうことでしょう[Rizaev 1997: 170-171]。

この発言からも分かるように、ハージ・ムイーンは、派手な人生儀礼の原因は無学と無知だと主張し、人生儀礼を小規模で行うように呼びかけている。民衆は人生儀礼を問題と感じていなかったが、ハージ・ムイーンやベフブーディーなどの知識人は人生儀礼

を社会問題と見なしたのである。それは彼らが、同じイスラーム地域のイスタンブル、メッカ、メディナなどを訪ね、相対的に近代化が進んでいる地域の社会を自分の目で見てきたからである。

また、ハージ・ムイーンはこの戯曲を通じて 2 つの大きな社会問題を取り上げている。その一つが、民衆の経済的な困難であるとすれば、もう一つは、悪習の蔓延である。ダムッラー³²の発言を通じて祝宴 (bazzm) で行われる「稚児遊び」や「飲み会 mayxo'rlik」がイスラームに反することを民衆に伝えようとしている。ここにはハージ・ムイーンの考えが明瞭にこめられている。

第3節 戯曲『不幸な花婿 Baxtsiz kuyov』

タシュケント出身のアブドゥッラ・カーディリーの『自伝 Tarjimai hol』によると、彼は貧しい家庭に生まれ、9-10 歳になってからマクタブに入学した。マクタブでおおよそ 2-3 年教育を受け、家族の経済的な困難のため、12 歳になると資産家の使用人として働き始めた。その資産家は商人であり、ロシア語の読み書きができる者を必要としていたのでカーディリーをロシア語の学校に送った。カーディリーはタタール人が出版していた新聞を読み始め、はじめて新聞というものを知ったという。また、この『自伝』では「1913 年に出版されたベフブーディーの『父殺し』の影響を受けて『不幸な花婿』(1915) を書いた」と述べている。

『不幸な花婿』も悲劇作品である。この戯曲では、一人の孤児が叔父の圧力で自分の家を担保にし、盛大な結婚式の費用を借金して結婚する。しかし、結婚式の後に借金を返せなかったため家を失い、あげくのはてに夫婦は自殺してしまうという筋書きになっている。

この戯曲では花婿の叔父がエツリクバシ³³と一緒に花嫁の家を訪ね、結婚式の相談をする。この相談の場には、花婿であるサリフの側から、叔父のアブドゥルラヒムとサリフが住んでいるマハッラ³⁴のエツリクバシが参加し、花嫁の側からは、花嫁の父ファイジバイと花嫁であるラヒマが住んでいる地区のダムッラーが参加する。エツリクバシは結婚式をできるだけ小さくし、シャリーア（イスラーム法）に従って結婚式を行うよう

³² イスラーム教の学者の尊称。

³³ 五十人長（エツリクバシ）は、[トルキスタン統治] 規程案により、50 戸の代表として選ばれ、カーディリー（裁判官）も選び、区域ごとに税を割り当てていた。バルトリド『トルキスタン文化史 2』、157-158 頁を参照。

³⁴ 中央アジアの都市や農村部の街区あるいは地区社会。語源はアラビア語やペルシア語で〈場所〉〈地区〉を意味する mahalla。マハッラの住民は、モスクやマクタブ（初等学校）、パン焼き釜などの共有、結婚式や葬式などの人生儀礼への相互参加、日常的な相互扶助や共同作業（ハシヤル）の実行などによって共同体的な社会を営んできた。『中央ユーラシアを知る事典』484 頁を参照。

に呼びかける。また、花婿からあまり資金を貰わないように頼むが、花嫁の父は盛大な結婚式をしないと娘をあげないと答える。

ここで、エッリクバシとダムッラーの相談の場の会話を引用してみよう。

エッリクバシ： シャリーアによると、花婿は花嫁に「贈物 *mahr*」を用意し、一杯の水で結婚を済ませる。預言者ムハンマドは「花婿からたくさんのお金、絨毯、布団、ネックレスなどをもらいなさい、花婿が借金してもいいから」と言ったのだろうか？現在、我々トルキスタンのムスリム以外のムスリム、つまり、メッカ、メディナ、イスタンブールなどのムスリムは上記のようにシャリーアに基づいて結婚式を行うのである。花婿からお金をもらうのは非イスラーム的な行為だと考えられている。我々のように浪費はしない、（ダムッラーに向かって）ダムッラー様、あなたもイスラーム教の学者のはず。神と預言者ムハンマドの教えは上記のようなものではないのか？ファイジバイが訊ねていることはシャリーアに反しているのではないか？

ダムッラー： それぞれの地域でムスリムの習慣は違うのである。我々も自分の地域の習慣に従わなければいけない。

エッリクバシ： あらゆる地域のムスリムの習慣は同じである。いずれの地域のムスリムもみなシャリーアに基づいて結婚式を行うのである。我々トルキスタンのムスリムは、無学と無知のために、シャリーアに反する方法で行うのである[Rizaev 1997: 183]。

この発言から分かるように、エッリクバシは、宗教的に見て結婚式での無駄遣いはよくないこと、イスタンブール、メッカ、メディナでも結婚式は小規模に行われること、花婿から色々な贈り物を貰わないことなどを言い続けるが、ダムッラーはイスラーム法をよく知らないため、小規模の結婚式には賛成しない。さらに、花嫁の父も賛成しないのである。結局、エッリクバシの反対にもかかわらず、花婿の叔父アブドゥルラヒムは賛成し、婚約をする。

その結果、花婿は自分の家を担保にし、お金を借りて結婚するが、返済の期日にお金を返せなくなる。花婿は、借金を返せず、家を失って生きるよりは死んだ方がましだと考え、自殺しようとする。しかし、夫の死を我慢できないと考えたラヒマは先に自殺し

てしまう。それを見たサリフも自殺する。このようにして、夫婦がともに自殺してしまうのである。

この戯曲の最後にエッリクバシが観客に向かって発言する言葉がある。この語りは、カーディリーの考えを明瞭に表現しているので、以下にその言葉を引用しておこう。

皆さんもこのような浪費をしています。皆さんは、無駄遣いの結果を自分の目でご覧になったでしょう。皆さん、シャリーアに従い、目を開いてください。無駄遣いをしないで、そのお金で息子さんを教育してください。あるいは、慈善団体に寄付してください。息子を教育するのは義務で、良いことでもあります。結婚式の無駄遣いはシャリーアに反する行為です。結婚式を盛大に行うことの問題の一つは、多くの若者は結婚式の資金がないために 30~40 歳まで結婚できず、お酒を飲んだり、稚児遊びをしたり、女遊びをしたりしています。彼らは我々の名を汚し、全イスラーム世界にとって恥ずかしい行為をしています。これは誰のせいでしょうか？もちろん、娘を持つ父親たちです。彼らはシャリーアを従わずに盛大な結婚式を求めるからです[Rizaev 1997: 193]。

この発言でも、結婚式を小規模で行うように呼びかけている。その代わりに、節約したお金で子供を教育するように呼びかけている。また、結婚式の資金を稼げない若者が稚児遊びや女遊びに走ることも指摘しているが、それは、当時の大きな社会問題となっていたからである。カーディリーは結婚式の経済的な負担の重さも強調している。

この戯曲でも相対的に近代化が進んでいたイスタンブル、メッカ、メディナなどとの比較の観点が現れている。また、宗教的な観点からの批判も述べられている。上記の『割礼』と『不幸な花婿』からわかるように、イスラーム保守派は人生儀礼の無駄遣いには反対していなかった。保守派はジャディード運動の担い手の障壁となり、これと対立していた。その理由の一つは、当時、マクタブとマドラサの教師を担当していたのはイスラーム保守派を形成するムダッリスやムッラーだったが、新方式学校が開校されると、彼らが務めるマクタブやマドラサに通う生徒の数は減り始めたからである。これについて小松久男は、次のように述べている。

新方式学校によって既得権を失いかねない保守派のムスリム知識人はこれに強い非難をあびせ、新方式の支持者には「イスラームからの逸脱」や「背教者」という表現すら用いられた[小松 2014: 41]。

イスラーム保守派が反発したもう一つの原因は、ジャディード知識人の創作、上演した戯曲である。イスラーム保守派は演劇を異教徒がもたらした「ハラーム³⁵」とみなして攻撃した。こうした理由でジャディード知識人とイスラーム保守派の対立が生じたのである。ジャディード知識人は保守派に対抗するために、自分たちの戯曲や論説では、宗教的な観点からの議論も展開した。

ジャディード知識人は、イスラーム保守派に対抗するために新しいイスラームの解釈を打ち出しているように見える。たとえば、上記に引用したダムッラーとエッリクバシの会話をみると、保守派を代表するダムッラーは「それぞれの地域でムスリムの習慣は違うのである。我々も自分の地域の習慣に従わなければいけない」と語る。これに対して、ジャディード知識人を体現するエッリクバシは、「いずれの地域のムスリムもみなシャリーアに従って結婚式を行う」のであり、「トルキスタンのムスリムは、無学と無知のために、シャリーアに反する方法で行うのである」と述べて、地域的な慣行を認めない立場をとる。いわば、保守派の唱えるローカルなイスラームに対して普遍的なイスラームの正当性を主張し、保守派を論駁するのである。このような論法はジャディード知識人に共通して見られる。彼らの論説にイスラームの聖典コーランやハディース（預言者ムハンマドの言行録）からの引用がしばしば現れるのはそのためである。

カーディリーは『不幸な花婿』に関連して 1915 年 3 月 20 日に『トルキスタンの声』に「人生儀礼 to'y」と言う詩を書いている。内容は非常に興味深く、当時の人生儀礼を批判的に書いているので、ここに日本語に翻訳して書いておくことにしたい。

いまどき我々の間で盛んになった、トイ、
金のない民を驚かせた、トイ。

他人より立派にしようとされた、トイ、
頑張ったあげくに贅沢となった、トイ。

トイから 5 日間経つやいなや、
資産をなくして嘆く、トイ。

贅沢なトイを真似したご同輩、
トイに自分の命すらかけた。

資産家たちよ！貧しき者たちよ！

³⁵ 「ハラーム」はイスラーム法の定める禁止行為をいう。

コーランは我々にトイを命じたのか？

こんな行事はシャリーアにはない、
異教徒の行事、悪魔の行事、トイ。

知恵のある人はこんなことはしない、
良識のある人はけっしてトイに近づかない。

夏も冬もトイとともに過ごすなら、
我々を打ち滅ぼす、トイ。

友人たちよ！同胞たちよ！
ムスリムならばトイを捨てよう！[Abdulla Qodiriy 1915: 2].

このように、カーディリーは、『不幸な花婿』だけに限らず、詩も書いて、人生儀礼がもたらす困難を指摘し、小規模で行うように民衆を呼びかけていた。

第4節 ベフブーディーの論説「我々の希望もしくは願望」

ベフブーディーは、1913年11月30日（6号）と同年12月7日付（7号）の『アーイナ』に「我々の希望もしくは願望 A'molimiz yoyinki murodimiz」という論説を書いている。6号の論説では、人生儀礼の問題点を指摘し、強く批判している。7号では人生儀礼に使う資金の一部を教育の発展や人材育成に使うべきだと述べている。

それでは、6号と7号の論説を順に見てみよう。

6号では、トルキスタンの「ほとんどの民衆の希望は働いてお金を稼ぐことであり、息子や娘の結婚式をあげることである。それはどんな結婚式だろうか？それは自分と同じ程度の人々の結婚式より立派な結婚式である」と述べ、民衆は結婚式を自分と同じ程度の人々の結婚式より立派な結婚式をあげようとする」と指摘している。

この論説では、当時、昼も夜も長時間働き、食べ物も着るものも我慢する貧しい職人の希望も盛大な結婚式をあげることにたと述べている。

また、ベフブーディーは結婚式に途方もない資金がかかることを指摘し、「一人の職人の結婚式に1000スム、中流の家族の結婚式には2000スムか3000スムかかる。準資産家の結婚式には4000から5000スムが必要である」と述べている。

また、ベフブーディーは「毎日裁判所でどれほどの家屋、部屋、園庭が売られていることか。毎日どれほどの約束手形と引受拒否がなされ、どれほどの店や会社が破産して

いることか。これは何のためだろう。結婚式、葬式、服喪、コプカリ、宴会のためである」と述べ、人生儀礼の無駄遣いを強く批判している。

この論説の最後にベフブーディーは、まとめの言葉を書いている。それは次の通りである。

あるマハッラに読み書きができる人は20人のうち一人もいない。イスラームの教義を原典とともに知っている人は言うまでもない。将来〔旧来の〕カーディーがいなくなっても、現代の要請に対応できるカーディーになれる人は全トルキスタンの一千万人の中に一人としていない。いない、いないのはなぜか。皆の衆！我々は愚か者なのか、それともまともなのか。もちろん...[Behbudiy 1913: 132]

この最後の発言を見るとベフブーディーの本当の悩みが見えてくる。この論説から分かるように、ベフブーディーは、トルキスタンのムスリムの希望と願望がもつぱら「人生儀礼」であることに憤りを感じており、それが大きな社会問題であることを民衆に伝えようとしている。人々は自分を犠牲にしても「人生儀礼」のために借金をしていたが、児童の教育のことを考えてはいなかった。ロシア帝国がトルキスタンを征服してから、近代化も進み始め、世俗的な教育が必要不可欠なものになっていた。民衆はこうした現状を把握できていなかったが、ベフブーディーのようなジャディード知識人は現状を理解していた。そのため、このような論説や戯曲を書いて民衆に伝えようとしたのである。ベフブーディーはこの論説の続きとして、第7号の論説を書いている。

第7号の論説では、結婚式を小規模にし、節約したお金で児童をイスラーム式あるいはロシア式に教育するように呼びかけている。また、青年を海外に送り、宗教的・世俗的、そして現代的な人材を育成すべきと主張している。ベフブーディーには「トルキスタン自治」を実現する夢があった。そのためには、世俗的な知識をそなえ、ロシア語もできる知識人が必要不可欠と考えていた。また、ベフブーディーは、ムスリムとして読み書きができなければならないと指摘し、宗教に関する知識も教えるように呼びかけている。

また、ベフブーディーは、「我々のトルキスタンには教師が少ないので、結婚式や儀礼に要する資金を使ってカフカス、クリミア、オレンブルグならびにカザンに教育方法を習うために生徒を送らなければいけない」と述べ、なによりも教師を育成すべきことを主張している。

なぜなら、当時知識人がいたとしても、教師となれる者の数はきわめて少なかったからである。当時の教師のほとんどが旧方式のマクタブとマドラサを卒業した人であり、イスラーム教の基礎は知っていても、世俗的な教育は受けていなかったのである。

また、ベフブーディーは教育の発展のための「団体」を作ることについても触れている。ここでベフブーディーは次のように述べている。

生徒のために寄宿学校「パンシオン」を開かねばならない。この寄宿学校は近代
的かつ民族的・宗教的な精神をそなえなければならない。この寄宿学校を開校し、
国立の学校に進む生徒を育てるために「教育普及」あるいは「慈善団体」、「児
童教育団体」、もしくは他の名前をもつ、要するに団体が必要である[Behbudiy
1913: 155]。

このような団体はなぜ必要であったのだろうか。ジャディード知識人が開校していた
新方式学校の運営、教科書の作成、生徒を海外へ送り出すために資金が必要だったから
である。

ここで、20 世紀初頭のトルキスタンにも新しく登場した慈善団体、団体活動について
ふれておく必要がある。第一次世界大戦期のロシアにおける慈善団体の増加について、
長縄宣博は次のように述べている。

ロシア帝国で慈善協会が急速に増加し始めたのは、1890 年代初めのことである。
この当時、欧露のムスリム団体は、ロシア人の協会の支部として活動すること
が多かったが、1905 年革命後には、ゼムストヴォや市会の支援も受けながら、
独自の組織として発展した[長縄 2012: 73]。

このように、ロシア帝国では、慈善協会は 1890 年代から出現し、増加し始めたが、
1905 年の革命後、市会の様々な支援を受ける組織として発展した。1905 年革命後にはム
スリムの政治・社会運動も活発化した。ヴォルガ・ウラル地域のムスリムの間には、
1905 年革命を機にタタール語の新聞と雑誌が多数出現し、急速に普及した[長縄宣博
2012: 74]。トルキスタンの知識人もこのような新聞や雑誌を読んでいた。タタール人の
影響を受けたジャディード知識人は、トルキスタンでも慈善団体が必要だと理解し始め
た。彼らも 1905 年の革命後に次々と新聞・雑誌を刊行し、トルキスタンのムスリムを啓
蒙しようとした。このような出版物の主なテーマは、社会の問題点、教育への呼びかけ、
青少年のしつけなどだったが、その中には慈善団体の結成に関する論説もあった。『ア
ーイナ』におけるベフブーディーの論説「我々の希望もしくは願望」はその一つの例だ
と考えられる。

また、第 7 号で、ベフブーディーはトルキスタンのムスリムのために努力する人材、つまり宗教的・世俗的、そして現代的な人材を育成しなければならないと主張している。すなわち、

このような団体は民衆から資金を集め、民衆の児童を教育し、民族の未来のために必要なカーディーつまり裁判官、法学者つまり弁護士、エンジニアつまり工学者、先生つまり近代的な教師、民族に奉仕する人つまりドゥーマの議員、伝統的な産業を改良し、復興する人つまり技術者、商館や銀行で我々を支援する人つまり商学教育を受けた「実業家」、都市のドゥーマやこれからトルキスタンに開かれるはずのゼムストヴォ（地方自治機関）の運営に我々から選ばれ、我々のために、祖国ロシアのために、宗教すなわちイスラーム教のために、貧しい人々のために、そして民衆のために働く人々を育てなければならない[Behbudiy 1913: 155]。

以上二つの論説からベフブーディーの人生儀礼論をまとめてみよう。ベフブーディーが悩んでいたのは、民衆の考え方が浅かったことである。人々が日々の生活、とりわけ盛大な人生儀礼にしか関心を示さず、教育の普及と時代の要請に応えられる人材の育成に関心であることは、ベフブーディーにとって放置することはできなかった。彼にはトルキスタンのムスリムを一つの民族として統一し、自治を実現する夢があったからである。それには教育の普及が必要であった。彼からすれば、盛大な人生儀礼に消費される資金は、教育にこそ振りむけられるべきなのであった。ベフブーディーをはじめとするジャディード知識人が人生儀礼を解決すべき社会問題として議論した一つの理由は、ここに認めることができるだろう。

また、ベフブーディーは、「我々の希望もしくは願望」の 6 号において人生儀礼に途方もない資金がかかることを指摘している。見方を変えれば、これは彼がロシアによる征服後のトルキスタンの経済的な進展を把握していたからである。バルトリドは、当時のトルキスタン・ムスリム社会の経済的な進展について次のように書いている。

フェルガナ地方ではバイすなわち資産家階層が、現地の農民とロシア人の棉花買付人との間に立つようになった。タシュケントの商人たちの間には、これまでにない資本家が出現した。現地の事情通によれば、タシュケントではかつて「1 万から 1 万 5000 ルーブル持っていれば資産家と見なされたのが、今では（論文は 1903 年に書かれた）サルト人の間で、名だたる資産家と見なされるには、少なくとも約 50 万ルーブルを持っていなければならない」のであった[バルトリド 2011: 115]。

このようにロシアによる征服後、トルキスタンでは綿花の栽培が拡大し、綿花取引が盛んになったことから、ムスリムの間でも資産家が増大し、資産家階層の手元には資本が蓄積されるようになった。しかし、ベフブーディーらが指摘したように、こうした資産家の多くは教育の改革に貢献しようとしなかった。ジャディード知識人の教育改革の議論の背景にはこのような現実を打破する目的があったと考えられる。

第5節 人生儀礼から教育改革へ

以上見てきたように、ジャディード知識人はいずれも当時の人生儀礼のあり方を批判し、小規模で行うように呼びかけている。ハージ・ムイーンの『割礼』に描かれているように、当時の資産家は一度の割礼で破産してしまった。また、カーディリーの『不幸な花婿』の若い夫婦も、結婚式のために借りた金を返せず、家を失って、自殺してしまふのだった。

これらの戯曲は誇張して書かれているように見えるかもしれないが、ベフブーディーの論説「我々の希望もしくは願望」を分析すれば、これらの戯曲のストーリーは、日常的に起こっていたことがわかる。これについてベフブーディーは次のように述べている。

ある職人が 20 年間働いて稼いだ金は 3 日間の結婚式でなくなる。[中略]盛大な結婚式をあげて妻をめとった一部の貧乏人の状況には泣かされる。3 日間の結婚式の「服喪」は家族によっては 10 年、さらに一生続くときもある。しばしば結婚式は家を失い、家が荒れる原因となる[Behbudiy 1913: 132]。

この発言からもわかるように、当時の人生儀礼は大きな社会問題であった。このことは同時代の他の論説からもうかがうことができる。たとえば、ラフマトウッラ・アフマド・オグリなる人物は、雑誌『トルキスタンの声』の第 2 号に「人生儀礼に関する質問」という論説を投稿し、人生儀礼についていくつか質問を書いている。この論説では、ある人物はかつて資産家の一人であったが、3-4 回人生儀礼を挙行してから貧乏になり、いまや 6 人の子供の結婚式や割礼をあげようとしても資金がなく、困っていることを述べ、人生儀礼を小規模で行うことは可能かどうか、について質問しているのである。著者は次のように述べている。

現在、結婚式と割礼式を済ませていない子供は 6 人いる。まだ割礼していない上の息子は 11-12 歳ぐらいであり、次の息子たちもこれに近い年齢である。現在、割礼式をあげるための資金を持っていない。割礼式を小規模で行うように決心し、

近くのモスクのイマームに相談したが、彼は私を叱って、「あなたは我々の習慣をなくしたいのか？」と言った。私は、「イマームよ、私の手元に資金はありません。お金をいったいどこから手に入れて割礼式をあげますか？」と答えた。この会話の最中にマハッラのエッリクバシも入って来た。エッリクバシにも声をかけてみたが、エッリクバシは、「ダムッラーならばよく知っている」と言って、答えをダムッラーに任せた。ダムッラーは、「現金は持っていないくとも、3-4カ所に土地を持っているだろう。その一つを売れば、手元に大金が入ってくる。そのお金で割礼式をあげれば、大勢の貧乏人や孤児を食べさせることができる。もしこのご馳走をしないのであれば、大きな罪になる。また、皆に悪い目で見られ、孤立することになるだろう。あなたの他の子供たちの食べ物もアッラーがくだされよう」と答えた。私はこの言葉に答えをせずに、ダムッラーのところを去って、バザールに向かった。[中略]。この件について雑誌に書いて、聞くことにした。私は割礼式をあげなければ大きな罪を冒すことになるのでしょうか？いまは、この土地のおかげで生活をしているのです。子供たちの教育費もこの土地で働いて稼いでいます。もし、この土地を売れば、もっと貧乏になってしまいます。もし、売らなければ、ダムッラーに「大きな罪である」と言われます。私はこの「大きな罪である」という言葉が怖いのです。皆に悪い目で見られるのは怖くない。早速の回答を待っています[Rahmatulla 1914: 3-4]。

この質問に関して、雑誌『トルキスタンの声』の第6号に、「人生儀礼に関する回答」という記事が掲載された。この論説には、イスラーム法に通じたコーカンド、サマルカンドとブハラのマドラサの教師（ムダッリス）たちの回答が書かれている。たとえば、コーカンドのマドラサの教師は次のように答えている。

もし、ある人が土地を持っており、その土地で働いてお金を稼いでいるとすれば、その土地を売ることによって貧乏になる恐れがあるなら、その土地を売って人生儀礼を挙行するのは罪である[Idora 1914: 1]。

サマルカンドとブハラのマドラサの教師も同じく、土地を売ってまでして盛大な人生儀礼を行うことを批判している。この二つの論説からはジャディード知識人の機関誌ともいえる『トルキスタンの声』は、人生儀礼のはらむ問題を広く訴え、中には彼らの主張に賛同するムダッリスもいたことがわかる。

上記にとりあげた論説や戯曲でジャディード知識人は人生儀礼を批判的に見ているが、彼らは人生儀礼そのものを否定したわけではない。その盛大さ、無駄遣いを批判したの

である。人生儀礼は、民族の文化あるいは伝統であり、いずれの民族も上記のような人生儀礼を行うはずである。問題はその規模である。ジャディード知識人は人生儀礼を行わないのではなく、小規模に行うように呼びかけている。ベフブーディーは、論説「我々の希望もしくは願望」で次のように述べている。

もし結婚式や儀礼に以前のように金を無駄使いしなければ、その金をどうすればよいか？その答えは次の通りである。結婚式や儀礼をあげてもよい。しかし、現在のように無駄使いしてはいけない。可能な限り小規模にしよう [Behbudiy 1913: 154]。

このように、ジャディード知識人は、人生儀礼を批判的に見ても、民族的な慣行を捨てるのではなく、その規模を小さくするように呼びかけているのである。

その上で、ベフブーディーは人生儀礼を小規模にして、そこで節約した資金を人材育成のために使うべきと述べている。なぜなら、ベフブーディーにはトルキスタンの自治を実現する夢があったからである。先に述べたように、ベフブーディーにとって、トルキスタンの自治の実現は極めて重要なことであり、それにはムスリム青年を教育することが不可欠であった。彼は民衆に自由と発展をもたらすのは教育を受けた青年だと考えていた。そのために、ジャディード知識人は戯曲を書いて上演したり、新方式学校を開校して教育改革運動を指導したり、新聞や雑誌を刊行したりして、トルキスタンの民衆を啓蒙しようとしたのである。ベフブーディーが「我々の希望もしくは願望」で呼びかけたように、ジャディード知識人は自分たちの資金で新方式学校を開校し、運営した。これについて、『トルキスタンの声』の 4 号に掲載された「トルキスタンの新方式学校 Turkiston maktablari」という論説では次のように述べられている。

前回の論説で取り上げた発声方式という名前の学校は 5 年前に人々の信頼を失って、衰退したが、次に述べる親愛なる資産家たちが相談し、よりきちんとした学校を開校する構想に至った。このためにまず、ミール・ドーダ・ハージ氏は学校に最も相応しいいくつかの部屋からなる自分の客間を提供し、さらに、毎月定期的に学校のために 12 スム[ルーブル]を寄付すると約束した。この話を聞いて、他の人々も毎月提供できるものを約束し、1908 年 3 月 1 日にアブドゥサーミ・カーリを教師に任命し、学校を実際に開校した。自分たちの中から一人を会計係に任命し、約束した寄付を毎月この会計係に渡していた。会計係は教師の給料と学校の経費をここから使い、残ったものを貯金していた。この方法で学校は 6 ヶ月間

ほど生徒を教育した後、公開試験を実施し、民衆に紹介した[Maktab do'sti 1914: 2]。

この論説が示すとおり、ジャディード知識人はベフブーディーが主張したように、自分で学校を開校し、資金を集め、民衆を教育したのである。

小結

本章で取り上げた戯曲と論説からわかるように、当時、経済的な面でも文化の面でも「人生儀礼」は社会の大きな問題とされ、ジャディード知識人はそれを解決しようと努力した。それはなぜだろうか。その背景には、ジャディード知識人の意図を示すいくつかの理由があった。第 1 に、盛大な人生儀礼はムスリムの資産家にとっても、また貧者にとっても大きな負担をかけるものであり、ときには一家の零落や破滅さえ招きかねなかったからである。第 2 に、ジャディード知識人はトルキスタンのムスリムを無学と無知から啓蒙しようとしたからである。彼らは相対的に近代化が進んでいた地域との比較から、トルキスタンの発展のために世俗的な教育を受けた人材が必要不可欠だと考えていたと言える。そのために、人生儀礼のための浪費のような社会の様々な問題を解決しようとしたのである。第 3 に、ジャディード知識人は近代の諸条件に適合した人材を育成するために教育改革を実践したが、当時のムスリム社会のなかでそれに必要な資本を見いだすことは容易ではなかった。しかし、盛大な人生儀礼に消費される資金が教育改革に用いられたならば、状況は大きく変わるとジャディード知識人は考えていたのである。ジャディード知識人の人生儀礼に関する議論は、このような戦略に基づいていたと考えられる。

ジャディード運動はおよそ 30 年間続き、この間に彼らは社会を様々な面から発展させようと努力した。彼らの活動によって、民衆はイスラーム教の基礎だけではなく、世俗的な教育にも関心を持つようになった。また、人生儀礼はある程度小規模に行われるようになったが、完全に成功することはできなかった。現代のウズベキスタンを見ても、割礼式は小規模に行われるようになっているが、結婚式では現在もなお無駄使いが多く、盛大に行われている。葬式も七日、二十日、四十日、一年目の儀式は今も行われている。何百年も続いてきている慣行を変えることは非常に困難なことであり、ジャディード知識人の改革構想に 30 年という時間は不十分だったのである³⁶。

³⁶ 現在のウズベキスタンでは、「互酬ネットワーク reciprocal network」というものが存在しており、血縁家族間の相互扶助や「話会 ギャップ gap」といった慣習の形で人々はお互いに支え合っている。[互酬ネットワークは移行期の経済的苦境の中で、人々は生存戦略に用いる不

終章

民族名称問題とトルキスタン自治論

本章では、トルキスタンのムスリムとロシア人の民族名称問題について検討する。次に、これまでの章での分析を踏まえた上で、ベフブーディーの自治論について考察する。そして最後に、ジャディード知識人の教育改革運動の現代の教育への影響について考えてみたい。

第1節 民族名称サルトをめぐる問題

本節では、まず、ロシア人がトルキスタンのムスリム社会をどのように理解していたのか、次に、ジャディード知識人は帝政ロシアをどのように理解していたのか、これらの問題について考察することにした。

トルキスタンのムスリムに対するロシア人の見解

ロシア統治が始まると、ロシア人とムスリムとの間にさまざまな問題が現れた。その中で最も注目すべき問題の一つは「サルト Sart」という用語の使い方である。ロシア人は統治下のムスリム社会をどのように理解していたのだろうか。それには同時代の史料やいくつかの先行研究を参照して検討する必要がある。

可欠のセイフティネットとしてみなされる傾向が看取される[樋渡 2008: 12]]。相互扶助には様々な形が存在しているが、もっとも代表的なのは人生儀礼のときに親友、家族や親類が贈り物、資金などを与えることである。樋渡雅人によると、人生儀礼、贈り物、結納金などの規模は、ブレジネフ期に大幅に増大した。70年代のブレジネフ期は、ソ連経済の歪みが顕在化し、経済が停滞した時期である。経済的苦境の時期に、相互扶助の必要性から互酬ネットワークが活性化したと考えられる[樋渡雅人 2008: 13]。しかし、このような相互扶助の規模は小さく、人生儀礼にかかる資金の10分の1ぐらいである。残りの資金は人生儀礼をあげる人が負担しなければいけない。もちろん、ブレジネフ期までにも民衆の間で近所の支え合い、血縁家族間の相互扶助などが存在していなかったと言えない。上記に述べたように、相互扶助の規模が小さかったため、人生儀礼をあげる人への負担は大きかった。このような状況はジャディード知識人に見えていたため、彼らは人生儀礼の規模を小さくし、大量の資金を使わないように呼びかけていた。人生儀礼そのものに反対していたわけではない。ジャディード知識人の論説の中には相互扶助に関する情報は見られないが、昔から残っている人生儀礼を正しく行うことについてベフブーディーもハージ・ムイーンも触れている。彼らは慣習や人生儀礼は必要だと述べ、それにかかる資金を少なくするために人生儀礼を小規模に行うように呼びかけている。

トルキスタンのムスリム社会に関するロシア人の見解を考えると、「サルト」という用語を詳しく調べる必要がある。なぜならロシア領トルキスタンのムスリム定住民の大多数はロシア人に「サルト」と呼ばれていたからである。それでは、誰が「サルト」と呼ばれ、その理由は何にあったのかを考察してみよう。これまでにオストロウモフ、ナリフキン、帯谷知可などが「サルト」という語に様々な定義を書いている[Ostroumov 1913, Nalivkin 2011]。その定義をまとめると、次のように定義付けることができる。

トルキスタンのシルダリヤ州、サマルカンド州、フェルガナ州の都市部と農村部のムスリムが「サルト」と呼ばれていた。これは、ロシア帝国の 1867 年統治規定においてこの地域の遊牧民は「キルギズ」、定住民は「サルト」とされたことに基づいている。したがって、トルキスタンのテュルク人（現在のウズベク人）のみならず、タジク人も「サルト」と呼ばれていた。

しかし、現地の定住民は自分を出身地で呼んでいた。例えば、タシュキャンリック（タシュケント人）、コーカンリック（コーカンド人）などである[Ostroumov 1896: 3]。

また、小松久男は、「サルト」に関するオストロウモフの見解を次のようにまとめている。

サルトは、トルキスタン地方の原住民とロシア人にはよく知られた名称であり、シルダリア州、フェルガナ州、およびアムダリア管区の一部の定住民にたいして用いられる。彼らは、独自のトルコ系の言語（Sart tili）をもち、また部族的な伝統を欠いているために、カザフやトルクメンなどの遊牧民とも、またタジクやウズベクとも区別される。それはときに遊牧民やロシア人によって侮蔑の意味合いをこめて使われることがあるが、ほんらいそのような意味を持ち合わせてはいない[小松 1997: 1]。

上記では誰が「サルト」と呼ばれていたのかを確認したが、次に、トルキスタンのロシア人はサルト人をどのように理解していたのかを見てみよう。オストロウモフは、「サルト」を三つのクラスに大別している。1) シャリーアとイスラーム教理の代表者（イスラーム保守派：カーディーQozi、ムフティーMufti、イマーム Imom、スーフイー So'fi、イシャーン Eshon、ムダッリス Mudarris そしてムッラー Mulla）、2) 商人、3) 職人と農民である。この中で教育を担当していたのはイスラーム保守派の中のムダッリスとムッラーであり、オストロウモフによると、シャリーアとイスラーム教理の代表者の中には学問のある者（高等教育を受けた人）や学者はいなかった。ロシア統治が始まるまでトルキスタンではヨーロッパの教育は知られていなかった[Ostroumov 1896: 65]。

このように、オストロウモフはトルキスタンには近代的な教育が存在していなかったことを指摘している。これに近い指摘をナリフキンもしている。彼によると、ムスリムの古典的な文学には、真のイスラーム教徒は学問を必要とすることに関することわざや格言が書かれていた。例えば『珍奇なる真珠 Durr-ul'-Adjaib』には次のようなことばが書かれていると指摘している。

- ・ 「国の秩序のために奉仕するものは、学者の学問、スルタンの正義、資産家の寛大さと貧者の祈りである」、「神が知識の光を与えた人々を尊敬しなければいけない。星が空の飾り物であるように、彼らは地上の飾り物である」
- ・ 「学者の夢は無学な人の祈りにまさる」

このようにイスラーム教は理念としては学問と学者を高所に置くが、実践ではトルキスタンのムスリムの学問に対する態度は積極的ではなかった[Nalivkin 2011: 24-25]。学問は必要不可欠なものと言いながら、実際には学問に力を入れなかったのである。

またナリフキンは、ロシア人がトルキスタンのムスリムを「半野蛮人のアジア人 полуцивилизированный азиат」と呼んでいたことも指摘している。彼によると、総督の地方巡行は民衆にとって苦痛であった。なぜなら、民衆はそれに備えて町の清掃や飾り付けのような作業をしなければならなかったからである。しかし、帝政ロシア政府は民衆の苦痛を無視し、「我々には半野蛮人のアジア人になにか印象を残すことが必要である」といい続けていたのである[Nalivkin 2011: 95]。このように、ロシア人はトルキスタンのムスリムを無学、無知だと評価していたことがわかる。教育の面では、ベンドリコフによると、中央アジアでは男子にイスラームの教理が強制的に教えられても、初等学校のマクタブの数が多かったとしても、民衆の中で読み書きのできる人の数は非常に少なかった[Bendrikov 1960: 44]。

ロシア人が十分な教育を受けていないムスリムを「半野蛮人」だと理解していたとすれば、ロシア人が使っていた「サルト」という民族名称には、無学・無知・半野蛮人という意味が含まれていたと考えられる。それでは、ロシア人がトルキスタンのムスリムの大多数を「サルト」と呼んでいたことに関して、トルキスタンのムスリム知識人はどのように考えていたのかについて検討したい。

「サルト」に対するジャディード知識人の見解

ジャディード知識人は「サルト」に関してどのように考えていたのだろうか。当時の代表的な知識人は「サルト」と呼ばれることに関して反対であった。これについて、20

世紀初頭にトルキスタンを旅したアブデュルレシト・イブラヒムは次のように述べている。

なぜかわからないが、地元のムスリム、すなわちトルキスタンとブハラのムスリムに対しては「サルト」という呼称が広まり、とりわけわれわれタタール人とロシア人はこの「サルト」の呼称を用いている。しかし、サルトの大部分はこれを受け入れず、これに嫌悪感を示す者もいて、彼らは自分たちを「都市の民」と呼んでいる[イブラヒム 2013: 13]。

このように、トルキスタンの民衆の大多数は「サルト」と呼ばれることに対して不満を感じていた。したがって、「サルト」という名称は間違っていることをトルキスタンのムスリムに伝えようとしたのである。たとえば、ベフブーディーとバカー・ホジヤは雑誌『アーイナ』とオレンブルグの雑誌『シューラー³⁷』に「サルト」に関する論説を書いている。ジャディード運動の創始者イスマイル・ガスプリンスキー（1852-1914）も新聞『テルジュマン（翻訳者）』にサルトという用語について論説を書いている。また、ブハラ・アミールのロシア語通訳者であったバフラムベク・デヴレトシャーヨフも『アーイナ』の 17 号に「サルトについて」という論説を書いている。

たとえば、小松久男は、雑誌『シューラー』の第 24 号に掲載されているバカー・ホジヤの論説「サルトの語は根拠なし」を次のようにまとめている。

- ・トルキスタンの住民は、トルコウズベク人とタジク人からなり、サルト人はいない。
- ・サルトの意味にかんするラーピンの説は正しく、オストロウモフやナリフキンのいう「サルト語」とはトルコウズベク語にほかならない。
- ・シェイフ・スレイマン・エフェンディ、ブダゴフらの辞典、さらにロシア人の著作、サマルカンド州の人口統計（1897 年）を見ると、トルキスタンのトルコウズベク人をおしなべてサルト人と呼ぶのは正しくない[小松 1997: 2]。

ここから、ジャディード知識人は「サルト」と呼ばれることに反対していたことがわかる。ベフブーディーも『シューラー』の 19 号に「サルトの語は不明なり」という論説を書いた後、一連の論説のまとめとして『アーイナ』の 1914 年 22・23・25・26 号に同じ題

³⁷ 雑誌『シューラー』（1908-1917）は、タタール人の富裕な鉱山家ラミーエフ兄弟の出費によりオレンブルグで創刊され、ロシア領内はもとより新疆でも流布してムスリムの政治的な覚醒に貢献した。『中央ユーラシア史』386 頁、『中央ユーラシアを知る事典』249 頁を参照。

目「サルトの語は不明なり」という論説を連載している。ベフブーディーは、ここでバラムベクとバカー・ホジャの論説をまとめた上で、自分の意見を述べているため、この論説を分析し、「サルト」に関するジャディード知識人の見解を明らかにしておこう。

この論説でベフブーディーはサルトという用語はロシア統治期になってから使われるようになったことを指摘し、次のように述べている。

サルトという単語はトルキスタンの北部にのみ使われており、南部と西部の民衆は使わないのである。ブハラにサルトという単語は存在しない。トルキスタンの古老は誰もサルトという単語を知らない。トルキスタンの民衆はサルトと呼ばれると恥ずかしく感じる[Behbudiy 2009: 194-200]。

この発言からわかるように、サルトという単語は、ロシア帝国がトルキスタンを征服してから使われるようになり、その前はほとんど使われていなかったことが推測される。

また、ロシア領トルキスタンとブハラのトルコ人、タジク人、そしてアラブ人がサルトと呼ばれる理由に関しては次のように述べている。

- 1.『シャイバニー・ナーマ』、『バーブル・ナーマ』、アブルガーズィーハンの著作では、一部のトルキスタン人がサルトと呼ばれたようである。
- 2.いつかは不明だが、トルキスタンにきたヨーロッパの旅行者の一部が都市民やペルシア人、商人をサルトと呼んでいた。
- 3.いつのころか、キプチャク草原、あるいは中国から「サルト」という名の部族が来て、トルキスタンに住み始め、後に他の部族に飲み込まれてしまい、他の名前と呼ばれるようになったのである。

ロシア領トルキスタンとブハラの住民にサルトという名前を付けている人々の証拠はこれしかないのである[Behbudiy 2009: 194-200]。

この論説では、サルトの代わりに、トルキスタンのウズベク人・タジク人・アラブ人などと呼んだほうがよい。もしも、特定の名称が必要だと言われるのであれば、「トルキスタン人」、「トルキスタン・ムスリム」と書くべきだとベフブーディーは主張している。このようにして、ベフブーディーは民衆を部族、あるいは民族に分けず、「トルキスタン人」という名称で統一しようとしたのである。この背景には、トルキスタンのムスリムを統合して、ここにトルキスタン自治を実現しようというベフブーディーの夢があったと考えられる。

ロシア帝国がトルキスタンを征服して以来、現地のムスリムとロシア人の間には様々な問題が見られた。支配者は現地の民衆の宗教を無視し、民衆を「半野蛮人のアジア人 Полудикий азиат」とも呼んでいた[Nalivkin 2011: 95.]。トルキスタンのムスリムの大多数がこれを含意した「サルト」と呼ばれていたことも事実である。

トルキスタンのムスリム知識人は、ロシア人に「サルト」と呼ばれることに反論し、その本当の意味について論説を書き、こうした見解を民衆に知らせようとした。これは民族的な自覚の現れともいえ、これを指導したベフブーディーは、ロシア帝国の枠内で「トルキスタン自治」を実現しようと努力することになる。そのためには、高い教育を受けた青年と民衆の啓蒙が必要だったのである。新方式学校を開校し、児童を教育しようとしたのはそのためであった。民衆に自由と発展を与えるのも教育だと考えていたベフブーディーは、教育改革に力を入れた。しかし、ロシア当局は「ジャディード運動」を抑圧し、トルキスタンの知識人を逮捕し、新方式学校を次々と閉鎖した。その理由は、ロシア帝国がトルキスタンのムスリムが高い教育を受け、反政府的な運動を始めることを恐れていたからである。

本節では、「サルト」と言う民族名称に関するロシア人とムスリムの見解を検討したが、次の節ではベフブーディーのトルキスタン自治論について検討したい。

第2節 ベフブーディーの自治論

上記に見てきたように、トルキスタンのジャディード知識人に民族的な自覚が現れはじめた。ベフブーディーはトルキスタン人というアイデンティティを持っていたため、トルキスタン自治を実現しようと努力した。本節では、ベフブーディーのトルキスタン自治論について検討する。

ベフブーディーはトルキスタンのムスリムを統合し、ここに自治を実現する方面で努力した。そのためにも教育が必要不可欠であるのは明らかであった。ベフブーディーが考えていたトルキスタン自治はどのような目的で設立され、どのようなものであったかを検討してみよう。

ベフブーディーはトルキスタン自治の実現を早くも 1905 年から考え、その方面で努力していた。彼は、1906 年 10 月タシュケントで創刊されて間もない新聞『フルシド（太陽）』に寄稿した論説ではトルキスタンにおける「宗務」の実態を鋭く批判している。

トルキスタン人には神以外にマドラサを監査する者はなく、宗教や学問を監督する者もない。正義や公正の観念は喪われ、読み書きもできないカーディー、学

識なきムダッリス、事情に疎いムフティー、クルアーンの読めないイマームが跋扈しているのである。これもひとえに我々が宗教や学問の監督者を持たないためではないか？[小松 2008: 81]。

このように、ベフブーディーが当時の宗務行政を強く批判しているのは、将来的にトルキスタンの民衆を教育し、トルキスタンの自治を実現したかったからであると言える。彼は、さらに 1907 年 4 月 24 日付けで第 2 ドゥーマ、ついで同年 11 月、第 3 ドゥーマにムスリム会派を介して「トルキスタンの宗務と民事に関する行政」*Turkistan idare-yi ruhaniya va dakhiliyasi* の建白書を提出した[小松 2008: 82]。この建白書は彼の構想を示し、トルキスタン自治の具体像を表していた。これは、トルキスタン自治の実現に向けての最初のステップだったと言える。後に、ベフブーディーはトルキスタンの行政に見られる欠陥を指摘し、次々と論説を書いていく。彼の論説には「宗務行政局」*idorai ruhoniya va mulkiya* などのような名称が現れるが、これは「トルキスタンの宗務と民事に関する行政」、つまりトルキスタン自治を意味する。

たとえば、当時のトルキスタンの行政の欠陥や問題点について 1908 年、雑誌『シェーラー』の第 23 号に「トルキスタンの行政 *Turkiston idorasi*」という論説を発表した。この論説では、トルキスタンの管理システム、裁判システムなどについて詳しく説明し、裁判システムの欠陥を次のように強く批判している。

すべてのカーディーすなわち裁定を下す者を監督する専門機関がないために、ムフティー会議の推奨あるいはカーディー会議の判断は、間違いであっても、正解であっても、強制的に実行される。一度会議において判断が下ると、もうそれを取り消すことはできない。時折、トルキスタンの様々な州のカーディー会議は同一の問題に対して異なった判断や意見を出す。このことは、政府も驚き、さらに不信を招く原因となる。この現状は、ひとえにすべてのカーディーを監督する規律ある行政機関が欠如していることに由来する[Behbudiy 1908: 721]。

この発言からも、ベフブーディーの自治を実現したい夢が読み取れる。ここで、カーディーシステムの欠陥を強く批判し、欠陥の理由は宗務行政機関がないためであると指摘している。この論説でベフブーディーはカーディーたちの無学を指摘して、次のように書いている。

カーディーの中にはアラビア語やイスラーム法の知識を欠き、トルキスタンに特別に定められた法規も知らない無学者がきわめて多い[Behbudiy 1908: 722]。

ここでベフブーディーは、カーディーの中にアラビア語、法規、イスラーム法を知らない者が多いと指摘している。また、マドラサについても批判的な指摘を続け、次のように述べている。

大きくて、ワクフを有する公的なマドラサの教授や管財人は、学生によって選ばれ、政府によって承認される。そして各教授は、自分の好みの授業を自分が知るとおりに教え、誰もそれに関与せず、学があらうとなかろうと、彼らを監督する権利は誰にもない[Behbudi 1908: 722]。

ここで、ベフブーディーは裁判システムだけではなく、マドラサの教授の管理についてもふれている。彼によると、トルキスタンのマドラサやマクタブの教師は、知識があっても、なくても学生によって選ばれ、政府によって承認されてから、自分の好きなように授業を行っていたことがわかる。この論説からは、ベフブーディーはトルキスタンの行政の現実を詳しく観察していたことがわかる。

また、ベフブーディーはトルキスタンでは教育と宗教の分野の役職者は試験なしで任命されることを批判して、次のように述べている。

トルキスタンの教育や教務に就くムスリム役職者はすべて試験なしに選ばれており、彼らを監督する者もない。それゆえにしばしば腐敗や不適切な事例が起こるのである[Behbudi 1908: 722]。

このように、ベフブーディーは、腐敗や不適切な事例が起こるのは、トルキスタンのムスリム役職者を監督する者がいないからであると主張している。ベフブーディーは、この論説を次のようにまとめている。

私は全トルキスタンに独自の宗務行政機関が設立されることを求める。[中略]。このように包括的で秩序だったイスラーム行政機関が開設されなければ、トルキスタンの現状を改革することはできないだろう。この将来の機関は、たんに聖職者を管理するのみならず、民事、法律、学術その他の業務もこなすべきである。現在の裁判所や教育施設はその基盤となるはずだ[Behbudi 1908: 723]。

この最後の主張から、彼の本当の目的は自治を実現することであることがわかる。

その後、1914 年に彼は雑誌『アーイナ』の 9 号、10 号と 11 号に「構想 Loyiha - Proekt」という論説を掲載し、9 号では次のように書いている。

私は 1905 年 10 月 17 日の勅令で招集された第 1 および第 2 ドゥーマのムスリム会派、ならびにトルキスタンの査察官に勅任されたパーレン伯爵にトルキスタンの教務行政に関する草案を提供したことがある。その計画は 100 項目ほどからなっていた。残念ながら私はこの草案のコピーをなくしたが、現在トルキスタンのムスリムの行政と裁判所（qozixona）の改善が話題になっている[Behbudiy 1914: 202]。

ここでベフブーディーは、トルキスタンの行政に関する過去の草案に触れた後で、あらためて議論を展開している。この 1914 年の論説でも、彼はムスリムの間に裁判官、法律家になれる者がいないことを残念に思い、次のように述べている。

やがて我々の子孫、女性、孤児たちは[ロシアの]裁判所と法律家の前で戸惑うことになる。[中略]我々ムスリムの間にも法律家と裁判官になれる者がいればよかったのに。また、法律と裁判所が我々を虐げることはないことも言っておきたい。我々は言語、法律そして現代を知らないために害を受けているのである[Behbudiy 1914: 203-204]。

このように、当時のムスリムの大多数は読み書きができず、また、十分な教育を受けていないためにトルキスタンの裁判官になれる者はいないと指摘している。なお、先の論説でベフブーディーは、ドゥーマに提出した草案のコピーを紛失したと述べているが、『アーイナ』の第 10 号には 5 項目からなる計画が掲載されている。それは次の通りである。

1. トルキスタン自治のためにタシュケントに宗務行政局（idorai ruhoniya va mulkiya）を設立し、その支所はトルキスタンの 5 州に開かれる。各支所には 4 人ずつ役人が選ばれ、この役人の半分はイスラーム学者、残りの半分は近代の知識人、つまり高い教育を受けた知識人とする。彼らの長はこのムスリム知識人の中から一人が選ばれる。宗務行政局もに同様にイスラーム知識人と近代的な知識人からなる 4 人の役人が選ばれ、一人の局長（rais）が任命される。この局長はイスラーム教の教育も近代的な教育も受けた学者でなければならない。

2. 近代的な知識人は学校の修了証明書を提示してから、宗教的な知識人は試験を受け、任命される仕事に対応できることが確認されてから、エッリクバシによって推薦され、政府によって任命される。
3. 宗務行政局の役所はタシュケントとセミレチエ州、シルダリヤ州、フェルガナ州、サマルカンド州、ザカスピ州に開かれ、必要に応じてムスリムとロシア人の事務官も任命される。この役所と事務官はロシア政府の役所および行政職員と同様に扱われ、官位によって国庫から俸給が支給される。
4. 宗務行政局と支所の文書は政府機関とはロシア語で、カーディー（裁判官）および郷長とはウズベク語で交わされる。
5. 各州の郡市が 4 つ以上であれば、宗務行政局の役人も増える。たとえば、1 つの州に郡が 3 つあれば、宗務行政局の役人は 4 人になり、もし郡が 5 つあれば、役人も 5 人になる。しかし、各事務所の役人の 2 人はイスラーム学者であり、残りは近代的な知識人から選ばれる[Behbudiy 1914: 226-227]。

この計画は、トルキスタン自治の構造を詳しく紹介している。タシュケントに宗務行政局とセミレチエ州、シルダリヤ州、フェルガナ州、サマルカンド州、ザカスピ州にもその支所が開設されると述べている。この計画で述べているように、各事務所の役人の 2 人はイスラーム学者でなければいけなかった。その理由は、イスラーム教は古くから社会に根強く残っており、社会的に「聖職者」の立場も高かったからである。ベフブーディーは、トルキスタンに宗務行政局を開設するためには、ロシア政府とともにムスリム聖職者も満足させなければならないことを理解していた。ベフブーディーは当時の社会の様々な問題を自分の目を見て、それらを解決しようとしていたのである。

また、ベフブーディーはロシア十月革命後の 1917 年 12 月 22 日にサマルカンドの新聞『自由』に掲載された論説の中で、トルキスタン自治を次のように説明している。

トルキスタンのムスリムは、連邦制[のロシア]すなわち自治を求めている。つまりロシアと一体になって外務にあたり、内務のことは自分たちで管理すればよいのである。5 州からなるトルキスタンの各都市と各郡から一定数の人々が選出され、彼らがタシュケントの中央議会の議員となり、これがすべての税金、法律、政令を定めて、トルキスタンに施行する。

ロシア政府とムスリムとの間の関係は、この議会が仲介する。トルキスタンおよび各州のために選出された知事や役人を管理するのは議会であり、議会はトルキスタンの発展のために努力する。もちろん、この議員たちの大多数はムスリム

であるが、ロシア人も少なからず加わり、すべての業務は、強制に訴えることなく、協議によって行われる。

自分たちを守るために民警部隊を編成する。ロシア政府の国庫とは別に、我々の民族・文化的な事業のために自分たちの独自の財源を持つことになる。学校とマドラサ、ワクフとカーディー裁判などは自己管理とする。要するに、国[ロシア]の国家的、政治的な業務以外のすべては自分たちで管理・運営することになる。そのためには、現代적かつ文化的な法律を制定しなければならない。トルキスタンにはロシア人、ユダヤ人、アルメニア人なども住んでおり、彼らとの関係のために新しく現代的な法律が必要である[Behbudiy 1991: 42]。

ここでベフブーディーは、トルキスタン自治をさらに具体的に説明している。この発言から彼の構想は見えてくる。ジャディード知識人はロシアから離脱することなく、トルキスタンを管理・運営することを望んでいたことがわかる。小松久男は、ベフブーディーの自治論を次のように評価している。

ベフブーディーの新しさは、ロシア・ムスリムの中央組織と連携しながら、トルキスタンの宗教、教育、司法、地方行政を統括・運営する組織を形成すること、換言すればここに事実上のムスリム自治を実現するという構想にあたった[小松 2014: 47]。

このように、ベフブーディーは、すでに 1905 年からトルキスタン自治を実現するために活動していた。彼の主な目的はトルキスタンのムスリムを啓蒙し、社会の様々な問題を解決することであった。それには、きちんとした管理システムが必要であった。これを理解していたベフブーディーは、様々な方法で努力した。トルキスタン自治を実現するためには近代的な知識人が必要だと考えたベフブーディーは新方式学校を開校し、この学校のために教科書も出版した。民衆に教育の必要性を訴えるために戯曲『父殺し』を書き、出版した。さらに、この戯曲をトルキスタンの様々な都市で上演した。さらに彼は 1913 年から新聞『サマルカンド』と雑誌『アーイナ』を創刊した。

このように、ベフブーディーはトルキスタンのムスリムを統合し、ここに自治を実現する方面で努力した。そのためにも教育が必要不可欠であるのは明らかであった。1917 年 11 月 26 日コーカンドで第 4 回トルキスタン・ムスリム大会が開かれ、ここで「トルキスタン自治 Turkiston muxtoriyati」が宣言された。しかし、トルキスタン自治は 1918 年 2 月 22 日ソビエト政権の軍事力によって打倒された[ヒクマトラエフ 2014: 381]。そし

て、ベフブーディーは、一年後、1919 年にブハラ・アミール国内のシャフリサブズで逮捕され、後に殺害された。

第3節 ジャディード運動の歴史的、現代的な意義

本論文では、トルキスタンの教育改革に関するジャディード知識人の試みを論じてきた、ここで、ジャディード運動は現代の教育制度にどのように影響し、ウズベキスタンの研究者はジャディード運動をどのように捉えているのか検討する。

ソビエト時代になってからジャディード運動は、反革命の民族運動だと見なされ、ジャディード知識人のほとんどが抑圧・粛清され、長い間、ジャディード運動に関する研究も自由に行うことはできなかった。しかし、1991 年のソ連解体以後、ようやくジャディード運動に関する史料を利用し、研究を行うことが可能となった。

ジャディード運動と 20 世紀末の独立したウズベキスタンの教育改革を比較すると、共通点が多いことがわかる。たとえば、ジャディード知識人のベフブーディー、ムナツヴァル・カリらは青年を先進諸国に送り、教育させることを望んでいた。ウズベキスタンのカリモフ大統領も独立前から青年の教育を改革することは第 1 の課題と主張し、「できる限り能力の高い青年をソ連の代表的な機関、また、外国に送らなければならない。必要に応じて新たな知識、新たな技術を習うために日本、アメリカ合衆国などの先進諸国へ送り、彼らの勉強と研究に必要な環境を与えなければならない」と指摘している [Qurbonov 1999: 50]。ここからわかるように、20 世紀初頭にも 20 世紀末にも若者を先進諸国に送り出し、教育することはもっとも大事な課題のひとつであった。

また、20 世紀初頭に新方式学校の開校とともに教授法の見直し、教科書の出版などが重要な課題となったが、独立したばかりのウズベキスタンの教育改革も同じ課題に直面した。ソ連から独立したばかりのウズベキスタンの青年を啓蒙し、共産主義に代わる新たな世界観や価値観を取り入れなければならなかった。

一方、現在のウズベキスタンの研究者はジャディード運動を民族独立運動だと捉えているように見える。たとえば、ジヤエフはジャディード知識人の政治的な目的について「ジャディード知識人の政治的な活動の主な目的は独立と自由であった」と述べている [Ziyaev 1999: 9]。

確かに、民衆を啓蒙すれば、それは独立運動に発展していく可能性が高く、この観点からすると、ジャディード運動は民族独立運動の第一歩だったと言えないことはない。しかし、ジャディード知識人の真意を理解するには彼らの著作や論説のオリジナルを検討する必要がある。たとえば、ベフブーディーは『アーイナ』に掲載した「二つではなく四つの言語が必要なり」に次のように書いている。

我々の考えではロシア人は今日来て、明日出て行くというようなことはない。
我々のこの間違った考えは、地理、歴史と現代を知らないことによる [Behbudiy
1913: 14]。

この発言からは、ベフブーディーはロシアという国家の一部としてトルキスタンの発展を構想していたことがわかる。このように、本論文ではジャディード知識人の本来の思想を理解するためにジャディード知識人の論説のオリジナルを検討してきた。ジャディード運動は現在のウズベキスタンの教育制度の基礎となったと言っても過言ではない。ウズベキスタンの独立後、カリモフ大統領は教育改革の面では、ジャディード知識人の方法を選んだのも明らかである。カリモフ大統領もベフブーディーのように優秀な青年を先進諸国に送り出し、彼らの勉強と研究に必要な環境を与えなければならないと考えていたのである。以上のことから、ジャディード運動はウズベキスタンの独立後の教育改革に大きく影響したと言える。

第4節 総括と今後の課題

本論文では、ジャディード知識人により発行された雑誌・新聞に掲載された教育や社会問題に関する論説および研究の分析を通して、ジャディード知識人の教育改革の試みを検討した。以下、本論分において明らかにしたことを各章ごとにまとめておくことにする。

第1章では、20世紀初頭におけるトルキスタンの状況と当時の教育状況について、史料と先行研究の議論を整理、検討した。本章の第1節では、ロシアがトルキスタンを征服する前の政治・社会・文化的な状況について論じた。第2節では、ロシアによる征服後のムスリム社会の変容について考察した。具体的に明らかにしたのは次のようなものである。

ロシア帝国はトルキスタンを征服してから、さまざまな近代的なものを導入しはじめた。ロシアは郵便局、鉄道、さまざまな工場、電灯、電信などのようなものをもたらした。教育の分野でもさまざまな政策を行った。ロシア式の学校を開校し、ムスリムの生徒を教育しようとした。しかし、近代的な発明品を受け入れたムスリムも、ロシア式学校には反対し、子供を送らなかったのである。

第2章では、トルキスタンに古くから存在していた初等学校のマクタブ、高等学院のマドラサ、さらに、ロシア政府によって開校されたロシア語・現地語学校、そして、ジャディード運動の創設者であるガスプリンスキーについて検討した。本章では次のことを明らかにした。

トルキスタンでも近代化が進み、マクタブとマドラサで行われる教育だけでは不十分になり、これらの改革が必要になった。ロシア側の観察者もムスリム知識人もマクタブとマドラサを批判的に捉えていた。ムスリム知識人はマクタブを改革しようとした。ロシア政府はロシア語・現地語学校を開校し始めた。しかし、トルキスタンのムスリムはロシア語・現地語学校に疑問を持ち、それはムスリムのロシア化のために開校された学校だと考え、自分の子供をこの学校に送ることはしなかった。ロシア側もさまざまな方法を考え、ムスリムの生徒を集めようとしたが、成功することはできなかった。このような状況の中で、クリミア・タタール人のガスプリンスキーは、ムスリムのために「新方式学校」を開設し、ジャディード運動の創設者となった。

第3章では、トルキスタンにおけるジャディード運動の誕生、ムスリム知識人の試み、さらに教育問題について検討した。また、ベフブーディーの活動にも触れ、彼が刊行していた雑誌『アーイナ』についても検討した。具体的には次のことを明らかにした。

ジャディード知識人は、新方式学校の開校、教科書の出版、慈善団体の設立、雑誌や新聞の刊行と並んで演劇運動にも着手した。ジャディード知識人が開校した新方式学校の生徒は男子であった。ジャディード知識人の中にハージ・ムイーンのような女子教育に注目した知識人もいたが、結局、女子のための新方式学校は開校されなかった。ジャディード知識人の代表者であるベフブーディーにはトルキスタンのムスリムを統合し、自治を実現する夢があった。しかし、ジャディード知識人の改革運動はたえず圧力と妨害にさらされた。まず、ロシア当局の観点からすれば、ジャディードの活動は帝国の統合と安全を脅かす危険な「汎イスラーム主義」、「汎トルコ主義」にほかならず、「新方式学校」の開設や出版の認可をとりつけることは容易ではなかった。一方、保守的なウラマーたちは、教育改革の進展がこれまで教育を独占してきた彼らの地位を権威を脅かすことを恐れ、ジャディード運動に対抗したのである。

第4章では、代表的な知識人である、ベフブーディーとムナツヴァル・カリの教育論を検討した。それぞれの知識人はどのような目的で教育を改革しようとしたのか、そしてどのような方法で活動したのかを考察した。それぞれの教育論を詳しく検討し、相違点と共通点について指摘した。

ベフブーディーとムナツヴァル・カリの教育論を比較すると共通点が多いことがわかる。たとえば、2人とも新聞を刊行し、その中で教育に関する論説を数多く掲載している。2人とも新方式学校を開校し、その学校のために教科書も出版している。しかし、彼らの活動には相違点も見られる。ベフブーディーは、教育の普及のために戯曲を書いて、上演したが、ムナツヴァル・カリは劇団を作って、数多くの戯曲を上演した。しかし、ムナツヴァル・カリは戯曲を書いたことはない。2人ともムスリムの子弟を教育する方法を考え、その方面で努力した。

第 5 章では、20 世紀初頭のトルキスタンにおける大きな社会問題の一つである「人生儀礼」について考察した。具体的に結婚式 (to'y)、葬式 (aza)、割礼 (xatna) を取り上げた。とくに、トルキスタンで活動していた代表的な知識人が「人生儀礼」についてどのように考えていたのかを検討した。具体的には次のことを明らかにした。

本章で取り上げた戯曲や論説からわかるように、当時、経済的な面でも文化の面でも「人生儀礼」は社会の大きな問題とされ、ジャディード知識人はそれを解決しようと努力した。ジャディード知識人は人生儀礼を小規模に行うように民衆を呼びかけていたが、完全に成功することはできなかった。何百年も続いてきている慣行を変えることは非常に困難なことであり、ジャディード知識人の改革構想に 30 年という時間は不十分だったのである。

最後の終章では、ロシア領トルキスタンにおける民族名称の問題とベフブーディーの自治論を検討した。また、20 世紀初頭のトルキスタンにおける教育改革を把握した上で、現代の教育への影響や関係について述べた。具体的には、次のことを明らかにした。

ロシア帝国による征服以来、トルキスタンのムスリムとロシア人の統合には様々な問題が見られた。支配者は支配下のムスリム民衆の宗教を無視し、民衆を「半野蛮人のアジア人 Полудикий азиат」とも呼んでいた。また、トルキスタンのムスリムの大多数を「サルト」と呼んでいた。トルキスタンのムスリム知識人は、この「サルト」という名称に反対し、その本当の意味について論説を書いて民衆に知らせようとしたが、その背景には民族的な自覚の成長が認められる。

ベフブーディーは、1905 年のロシア第一次革命期からトルキスタン自治を実現するために努力した。彼の主な目的はトルキスタンのムスリムを啓蒙し、社会の様々な問題を自らの手で解決することであった。そのためには民衆の啓蒙と教育改革に加えて、きちんとした行政システムが必要であった。1917 年 11 月 26 日にトルキスタン自治が宣言されたが、このトルキスタン自治は 1918 年 2 月 22 日ソビエト政権によって打倒された。

ジャディード運動は、トルキスタンのムスリムは一つの民族として成立すること、教育改革によって知識や技術が普及すること、そして人々の世界観が変化することの基礎となった。彼らは同時代の社会問題について様々な論説を出版し、これらの問題を平和的に解決する方法を探った。

以上が、本論文で明らかにしてきたことの概要である。

最後に今後さらに追及すべき課題について述べておきたい。

ジャディード運動はきわめて大きなテーマであり、ジャディード知識人は様々な形で活動していた。本論文では、教育改革を中心にジャディード知識人の試みを検討してきた。従って、残されている課題は非常に多い。本論文では、主にサマルカンドとタシュケントにおけるジャディード運動を考察したが、今後はブハラにおけるジャディード運

動も検討したい。また、本論文ではアブドゥッラ・アウラーニー、フィトラトなどの知識人の教育論を検討することができなかった。今後、これらの代表的な知識人の教育論も考察したい。また、本論文では、20 世紀初頭の互酬ネットワークについて十分に考察することができなかったため、今後、19 世紀末－20 世紀初頭における民衆の相互扶助について検討したい。

参考文献リスト

1. 史料

- TsGARUz f.I-1, op.11, d.806. (ウズベキスタン国立文書館の史料)
- TsGARUz f.I-1, op.31, d.540. (ウズベキスタン国立文書館の史料)
- Abdulla Avloniy, 2006, *Tanlangan asarlar, 2-jild*, Toshkent.
- Abdulla Avloniy, 2009, *Tanlangan asarlar, 1-jild*, Toshkent.
- Abdulla Qodiriy, Akromov A., 1995, *To‘la asarlar to‘plami*, Birinchi jild, Toshkent.
- Abdulla Qodiriy, 1915, “To‘y”, *Sado-i Turkiston*, No.64, Toshkent.
- Alixonto‘ra Sog‘uniy, 1992, “Turkiston qayg‘usi”, *Yoshlik*, No.3-4, 30-36b, Toshkent.
- Behbudiy M. 2009, *Tanlangan asarlar*, Toshkent.
- Ergashev, F.R., 2001, *Oyina (1914-1915y.)*, Toshkent.
- Hoji Muin, 2005, *Tanlangan asarlar*, Toshkent.
- Ismail Bey Gasprinskii, 1881, *Russkoe Musul‘manstvo Mysli, zametki i nablyudeniya Musul‘manina*, Simferopol’.
- Ishoqxon to‘ra Ibrat, 2005, *Tanlangan asarlar*, Toshkent.
- Mahmudkhoja Behbudiy, 1908, “Turkiston idorasi”, *Shura*, No. 23.
- Mahmudkhoja Behbudiy, 1913, “Turkiston”, *Oyna*, No. 1, Samarqand.
- Mahmudkhoja Behbudiy, 1913, “Ikki emas to‘rt til lozim”, *Oyna*, No. 1, Samarqand.
- Mahmudkhoja Behbudiy, 1913, “A‘molimiz yoinki murodimiz”, *Oyna*, No. 6-7, Samarqand.
- Mahmudkhoja Behbudiy, 1913, “Loyiha - proekt”, *Oyna*, No. 9, 10, 11, Samarqand.
- Mahmudkhoja Behbudiy 1914, “Tiyotr nadur?”, *Oyna*, No.29, Samarqand.
- Mahmudkhoja Behbudiy 1914, “Qasdi safar?”, *Oyna*, No.31, Samarqand.
- Mahmudkhoja Behbudiy 1991, “Haq olinur, berilmas”, *Yoshlik*, No.118, 42-43b, Toshkent.
- Maktab do‘sti, 1914, “Turkiston maktablari”, *Sado-i Turkiston*, No. 4, Toshkent.
- Munavvar qori Abdurashidxonov, 2003, *Tanlangan asarlar*, Toshkent.
- Nalivkin V.P. 2011, *Tuzemtsi ran’she i teper’*, Moskva.
- Nushirvan Yaushev, 1914, “Hotun qizlarimizg‘a bir nazar”, *Sadoi Turkiston*, No.15, Toshkent.
- Nushirvan Yaushev, 1914, “Hozigi madrasalarimizda o‘quv”, *Sadoi Turkiston*, No.20, Toshkent.
- Qosimov, B., 1990, “Jadidchilik”, *Yoshlik*, No.103, 71-78b, Toshkent.
- Rahmatulla, A.O‘., 1914, “To‘y xususida savol”, *Sado-i Turkiston*, No.2, Toshkent.
- Salihov, M.B., 1935, *O‘zbek teatr tarikhi ucun materiallar*, Tashkent.
- Sirojiddin Ahmad, 1992, “Munavvar Qori”, *Shaq yulduzi*, No.5, 105-119b, Toshkent.
- Choriev, Z., 1991, “Mardikorlar”, *Yoshlik*, No.5, 36-38b, Toshkent.
- [Idora] 1914, “To‘y masalasina javob”, *Sado-i Turkiston*, No.6, Toshkent.
- [Idora] 1913, “Samarqandda tiyotr”, *Oyna*, No.10, Toshkent.

2. 研究

日本語の研究文献

- アブデュルレシト・イブラヒム、小松香織・小松久男訳、2013『ジャポンヤ イブラヒムの明治日本探訪記』岩波書店
- 磯貝真澄 2014「ロシア帝国ヴォルガ・ウラル地域ムスリム社会の「新方式」の教育課程」『近代・イスラームの教育社会史—オスマン帝国からの展望』昭栄堂。
- 大石真一郎 1998「ヌーシルヴァーン・ヤウシェフのトルキスタン周遊について」『神戸大学史学年報』13号。
- 帯谷知可 2005「オストロウモフの見たロシア領トルキスタン」『ロシア史研究』76号。
- 小松久男 1996『革命の中央アジア—あるジャディードの肖像』東京大学出版会。
- 小松久男 1996「ジャディードの鏡」『University Press』286号、東京大学出版会。
- 小松久男 1997 「トルキスタン人とサルト人—近代中央アジアの民族名論争」東方学会レジュメ（5月31日）
- 小松久男 1998「危機と応戦のイスラーム世界」『イスラーム世界とアフリカ』岩波書店。
- 小松久男 1999「ロシアと中央アジア」『アジアの歴史と文化 8』同朋舎
- 小松久男 2000『中央ユーラシア史 新版世界各国史 4』山川出版社。
- 小松久男ほか（編） 2005『中央ユーラシアを知る辞典』平凡社。
- 小松久男 2008「聖戦から自治構想—ヘダール・アル・イスラームとしてのロシア領トルキスタン—」『西南アジア研究』69号。
- 小松久男 2012「汎イスラーム主義再考—ロシアとイスラーム世界」『ユーラシア世界 3』東京大学出版会。
- 小松久男 2014『激動の中のイスラーム—中央アジア近現代史』山川出版社。
- ジャスル・ヒクマトラエフ（Jasur Khikmatullaev） 2012『独立後ウズベキスタン共和国における教育制度の変遷—「国家人材育成プログラム」を中心に—』修士学位論文、東京外国語大学
- ジャスル・ヒクマトラエフ（Jasur Khikmatullaev） 2014「近代トルキスタンにおけるジャディード運動—バフブーディーの教育論を中心に—」『言語・地域文化研究』第20号、東京外国語大学。
- ジャスル・ヒクマトラエフ（Jasur Khikmatullaev） 2015「20世紀初頭のトルキスタンにおける社会問題 —特に人生儀礼（xatna, to'y, aza）について—」『クアドランテ』第17号、東京外国語大学海外事情研究所。

トフタミルザエヴァ・マシフラホン、蒲生慶一 2014「独立後のウズベキスタンにおける教育改革と就学率の変化—教育改革の今後の課題—」『クアドランテ』第16号、東京外国語大学海外事情研究所。

長縄宣博 2012「総力戦のなかのムスリム社会と公共圏」塩川伸明・小松久男・沼野充義（編）『ユーラシア世界4 公共圏と親密圏』東京大学出版会。

バルトリド・V.V. 2011『トルキスタン文化史2』小松久男監訳、平凡社。

樋渡雅人 2008『慣習経済と市場・開発 ウズベキスタンの共同体にみる機能と構造』東京大学出版会。

間野英二 1977『中央アジアの歴史』新書東洋史⑧、講談社。

間野英二 1999『アジアの歴史と文化8 中央アジア史』同朋舎。

ウズベク語・ロシア語・英語・トルコ語の研究書

Abdirashidov Z., 2011, *Ismail Gasprinskiy I Turkestan v nachale XX veka: svyazi – otnosheniya – vliyaniye*, Tashkent.

Adeeb Khalid, 1990, *The Politics of Muslim Cultural Reform*, University of California Press.

Alimova, D., 1998, “Jadidchilik Mustqillik davri tarixchisi talqinida”, *O‘zbekiston tarixi: yangi nigoh. Jadidlar harakatidan milliy mustaqillikka qadar*, Toshkent.

Alimova, D.A., Rtveladze, E.V., 2001, *Ocherki po istorii gosudarstvennosti Uzbekistana*, Toshkent.

Alimova, N.I., 2004, *Chor Rossiyasining Turkistonda milliy madaniyat sohasida olib borgan siyosati*, Toshkent.

Arapov, D., Larina, E., 2006, “Sredneaziatskie musul’mane v 1914 godu (po materialam Turkestanskogo rajonnogo okhrannogo otdelenijaa)”, *Rasy i narody*, No.32, Rossijskaja Akademija Nauk.

Avazov, N.H., 1995, *Mahmudho‘ja Behbudiyning ijodiy merosi (Manbalar)*, Toshkent.

Baldauf, I., 2001, *XX asr o‘zbek adabiyotiga chizgilar*, Toshkent.

Bakirov, F., 1967, *Chor Turkistonida sud, shariat va odat*, Toshkent.

Bartol’d, V.V., 1963, *Akademik V.V. Bartol’d Sochineniya*, tom 2-1, Moskva.

Bendrikov, K.E., 1960, *Ocherki po istorii narodnogo obrazovaniya v Turkestane*, Moskva.

Begmatova, E., va boshq., 2006, *O‘zbek tilining izohli lug‘ati (ikkinchi jild)*, Toshkent.

Dolimov, U., 2006, *Turkistonda Jadid maktablari*, Toshkent.

Irgasheva, N.A., 1997, *Munavvar Qori Abdurashidxonovning ma’rifiy-pedagogik qarashlari (1878-1931)*, Toshkent.

Karimov, N., 1999, “XX asr boshlaridagi tarixiy vaziyat va jadidchilik harakatining vujudga kelishi”, *Jadidchilik: islohot, yangilanish, mustaqillik va taraqqiyot uchun kurash*, Toshkent.

- Karimov, N., 2011, *Mahmudho 'ja Behbudiy*, Toshkent.
- Khikmatullaev, J., 2015, "Questions of Nationality and Education Reform in Russian Turkestan", *Asia and Africa across Disciplinary and National Lines*, Office for International Academic Strategy (OFIAS) Tokyo University of Foreign Studies.
- Mingnorov, A., 2002, *Turkistonda 1917-1918 yillardagi milliy siyosiy tashkilotlar (Milliy matbuot materiallari asosida)*, Toshkent.
- Murodova, Sh., 2004, *XIX asr oxiri – XX asr boshlarida Turkiston o'lkasidagi ozodlik harakatlari tarixi (Samarqand viloyati misolida)*, Toshkent.
- Mustafa Tuna, 2002, "Gaspirali vs. Il'minskii: Two identity projects for the Muslims of the Russian Empire", *Nationalities Papers*, Vol.30, No.2.
- Muxammadjanov, A., 1978, *Shkola i pedagogicheskaya mysl' Uzbekskogo naroda XIX- nachala XX v.*, Tashkent.
- Niyozov, G., Ahmedov, Q., Tojiboev, Q., 2010, *Sharq allomalari va ma'rifatparvar adiblarining barkamol avlod tarbiyasiga oid ma'naviy-axloqiy qarashlari*, Toshkent.
- Ostroumov, N.P. 1896, *Sarti*, Tashkent.
- Ostroumov, N.P. 1913, "Musul'manskie maktaby i russko-tuzemniya shkoly v Turkestanskom krae", *Jurnal Ministerstva Narodnogo prosvesheniya*, Tashkent.
- Pardaev, Q.U., 2008, "Milliy uyg'onish davri manbalarida adabiy va punitistik muammolar talqini ("Al-Isloh" jurnali materiallari asosida)", Toshkent.
- Qosimov, B., 2002, *Milliy uyg'onish: Jasorat, Ma'rifat, Fidoyilik*, Toshkent.
- Qosimov, B., 2011, *Uyg'ongan millat ma'rifati*, Toshkent.
- Qurbonov, Sh., 1999, *Barkamol avlod orzusi*, Toshkent.
- Rakhmanov, M., 1981, *Uzbekskiy teatr s drevneyshikh vremen do 1917 goda*, Tashkent.
- Rizaev, Sh., 1997, *Jadid dramasi*, Toshkent.
- Salijanov G.F., 1998, *Turkistonda o'qitish-ma'rifat o'choqlari, ularning ijtimoiy ahamiyati (XIX asr oxiri-XX asr boshlari)*, Toshkent.
- Sodiqov, H., Jo'raev, N., 2011, *O'zbekiston tarixi Turkiston Chorizm mustamlakachiligi davrida*, Toshkent.
- Tillaboyev, S.B., Zamonov, A.T., 2010, *O'zbekiston tarixi (XIX asr ikkinchi yarmi – XX asr boshlari) 9-SINF*, Toshkent.
- Sharipov, R., 2002, *Turkiston Jadidchilik harakati tarixidan*, Toshkent.
- Shimada Shizuo, 2002, *An Index of Ayina*, Central Asian Research Series, No.5, Tokyo.
- Xidoyatov, G.A., 1992, *Mening jonajon tarixim*, Toshkent.
- Yo'ldoshev J.G., 2000, *Ta'lim yangilanish yo'lida*, Toshkent.
- Yo'ldoshev, S., 2001, *Ajdodlarimiz merosi- mafkuramiz gavhari*, Toshkent.
- Ziyaev, H., 1977, *Turkistonda ozodlik harakati tarixidan*, Toshkent.
- Ziyaev, H., 1999, "Jadidlar arakatining siyosiy va ijtimoiy-iqtisodiy zamini", *Jadidchilik: islohot, yangilanish, mustaqillik va taraqqiyot uchun kurash*, Toshkent.

参考資料

雑誌『アーイナ』

マフムードホジャ・ベフブーディー 「二つではなく四つの言語が必要なり」

1913年8月20日刊行 1号、12-14頁

Jasur Khikmatullaev 訳

我々トルキスタン人はテュルク語、ペルシア語、アラビア語とロシア語を知らねばならない。

テュルク語、すなわちウズベク語を学ぶ理由とは、トルキスタン人の大多数がウズベク語で話すからである。ペルシア語はマドラサと文学の言語である。現在に至るまでトルキスタン全土の旧方式および新方式の学校ではペルシア語の韻文や散文の本を使って教育が行われてきた。

全てのマドラサで法学と神学の書物はアラビア語で教えられているとしても、ムダッリスの解説と翻訳はペルシア語である。この規則、つまりテキストはアラビア語、講義はテュルク語、解説と翻訳はペルシア語であるのはとても素晴らしいことである。

トルキスタンでは昔からこの三つの言語が使われている。例えば、土地の古老には分かっていることだが、トルキスタンではかつてアミールやハンの命令書と勅書はいつもテュルク語で書かれており、また、同時に裁判の場と文学ではペルシア語が用いられていた。この慣行はもとより良いことである。

しかし、やがて、あるいは次第に教育方法と書き方に衰えが生じ、いまや知識人もしくは100人の学者の内99人がこの三つの言語を完璧に操ることができないというレベルに達した。つまり、教育方法を改革しなければならないのである。改革しようではないか。

トルキスタンのサマルカンドとフェルガナ地方にはペルシア語が話されるいくつかの都市と村がある。ブハラ政府の言語はペルシア語である。

ペルシア人の詩人や作家の作品は永遠の価値を待つ精神の宝庫であり、これを利用するためにヨーロッパ人は10億ものお金を使う。我々にとって幸いなことにテュルク語とペルシア語は教わらなくても知っている。テュルク語を母語とする者は皆ペルシア語を知る必要があり、ペルシア語を母語とする者は皆テュルク語を知る必要がある。

ペルシア語を知る者が、フィルダウシー、ベーディル、サアディー、「マスナヴィー」をととても愛好しているとすれば、一方テュルク語を知る者は、フズーリー、ナヴァイー、バーキー、サーミー、アブドゥルハック・ハミト、アクラムベク、サナイー、ナ

ービー、ナーギーを、また、トルストイやジュール・ヴェルヌなどの作家、現代の学者の著作のテュルク語訳を同じく楽しんでいるのである。

ヨーロッパやロシアの知識人の著作から益を受けることは、テュルク語もしくはロシア語とヨーロッパの言語を知ることによって可能になる。だから、現代のオスマントルコ人、カフカスとカザンのトルコ人は現代の学者の著作をテュルク語に翻訳し、普及させた。すなわち、テュルク語ができる者は現代を知っているということである。全ての新しく、ためになる本を様々な言語からテュルク語に翻訳したのである。アラブ文明がギリシャ人のソクラテス、ポクラテス（ヒポクラテス）、プラトンなどの著作を用いたように、現代文明もトルストイ、ジュール・ヴェルヌ、ケプラー、コペルニクス、ニュートンなどを用いる。本題から離れてしまった。

ロシア語を学ぶべき理由とは、我々はロシアの臣民、すなわち国民だからである。ロシア人と同じ市民権と財産権を持っている。しかし我々には能力がないことが残念である。銀行や商館、裁判所、公証所、鉄道など、つまり現代が生み出した全ての新しいものを必要とするならば、まず、第一にロシア語を知ることが必要である。

50 年も前から我々はロシアに属している。しかしこの間ロシア人とムスリムはまだお互いによく理解していないのである。我々の考えではロシア人は今日来て、明日出て行くというようなことはない。我々のこの間違った考えは、地理、歴史と現代を知らないことによる。

我々に必要なものは何か、自分たちの利益のためにロシア語を知ろう、公立の学校で勉強しよう。国の役職に就こう。祖国と自分の宗教のために仕えよう。ムスリムとして進歩しようではないか。現代の商業、産業と国の業務、さらにイスラーム教と祖国への奉仕はロシアの学問拔きに実現できない。例えば、現在のドゥーマ「国会」で自分たちの宗教と共同体の利益のために発言することが我々にも可能になる。しかし、我々にはこのように発言する人がいない。祖国と民族のために発言するにはロシアの学校で 10 年ほど勉強しなければならない。現代と法律を知らなければならないのである。

要するに、今日我々には四つの言語を操ることができる人材が必要なのである。すなわち、アラビア語、ロシア語、テュルク語とペルシア語である。

アラビア語は宗教にとってどれほど必要であろうと、ロシア語もまた生活のために必要である。

アラビア語ができなければ宗教、ロシア語ができなければ生活を失う。テュルク語とペルシア語が必要であることは言うまでもない。もう一つの言語と文字があり、全世界の人々はお互いにそれを使って話す。それはフランス語とその文字である。異教徒の学問と文字を習うことは、イスラーム法に反しない。

聖なるハディースから分かるように、預言者ムハンマドは信徒のザイド・ビン・サービトにユダヤ教徒の言語を勉強するように命令したという。そして、その方（ザイド・ビン・サービト）は預言者ムハンマドの命令でユダヤ教徒の言語を勉強し、預言者にユダヤ教徒から届く手紙を読んであげたという。（サヒーフ・ブハーリー、4巻、156頁）

しかし、神の恩恵を受けた御方たる預言者ムハンマドは支配力を持っていた。ユダヤ教徒は預言者に従っていた。現在は、ロシアが支配者であって、我々はロシアに従っている。我々は自分たちの生活のために彼らの言語を知らなければいけない。聖なるハディースが証明するとおり、ロシア語を学ぶことの正しさに反論する余地はないだろう。

マフムードホジャ

雑誌『アーイナ』

マフムードホジャ・ベフブーディー 「我々の希望もしくは願望」

1913年11月30日刊行 6号、130-132頁

Jasur Khikmatullaev 訳

周知のとおり、世界の人々はみな願望と希望を持って生きている。昼も夜も苦勞するのも未来のためである。人は皆自分の未来が良くなるように努力し、将来自分の夢や願望が叶うように休むことなく力の限り働く。人は日々苦勞しながらも、皆自分の将来と未来のためになにか良い希望を持ち、そして自分の目標を定める。そしてその願望と目標を達成するために努力し、毎日負っている苦勞をその目標を達成するために厭わず、さらに頑張る。時にはまるでその目標が達成されたと安心し、自分自身を慰める。また、誰一人としてその願望と目標を追及しない者はない。この願望と目標を学術用語では希望と言う。

さて、我々の希望に注目しよう。ほとんどの民衆の希望は働いてお金を稼ぐことであり、息子や娘の結婚式をあげることである。それはどんな結婚式だろうか？それは自分と同じ程度の人々の結婚式より立派な結婚式である。

貧しい職人の希望は結婚式である。自分は楽しい生活をせず、昼も夜もおよそ18時間あるいは20時間も働いてすごす職人がいる。食べ物も着る物も我慢する。10、20年間苦勞しながら働いて、結婚式をあげるために息子がさずかるように神に祈る。これこそが貧しい職人の希望である。

20年間働いて稼いだお金は3日間の結婚式でなくなり、「Ahmad Porina 哀れなアフマド」のように家屋と園庭も売ってしまう。結婚式の費用のために金貸しから逃げる。盛大な結婚式をあげて妻をめとった一部の貧乏人の状況には泣かされる。3日間の結婚式の「喪」は家族によっては10年、さらに一生続くときもある。しばしば結婚式は家を失い、家が荒れる原因となる。

一人の職人の結婚式では1000スム、中流の家族の結婚式では2000スムか3000スムかかる。準資産家の結婚式には4000-5000スムが必要である。このお金の75%は飲食に消える。このお金はもともと誰のお金だったのか。銀行・会社・高利貸のものだった。当然なことながら彼らにお金を返さなければならない。いったいどうやって返すのか。園庭や家屋、家具を売ってお金を返さなければいけない。哀れな新婚夫婦の掛け布団や服まで売って、高利貸に借金を返す。こうして準資産家も赤字になる。生前にはならなくとも、死んでからなる。妻は路頭に迷う。おお、これはいったい何なのか。正直言って、これは正気の沙汰ではない。何たることか。お金を借りてまで人々に結婚式のプロフをご馳走するのは狂気の沙汰ではないか。この病は不治である。

ある人が一度結婚式をあげ、その後、彼の家族から誰かが亡くなって葬式をすれば一巻の終わり。その家族が職人であれば、この世では再起もできず亡くなってしまう。さて、貧者が亡くなると、その親戚は体面を保とうと孤児の財産を人々に手ずから記念の贈物やピラフとしてふるまう。気の毒な孤児のパンを金持ちの人が持って帰るのである。「孤児の財産に手をつけるな。食べても飲んでももったいないことをしてはならぬ」というハディースはどこに行ったのか。ムスリムたちよ、このコーランの章句とイスラーム法の規定をいったい誰が実行するのか。そして、これを誰が人々に伝えるのか。毎日ムスリムの財産がバザールで宗教儀礼のために全ての財産が売られている。

また、毎日裁判所でどれほどの家屋や部屋、園庭が売られていることか。毎日どれほどの約束手形と引受拒否がなされ、どれほどの店や会社が破産していることか。これは何のためだろう。結婚式、葬式、喪、コプカリ、宴会のためである。

あるマハッラに読み書きができる人は 20 人のうち一人もいない。イスラームの教義を原典とともに知っている人は言うまでもない。将来カーディー（裁判官）がいなくなっても、現代の要請に対応できるカーディーになれる人は全トルキスタンの千万人の中に一人としていない。いない、いないのはなぜか。皆の衆！我々は愚か者なのか、それともまともなのか。もちろん...

雑誌『アーイナ』

マフムードホジャ・ベフブーディー 「我々の希望もしくは願望」

1913年12月7日刊行 7号、154－156頁

Jasur Khikmatullaev 訳

第6号の続き

我々は結婚式、葬式と儀礼のために我々のなけなしの財産を失い、儀礼が我々を貧しくし、借金を背負うことについて前号で書いた。今度は読者に質問する権利がある。これは良いことである。人は皆いずれの集団も希望と目標を持っているに違いない。我々は結婚式と儀礼のことを想って満足していた。我々の結婚式や儀礼を誇りに思っていた。結婚式や儀礼にかかるお金を貯えるため、もしくは手に入れるために働くのだった。

もし結婚式や儀礼に以前のように金が無駄使いしなければ、その金をどうすればよいのか？その答えは次の通りである。結婚式や儀礼をあげてもよい。しかし、現在のように無駄使いしてはいけない。可能な限り小規模にしよう。余った金を使って児童をイスラーム式とロシア式にしっかりと教育しよう。結婚式や儀礼にかかる金を古いマドラサ、廟、モスクそして学校の修理に使おう。結婚式や儀礼にかかる金を使って生徒を国の学校に通わせよう。またこの金で学生をメッカ、メディナ、カイロ、イスタンブールならびにロシアの大学や専門学校に送り、宗教的・世俗的、そして現代的な人材を育成するように努力しようではないか。

我々のトルキスタンには教師が少ないので、結婚式や儀礼に要する金を使ってカフカス、クリミア、オレンブルグならびにカザンに教育方法を習うために生徒を送らなければいけない。

国の学校に入学するにはロシア語を知らなければならない。また、試験を受けなければならない。そしてこの試験を受けるために各生徒に約2年間ロシア語を教えなければいけない。この2年間で各生徒に600スムが必要である。資産家の親は結婚式や儀礼のために金を惜しまないように、子供の教育にも金を惜しまないだろう。

生徒のために寄宿学校「パンシオン」を開かねばならない。この寄宿学校は近代的かつ民族的・宗教的な精神を備えなければならない。この寄宿学校を開校し、国立の学校に進む生徒を育てるために「教育普及」、あるいは「慈善団体」、あるいは「児童教育団体」、もしくは他の名前をもつ、要するに団体が必要である。

このような団体は民衆から資金を集め、民衆の児童を教育し、民族の未来のために必要なカーディーつまり裁判官、法学者つまり弁護士、エンジニアつまり工学者、先生つまり近代的な教師、民族に奉仕する人つまりドゥーマの議員、伝統的な産業を改良し、

復興する人つまり技術者、商館や銀行で我々を支援する人つまり商学教育を受けた「実業家」、都市のドゥーマやこれからトルキスタンに開かれるはずのゼムストヴォ（地方自治機関）の運営に我々から選ばれ、我々のために、祖国ロシアのために、宗教すなわちイスラーム教のために、貧しい人々のために、そして民衆のために働く人々を育てなければならない。

今の老人はさておき、中年の人々もやがて亡くなってしまう。時代は日々新たになり、新しい知識と新しい考え方をもち、現代の科学を備えた人々を要求する。今日から各都市から毎年 10－20 人ほどの学生が国立の学校に入学すれば、15 年後には各都市に 4－5 人は現代的な人材が育つ。そして官職や現代的な職場、商工の企業に就職し、我々に利益をもたらす。

これから来る時代は今とは異なる。今二人のムスリムが対立すれば、ユダヤ人と外国人の弁護士の所に行く。頭痛があれば外国人の医者の方に行く。どうして我々は自分で勉強し、現代人にならないのか？これから我々にとって結婚式、葬式、コプカリの代わりに、上記に述べたことが我々にとって希望・理想・願望・望み・目的になるように。そうでなければ、我々は日ごとに衰え、弱くなっていくだろう。なんということだろう！

『アーイナ』の編集者

雑誌『アーイナ』

ハージ・ムイーン 「未来の感慨」

1913 年 11 月 02 日刊行 2 号 10－12 頁

Jasur Khikmatullaev 訳

周知のとおり、あらゆる民族の発展は知識で可能になり、知識のある民族の未来は輝かしく、安定している。また、外国人にもその民族は偉大とされ、尊敬されるのである。知識のある先進的な民族の特徴は次のとおりである。初等学校はきちんとしており、中等・高等など多様なマドラサがある。このようなマドラサを卒業した青年は、活動的な人になり、その能力や水準に応じた仕事・業務・商業、そして宗教上の仕事に就くのである。

このようにして文明化した民族は自分たちの業務を自分たちで行い、どんな点でも他人の助けを必要とせず、楽々と暮らす。自分たちのマドラサで宗教的ならびに世俗的な科学と学問を十分に学ぶのである。だから、宗教も世俗的な仕事も失わない。

言い換えると、ある民族の生活と幸福は知識で可能になる。水なしでは魚は死んでしまうように、知識と統一なしでは民族は生きていけないことは当然である。私はここで科学や学問と並んで富、つまり財産については書かなかった。たしかに生活に必要な条件の一つはお金と財産である。なぜなら財産は科学の無限の成果の一部である。知識のある人は少し努力すれば、必ず裕福になる。上記に科学のある民族は生きていけると述べた。逆に無知な民族は全く生きていけないし、次第に消えていく。特に、今日、現代科学をもたない民族は生存できず、急速に消滅することは明らかである。

その昔、鉄道、船、電信、飛行機などのような文明の利器は存在しなかったため、世界の国々は相互に遠く離れ、お互いの軍事力と経済力を完全に把握してはいなかった。そのため国々が他国を攻撃するのは非常に困難なことであった。それゆえかつて、諸国の状況はめったに変化しなかった。しかし、現代、状況は全く異なっている。

知識と科学の発展のおかげで世界のあらゆる民族の状況は、文明化したヨーロッパ人の知るところとなっている。この世界は「生存競争」の場であるから、強いものは弱いものを飲み込む。この自然法則はあらゆる生物と無生物に当てはまる。例えば、西洋のアメリカは、東洋の日本が弱いと想定すると、海を渡って、一ヶ月で日本を侵略し、占領することが可能である。だから、現代の国々には次々と新たな事件がおこり、現代の武器で武装していない国は、祖国や独立を失うのである。

例えば、現代、知識不足と無関心のために天国のような都市を失い、およそ何 10 万人の兵士とむこの婦女子を失うことになったトルコ、そして無知、ならびに国内の陰謀と反乱のせいでいくつかの近隣の国の罠に落ち、瀕死の状況に落ちたモロッコの国を例と

して挙げられるが、これらは世の中を知る読者には明らかなことである。イランも同様である。

さて、本題に戻ろう。我々には現代に相応しい、すなわち、現代の我々の必要に応えられる学校、マドラサ、職業学校などと現代の科学と学問に通じているウラマー、資産家、商人や職人はいない。我々も他者のためにこの「生存競争」の場で虐げられないように、我々の知識と宗教、我々の財産と命を守っていききたいものだ。もしこのようにしなければ、我々の状態は次第に悪化し、子供たちの将来もなく、我々の宗教も生活も失われ、我々は衰退していくからである。まさに今から未来のことを考え、未来の確保のために努力することは、我々に必須の義務である。

ハージ・ムイーン・イブン・シュクルッラー

編集部

ロシアの現代的な学校、職業学校と大学は我々に開かれている。そこで勉強し、そして勉強させながら現代人の経済的な侵略からわが身を守らなければならない。この世界で生きるために世界の科学、そして現代の産業や職業で武装しなければならない。これなくしては、我々の結末は恐るべきものとなる。